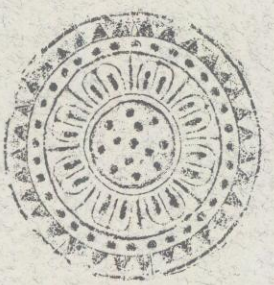
大宰府史跡

昭和49年度発掘調査概報



昭和50年3月

九州歴史資料館

大宰府史跡

昭和49年度発掘調査概報

昭和50年3月

九州歴史資料館

序

大宰府史跡の計画発掘調査事業は、今年になって7年次を消化している。この間をかえりみると、調査の焦点は大宰府政庁内の一画、都でいえば朝堂院に当る部分にすぎない。この中心地区で新しく明らかにされたことは、礎石上の建物以前に掘立柱の建物が実在したことであった。この事実は、まず南門阯、中門阯でたしかめられたことであるが、その後の調査では現存の礎石を動かすことが出来ないので、下層の探索については、徹底的な調査に欠ける所がないでもない。しかしこの地区だけでも現在のペースで完掘を行うとすれば、十数年を要するであろう。一方では史跡保存を早急に実施する必要から、今年度を以て一応の調査を終り、次の学校院、観世音寺地区に重点を移す計画を協議した。それでもなお、正殿前庭の石敷の問題や、北面回廊の補充調査を行うことに多くの時間を要した。なお前年度に新たに注目された、月山東南辺の官庁張出し部の存在に関連する月山南辺への調査区拡張も実施した。

以上のように、政庁中核部の調査は多くの余地を残してはいるが、年度内に環境の整備が急がれることとなった。

次に、政庁地区外で大宰府左郭の条坊内の地域を緊急調査する事情が生じた。この地区（西鉄五条駅南隣接地）からは、考古学雑誌（第60巻第3号）にも資料紹介を行ったように、貞応三年の紀年をもつ呪札が出土した。この木札に書かれた呪文の内容にも興味がもたれるが、今後出土遺物の層位関係からする年代決定に、一つの拠点を与えることとなるであろう。その他木製品のなかには、鼓胴や毬打具のような、実生活の側面をうかがわせる遺物もある。これ等の資料は、古代大宰府の文化財のみならず、中世の生活資料が当地方に埋蔵されていることを証明してくれた。

本概報はこれ等の多岐にわたる調査の経過と、出土状況に対する基礎資料の概要を示したものにすぎない。将来各項に対する総括と考察を行う機会は別にあるであろう。

昭和50年3月1日

九州歴史資料館々長　鏡山　猛

目　　次

序
I　調査計画……1
II　調査経過……2
1　概　　要……2
2　第33次調査……3
検出遺構……4
出土遺物……7
小　　結……35
3　第34次調査……37
検出遺構……37
出土遺物……39
小　　結……46
4　第30次補足調査……47
検出遺構……48
小　　結……52
5　第35次調査……53
検出遺構……54
出土遺物……56
小　　結……65
6　政庁東における柵遺構について……66

表　目　次

第1表　溝（SD605）出土土師器（坏・小皿）計測表……13
第2表　溝（SD605）出土磁器・陶器点数……14
第3表　溝（SD600）出土土師器（坏・小皿）計測表……19
第4表　溝（SD600）出土磁器・陶器点数……19
第5表　土坑出土土師器（坏・小皿）計測表……23・24
第6表　第33次調査出土木器計測表……29
第7表　第33次調査出土足駄計測表……31
第8表　第33次調査出土貨幣計測表……34

挿　図　目　次

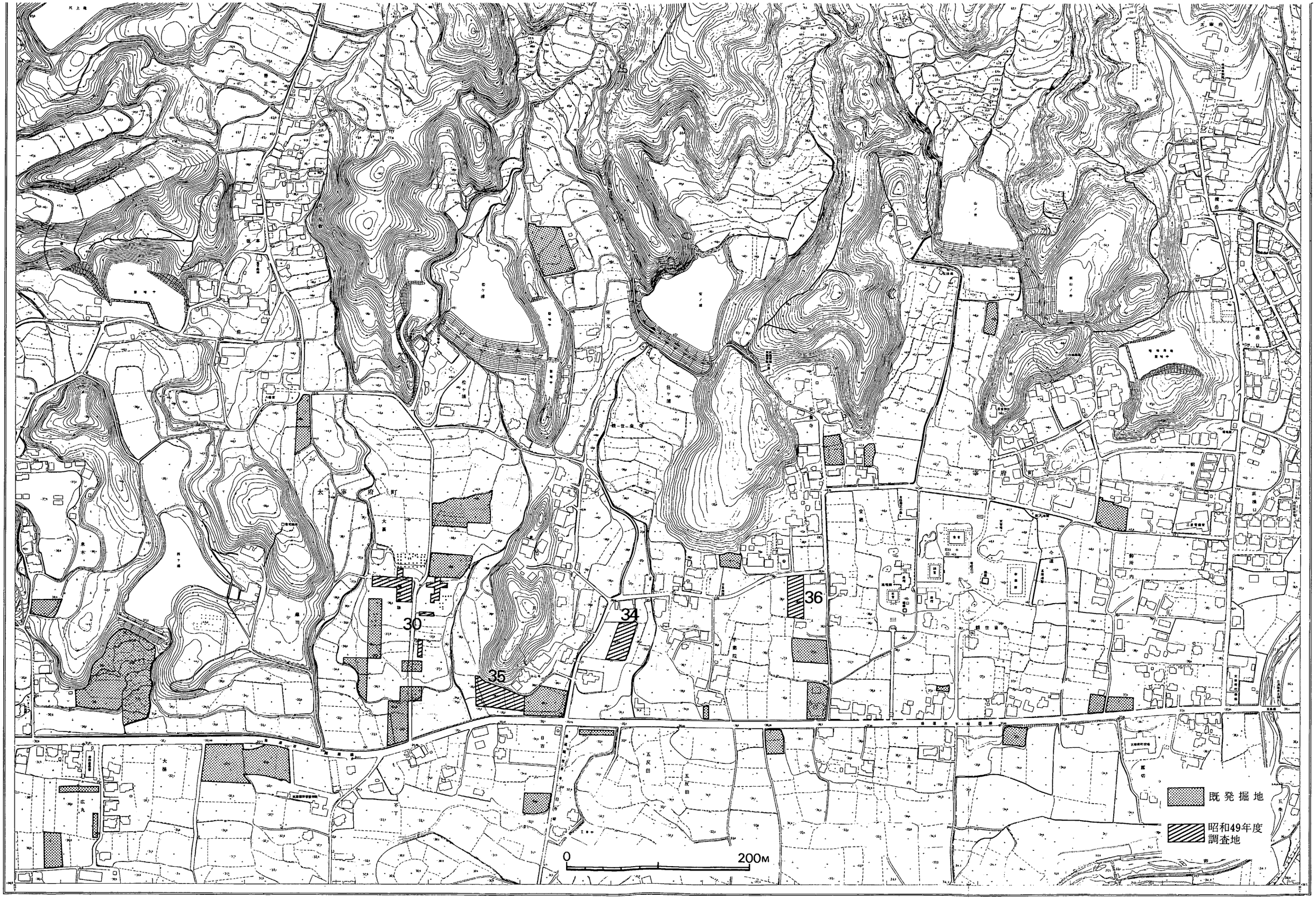
第1図　大宰府史跡発掘調査地域図……折込み
第2図　第33次発掘調査周辺図……4
第3図　第33次発掘調査遺構配置図……折込み
第4図　溝（SD605）土層図……5
第5図　井戸（SE651）実測図……6
第6図　溝（SD605）出土土器実測図Ⅰ……8
第7図　溝（SD605）出土土器実測図Ⅱ……11
第8図　溝（SD605）出土土器実測図Ⅲ……12
第9図　溝（SD600）出土土器実測図……16
第10図　溝（SD600）出土壺実測図……17
第11図　溝出土陶磁器……18
第12図　Aトレンチ土坑出土土器実測図……20
第13図　土坑出土土器実測図……21
第14図　第33次発掘調査出土木器実測図……28
第15図　鼓　　胴……30
第16図　第33次発掘調査出土足駄実測図……30
第17図　第33次発掘調査出土特殊遺物実測図……32

第18図　第33次発掘調査出土貨幣拓影……33
第19図　井戸（SE669）実測図……38
第20図　第34次発掘調査遺構配置図……折込み
第21図　第34次発掘調査出土土器実測図……40
第22図　第34次発掘調査土器溜（SK674）出土土器実測図……42
第23図　第34次発掘調査出土土器実測図……43
第24図　第34次発掘調査出土瓦塼拓影……45
第25図　第34次発掘調査出土文字瓦拓影……46
第26図　第30次補足調査トレンチ配置図……47
第27図　第30次補足調査Aトレンチ遺構配置図……48
第28図　第30次補足調査Bトレンチ遺構配置図……50
第29図　第30次補足調査C・Dトレンチ遺構配置図……51
第30図　第30次補足調査E・F・G・Hトレンチ遺構配置図 ……52
第31図　第35次発掘調査遺構配置図……折込み
第32図　第35次発掘調査出土土器実測図……57
第33図　第35次発掘調査土坑（SK678）出土土器実測図……60
第34図　第35次発掘調査土坑（SK678）出土軒丸瓦拓影……61
第35図　第35次発掘調査出土軒丸瓦拓影……62
第36図　第35次発掘調査出土軒平瓦拓影……63
第37図　第35次発掘調査出土文字瓦拓影……64
第38図　第31・34・35次調査結果遺構配置図……67

図版目次

図版1　第33次発掘調査全景
図版2　（上）第33次発掘調査東半部ピット群
　　（下）第33次発掘調査SD605
図版3　（上）第33次発掘調査AトレンチSD600
　　（下）第33次発掘調査SE651
図版4　（上）第34次発掘調査全景
　　（下）第34次発掘調査SB665

図版５　第34次発掘調査SA670･SB665
図版６　（上）第34次発掘調査SK673
　　（下）第34次発掘調査SK673
図版７　第30次補足調査Aトレンチ
図版８　第30次補足調査Bトレンチ
図版９　第30次補足調査C･D･Hトレンチ
図版10　第30次補足調査E・Fトレンチ
図版11　第35次発掘調査全景
図版12　（上）第35次発掘調査SD689
　　（下）第35次発掘調査SD687･SD688
図版13　（上）第35次発掘調査SA560
　　（下）第35次発掘調査SK678
図版14　第33次発掘調査溝SD605Ⅰ層・Ⅱ層・Ⅲ層・Ⅳ層出土土器
図版15　第33次発掘調査溝SD605Ⅳ層出土土器
図版16　第33次発掘調査Aトレンチ溝SD600Ⅰ層・Ⅱ層・Ⅲ層・Ⅳ層出土土器
図版17　第33次発掘調査土坑SK636･639･624･641出土土器
図版18　第34次発掘調査土坑SK674･井戸出土土器
図版19　第34次発掘調査出土土器
図版20　第35次発掘調査土坑SK670出土土器
図版21　第35次発掘調査出土土器
図版22　第34次発掘調査出土軒先瓦・文様塼
図版23　第35次発掘調査出土軒先瓦
図版24　第33次発掘調査出土木製品
図版25　第33次発掘調査出土足駄
図版26　第33次発掘調査出土墨書木札・絵馬
図版27　第33次発掘調査出土土製品・石製品
図版28　第33次発掘調査出土鉄製品



第１図　大宰府史跡発掘調査地域図

I　調査計画

大宰府史跡の発掘調査は昭和43年第1次調査として政庁地区の南門、中門において開始して以来、調査の焦点を政庁地区において進めてきたが、昭和48年度に行った西脇殿の調査をもって、この地区における建物の配置、規模等について一応明らかにすることができた。すなわち第1次調査の南門、中門、第6次調査として回廊西南隅、第15次調査として回廊東北隅、第26次調査として正殿後方築地東北隅、第30次調査としての西脇殿であり、都合5ヵ次にわたる調査を行ったことになる。この間下層遺構としての掘立柱建物の存在することが新しく明らかになるなど幾多の成果を上げることができた。この掘立柱建物については上層遺構に礎石建物があるため十分な調査は行われていない。この点については今後の課題として残されている。

昭和49年5月8、9日の両日に開催した昭和49年度大宰府史跡発掘調査指導委員会議において、これまでの発掘調査結果をもとに協議がかさねられた。席上政庁地区についてはいくつかの問題点を残してはいるが、これらの点については今後の調査に待つこととし、政庁地区に比較して発掘調査開始以来調査の要望の強かった学校院地区については、これまでに、ほとんど調査がなされておらず史跡保存のうえからも早急に遺構の状況について知見を得ることが必要ではないかとの意見が出された。協議の結果、土地公有化の遅れなど困難な事情は伴うが昭和49年度からは調査の重点を学校院地区に置くこととなった。また指定地外における宅地造成等の開発は依然進んでおり、この指定地外すなわち条坊地区についても極力調査を行っていくこととし昭和49年度の調査は次の個所において行うよう計画した。

	調　査　地　域	調査期間	調査面積	備　　考
1	大字太宰府字月見山	5月～7月	1,500m²	左郭八条九坊（緊急調査）
2	大字観世音寺字学業院222	〃	600m²	学校院中央部
3	〃　字月山547－2·3	8月～11月	1,870m²	〃　西辺部
4	〃　〃　字学業院206－1	12月～2月	930m²	〃　東辺部

すなわち49年度当初の調査として筑紫郡太宰府町大字太宰府字月見山について1,500m²にわたる宅地造成の申請が出され、当該地が条坊制の上から推定左郭八条九坊にあたるため、この条坊遺構の確認のための調査を行うこととした。次に学校院跡については土地の公有化がおくれており調査についてはかなりの制約が予想されるが、(1)大宰府史跡発掘調査開始以来遺構確認の要望が強かった学校院中央部、(2)昭和48年度第31次調査で検出した柵に関連して学校院西辺部、及び(3)昭和46年度第9次調査地域の北方の学校院東辺部について調査を行うこととした。

II 調査経過

1．概要

昭和49年度当初の調査として、さきに宅地造成の申請が出されていた大字太宰府字月見山（第33次調査）について着手することとした。この地域は早くから申請が出されていたが調査体制がととのわず工事着工を延期させた事情もあって49年度当初の調査とし5月27日から表土剝ぎにかかった。調査の結果は発掘地域東半部において2条の南北溝を検出した。この溝の位置は政庁中軸線からほぼ九町の所にあり、左郭九坊にほぼ一致している。この調査は大宰府条坊復原のうえにおいて貴重な資料をもたらしたといえる。さらに溝の最下層からは多量の土師器、青白磁とともに貞応三年の紀年をもつ木札が出土し、太宰府周辺における出土遺物の年代決定に一つの大きな拠点を得ることができた。この第33次調査終了とともに当初計画した学校院中央部の調査に着手する予定であったが当該地が私有地であり、この段階では土地所有者との話し合いがつかず、やむを得ず計画をくりあげ8月7日から学校院西辺部の調査を第34次として調査に着手した。この調査は第31次調査(註1)で検出した東西にのびる柵の東限を確認するとともに学校院西辺部における遺構の状況について知見を得ることを目的としたものであった。調査の結果、発掘地域内で南からのびる柵が西へ折れまがる東北隅を確認することができた。したがって第31次調査の結果を考え合せると月山の東側には柵によって区画された官衙の存在する可能性が強くなった。この調査は9月26日に終了した。この第34次調査の終了とともに環境整備事業の事前調査として政庁回廊内の調査を行った。この調査は第30次調査(註2)として西脇殿の調査を行った際、脇殿前面には玉石敷遺構の存在することが明らかとなったが、その具体的な様相については必ずしも明確ではなく若干の疑問点が残されていた。このため昭和49年度環境整備事業の開始に先立ち、玉石敷について、より具体的な知見を得るため回廊内にトレンチを設定して調査を行うこととした。調査の結果は第30次調査結果にもとずいて推測したのとは異なり、東西両脇殿にはさまれた部分はすべて玉石敷である可能性がきわめて強く、しかも正殿前面の一部は一段高く玉石が敷かれていることが判明した。しかしながら、その玉石敷の大半は後世に抜かれており、細部についてはかなりの疑問点を残している。この調査は12月16日終了した。この30次補足調査と併行して11月1日から第35次調査に着手した。この調査は年度当初に予定した学校院中央部の土地借上げ交渉が結局成立せず、今年度もこの地域の調査を断念することとし、そのふりかえとして第31次調査で検出した柵の西限の確認を目的として第31次調査地の西隣接地を調査することとした。調査の結果発掘地域西半部において南北にのびる玉石敷溝および斜めにのびる玉石敷溝を検出した。しかしながら柵の遺構は検出できなかった。このため第31次調査地との間に残された私有地について調査協力方を土地所有者に依頼したと

ころ了解が得られたので昭和50年1月10日この拡張区の調査に着手した。この結果南北にのびる柵を検出し、この一画が柵の西南隅であることを確認した。この調査とともに第31次、第34次調査結果を総合して政庁の東側には柵によって囲こまれた何らかの官衙の存在することが明確となった。また昭和50年2月7日から今年度最後の調査として学校院東辺部において第36次調査として開始した。この調査は現在も継続中であり、報告については次回にゆずる。

なお昭和49年度の発掘調査地を地区別に別記すると下記の表のとおりである。

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間
第33次	6AYB－C（M）	900㎡	1974. 5. 27～1974. 9. 9
第34次	6ZGK　（P）	720㎡	1974. 8. 7～1974. 9. 26
第30次補足	6AYT－B	540㎡	1974. 9. 9～1974. 12. 16
第35次	6AYT－C（H）	1100㎡	1974. 11. 1～1975. 2. 26
第36次	6ZGK　（B）	720㎡	1975. 2. 3～

註1）　九州歴史資料館『大宰府史跡第30・31・32次調査概報』1974

註2）　同上

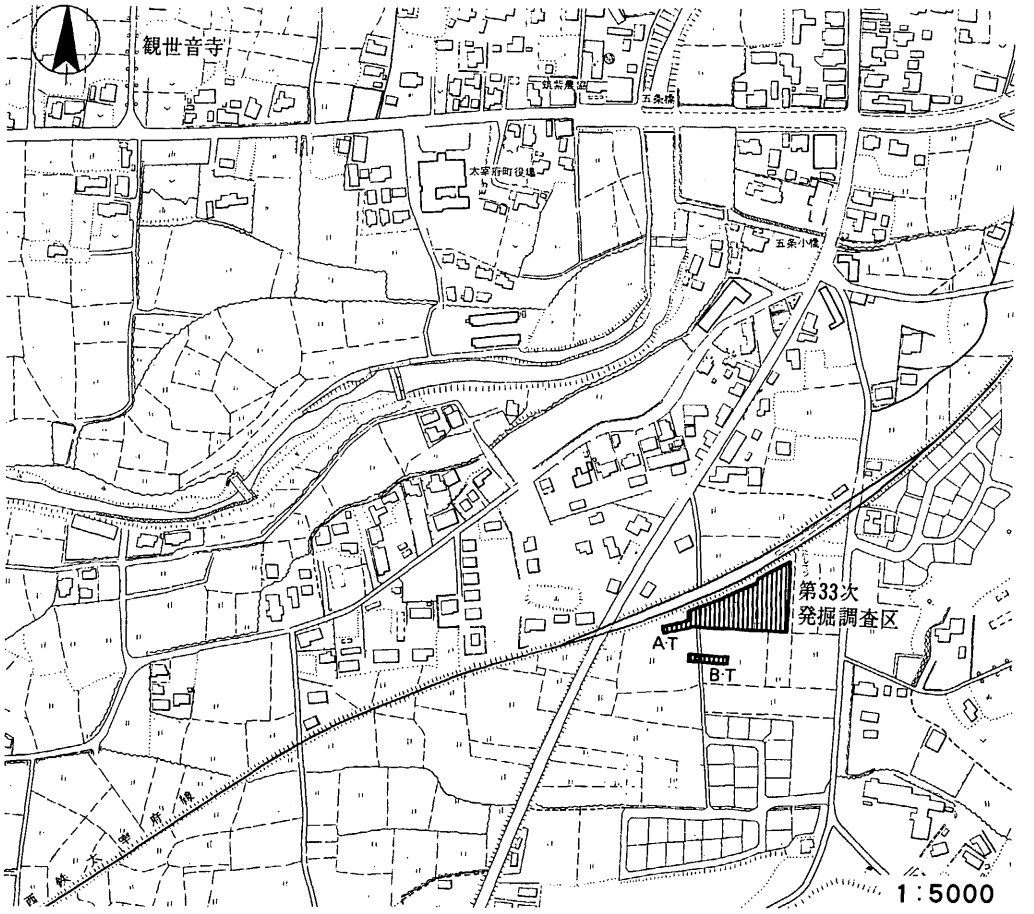
2．第33次調査

第33次調査として条坊復原による左郭の8条9坊の推定地の調査を行った。今回の調査は宅地造成による事前調査である。調査地域は県道古賀－二日市線の東側で西鉄五条駅の南側に位置する。地番は筑紫郡太宰府町大字太宰府字月見山2477～6，2730～2番地である。

発掘調査は期間等の関係から対象面積の一部である約900㎡について実施し、発掘作業は昭和49年5月27日より開始した。

発掘区設定にあたり、調査地区のほぼ中央部に南北方向の道路（幅2.5mのもので現状は農道)があり、これが政庁中軸線からほぼ9町の位置にあることを考慮しこの道路を含み南北28.0m、東西40.0mの発掘区を設定した。調査の結果発掘区域の西端部で南北方向の溝（SD 605）が検出されたため、この地区を一応終了した時点（8月28日）で補足調査として幅3mのトレンチを西へ16.5m延長し（Aトレンチ)、また南側に28mの距離をおいて、南北方向の溝（SD 605）の延長線上に東西方向に12.0mのBトレンチを設定し調査した。その結果Aトレンチで溝(SD600）を検出し、Bトレンチでは　SD605溝の延長を確認することができた。

調査期間が梅雨期にかかり、また湧水が著しく作業に手間どったが、9月9日をもって全作業を終了することができた。調査終了後この地は約1.5m程の盛土によって整地された。



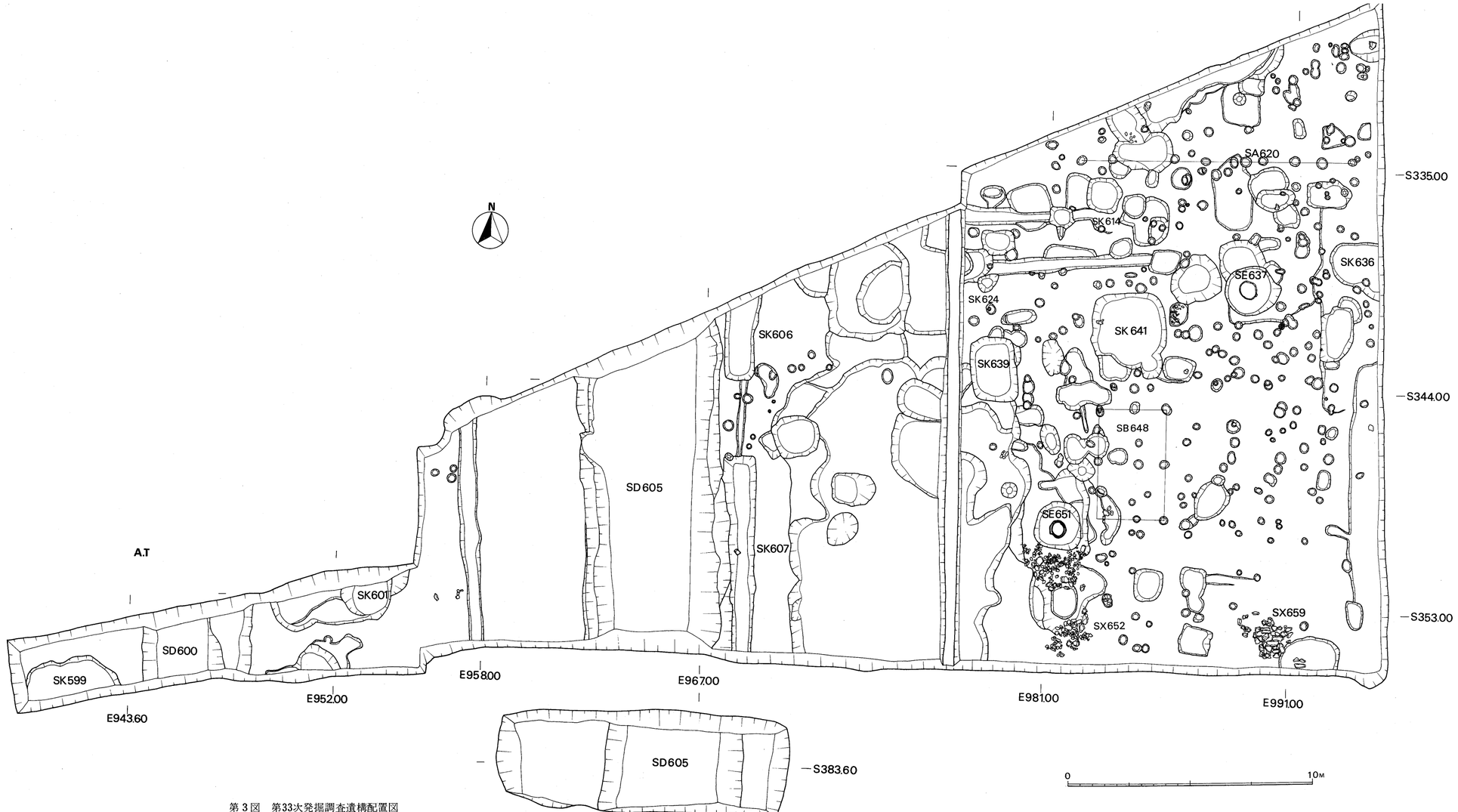
第２図　第33次発掘調査周辺図

検出遺構

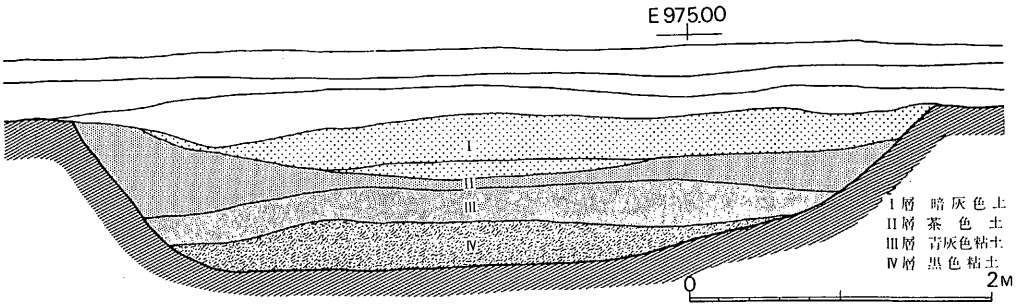
第33次調査において検出した主な遺構は溝（２条）、井戸（２基）、柵、掘立柱建物(１棟)、土坑、ピット群などである。今回とくに注目される遺構は南北方向の溝２条（SD600・SD605）である。とくにSD605からは「貞応三年」の紀年をもつ木札が出土した。

以下各遺構について記述する。

溝（SD605・SD600）　東・西に位置する２条の溝である。東側に位置するSD605はほぼ真南北方向に方位をとる幅5.8m、深さ1.2mを測るかなり大きな溝である。Ｂトレンチ発掘の結果からさらに南・北へのびるものと考えられる。溝の埋土は大きく４層に分かれ、紀年銘の木札は最下層の第Ⅳ層から出土した。第Ⅰ層は炭混りの暗灰色を呈する粘質土であり、第Ⅱ層は



第３図　第33次発掘調査遺構配置図



第4図　溝（SD605）土層図

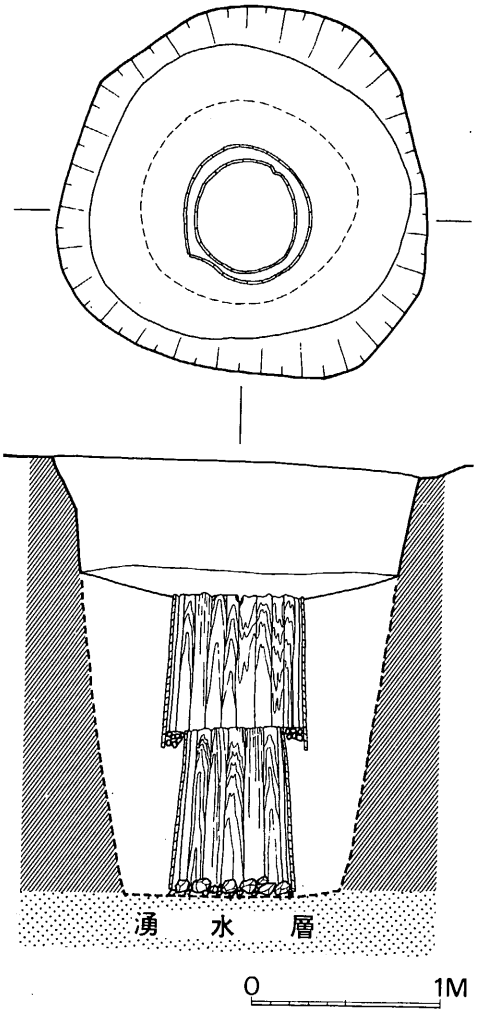
砂礫混りのやや堅くしまった茶色土からなっている。第III層は青灰色の粘土層で中心部分の層はうすくなっている。第IV層は黒色粘土の有機質層で植物質の腐植物が堆積した層からなっている。これは20～30cmの厚さで堆積しており、一種の溜りの様相を呈している。この埋土の層序はBトレンチでもほとんど変化はみられなかった。第IV層からは土師器・青磁・陶器・瓦器とともに多量の木製品や自然木の残片が出土した。木製品は第III層より上層ではみられず、第IV層ではその保存状態も良好であった。また溝の形状はほぼU字状を呈するが、底部は平らである。底部は砂礫層が露出する。（この砂礫層は、部分的に掘り下げた結果では、多少の高低差はあるが普遍的にみられ、遺物は含まれていない。）

補足調査として実施したAトレンチ検出のSD600溝は前述のSD605に比較してやや規模が小さく幅4.2m、深さ0.8mのものである。形状はSD605とほぼ同じであるが、東壁の中位で段をもつ。幅3mのトレンチでの検出のため小範囲ではあったが、溝の埋土の状態はSD605のそれと大差なく、南・北方向に延びるものと思われる。

この2条の溝の検出でとくに注意されることは、条坊復原による左郭8坊と9坊の区画線がこの付近にあたることである。ちなみに政庁中軸線からSD605(註1)の中心線までの距離は約970.14m、SD605とSD600の中心までの距離は約960.54mである。またSD605の西岸とSD600(東岸)間の距離は14.8m（約49尺）である。

井戸（SE637）　発掘区の東北部で検出したSE637は掘り方の径が約2.0mのほぼ正円のもので深さ2.0mを測る。井戸枠は桶側様のものであり、おそらく数段積み重ねられたものと考えられるが保存状態が悪く最下段のみ残存していた。残存の枠は上端部がすぼまった形状で、上端部径73.0cm、下端部径80.0cm、高さ90.0cmを測る。桶側は幅8～8.5cm、厚さ2.8cmの板26枚からなっている。この井戸底からはわずかの木製品と土器片が出土している。

井戸（SE651）　この井戸はSE637から南へ約10mのところに位置している。SE637に比較して保存状態は良く2段分が残存していた（第5図）。SE637同様桶側様の枠のものである。掘り方は不正円形のもので径2.0m、深さ2.30mあり、下方にすぼまった感じである。残存している2段の枠の高さは1.6mある。最下段の枠は上端部径45cm、下端部径55.0cm、高さ85cmを測る。



第５図　井戸（SE651）実測図

二段目は上端部径70.0cm、下端部径75.0cm、高さ70.0cmである。重なりの部分は10.0cmで、間には礫をつめている。また底部には10cm大の石を並べている。これからは土師器の坏・皿の破片とともに完形の鉄鍋と石鍋、それに五徳（鉄輪）が出土した。井戸の周囲にあるSX652の礫群は井戸に付属するものと考えることも出来るが、攪乱が激しく明確でない。SE637・651ともに湧水は著しい。

柵（SA620）　発掘区の東北部で検出したSA620は東西方向の柵（杭列）で10柱間分を検出した。柱間の間隔にはややずれがあるが、平均すると約1.30mのものである。柱穴の大きさは30～40cmである。

掘立柱建物（SB648）　SE651井戸の東側で検出したもので、２間×２間の南北棟である。柱間にややずれがあるが一応建物と考えた。梁行1.40m（約4.6尺）、桁行2.25mで、間仕切り状の柱間間隔は西が大きく1.65mと1.15m、南側梁間も同じ大きさである。

ピット群　SD605の東側一帯で多数のピットを検出した。これらのピットはおそらく建物の柱穴ないし何らかの施設のものと考えられるが、まとまるものは少ない。これらのピットはSD605の東北部に集中しており、南へいくに従って少なくなる。これらの多くは径20～30cmのもので深さは一定しておらず、その埋土は多く炭化物の混入した暗灰色土であり土器の小片を含んでいる。これらの中にはSA620、SB648のようにまとまるものもあるが、多くは明確でない。

土坑　今回検出した土坑は約30個であり、規模の大きさで異なり、また形態として方形と円形のものがみられる。SK641は大きいもので方形状を呈し、径3.0m、深さ0.5mあり、又SK636は円形で直径1.7m、深さ0.2mある。SK624は比較的小規模のもので直径約1.3m、深さ約0.24mである。土坑埋土はその多くが暗灰色の粘質土であり、SK641とSK636には著しい炭層がみ

られ、数枚重ねられた状態の完形の土師器の坏・小皿が多数出土した。またSK641、SK606、SK614などからは土師器と共伴して宋銭が出土した。

出土遺物

今回の調査で出土した遺物は土器（土師器・磁器・陶器等)、木製品（墨書木札・鼓胴・毬打具・足駄等）、石製品(硯等)、金属製品(鍋等)、瓦類、それに貨幣(宋銭)がある。これらのうち最も出土量が多く、各遺構から普遍的に出土したのは土器で、その量はかなりにのぼる。その次は木製品で主として溝（SD600 ・ SD605）から出土した。その他の石製品、金属製品、瓦類はそれに比較するとわずかであり、石製品が10数点あるほかは数点出土したにすぎない。貨幣は主として土坑から出土したもので10数枚出土した。以下、出土した遺物について遺構別また遺物ごとに記述したい。

土　器

土器は出土遺物中最も多量である。そのほとんどは破片であるが、今回は完形もしくはそれに近いものもかなりみられる。土器の中には大きく分けて、土師器、磁器、陶器があり、そのうち土師器の坏・小皿類が圧倒的に多く全体の約90%近くを占めている。土器は各遺構から普遍的に出土したが、とくに溝（SD600・SD605）と土坑（SK599 ・ SK601・SK636 ・ SK641）からはまとまって出土した。今回特記すべきこととして溝SD605の埋土の第Ⅳ層(最下層)から「貞応三年」銘木札と共伴して土師器（坏・小皿）類、磁器、陶器等が出土したことである。土器の記述にあたり、ここでは各遺構別（溝出土のものについては層位別）に述べたい。

SD 605溝出土土器（第6～8図、図版14･15）

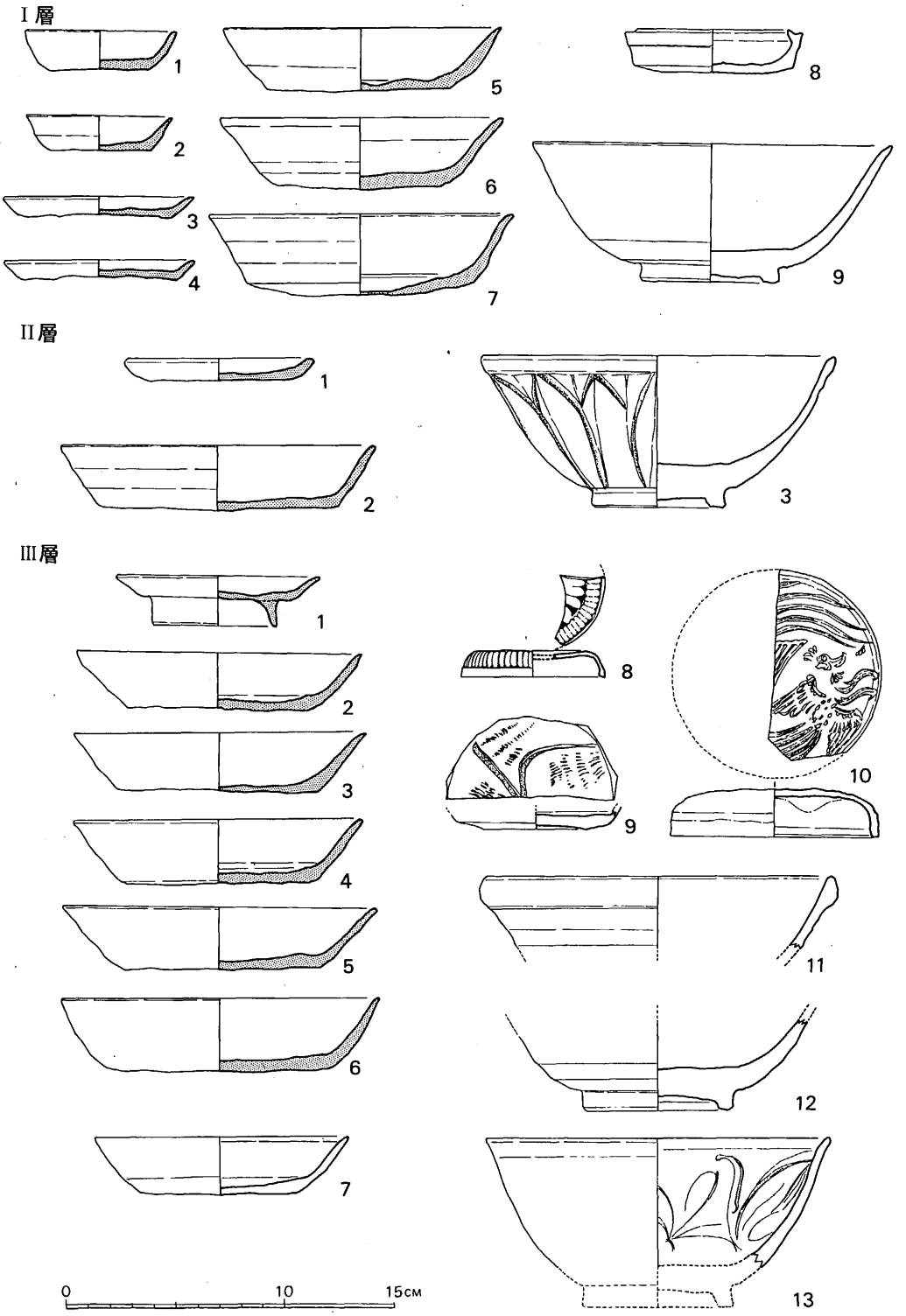
SD605については先の遺構の項で述べたのでここでは省略するが、溝の埋土は大きく4層に分かれており、各層位ごとの出土量は第II層は少なく他は大差なく、やや第III・Ⅳ層が多い。種類として土師器（坏･小皿)、磁器、陶器、須恵器系土器、瓦器があるが、土師器の坏・小皿類が90%以上を占めている。記述は各層位別に進めていくが、土師器の坏・小皿の口径・器高等は第1表にまとめたので文中では出来るだけ省略したい。また磁器については第2表と図版14を参照されたい。

第Ⅰ層（第6図Ⅰ－1～9）

Ⅰ層には土師器（坏・小皿)、磁器（青磁・白磁・青白磁)、陶器（褐釉(第11図－17)・黄釉(第11図－11・14))、須恵器系土器（鉢）がある。

土師器（1～7）

土師器には坏と小皿の二種類がある。さらに小皿は二種類ある。1～4は小皿で1・2は3・4に比べ口径が小さく器高が高くなる。1～4は胎土に微砂を含有し粗く、体部はヨコナデ、内底部はナデ調整を行なっている。底部には簾状痕を有する。3・4は比較的体部がうすく、口



第6図　溝（SD605）出土土器実測図Ⅰ

縁端部は更にうすくつまみ上げている。5～7は坏で、口径・器高・底径に若干の差がみられる。胎土・手法とも前述の小皿と同様である。5の体部は直線的で、口縁端はうすく引き上げている。6は体部中位で外反し体部下位はやや円味をもつ。7は5・6に比べ大ぶりで口縁端がわずかに外反し底部はやや円味をもつ。この他にまた須恵器系の摺鉢の小片が2点あり、1点には、幅広の櫛目のものがある。

磁器（8・9）

8は青白磁（影青）の合子の身の部分である。器高が低く扁平な、いわゆる平形の合子である。完形で口径6.8cm、器高2.0cm、底径7.2cmを測る。蓋受けの立ち上がりは短かく、体部中位に段がある。胎土は灰白色で、釉色はやや黄色を帯びた青白色を呈する。釉薬は薄目で、外面の体部中位以下および底部には釉はかかっていない。又貫入がみられる。9は竜泉窯系青磁の碗で、口縁部の一部を欠くのみで、ほぼ完形のものである。口径16.0cm、器高6.2cm、高台径6.2cmを測る。底部から体部にかけて円味をもち、口縁端部はわずかに外反する。胎土は灰色に近い濁白色で、釉色は暗緑色(よごれた色)を呈し光沢はない。釉薬は薄目で高台の底部および高台の見込みの部分には釉がかかっていない。又内外面とも文様はない。第2表－C・第11図－1にあたるものである。

第II層（第6図II－1～3、図版14）

II層には土師器（坏・小皿）、磁器（青磁・白磁・青白磁）、陶器（褐釉・黄釉）がある。

土師器（1・2、図版14－2）

坏と小皿があり、1・2は胎土・手法とも同じで、1は前述のI－3・4に比べ体部および口縁部の器肉が厚くぼってりしている。2はI－5・6・7に比べ口径がやゝ大きく、口径と底径の差が小さい。体部はうすく直線的である。

磁器（3、図版14－3）

3は竜泉窯系青磁の碗である。ほぼ完形で、口径16.0cm、器高 7.0cm、高台径6.0cmを測る。体部中位で薄くなり、口縁部はわずかにふくらむ。外面には蓮弁があり弁の先端が尖っており、弁の幅は狭く、弁中央は盛り上がっている。いわゆる鎬手のものである。胎土は灰白色でやや粗い感じのものである。釉色はやや緑がかった透きとおった空色を呈する。いわゆる粉青色のもので光沢がある。釉薬は厚目である。第2表A、第11図－4にあたる。(註2)

第III層（第6図III－1～12、図版14）

III層には土師器（坏・小皿）、磁器（青磁・白磁・青白磁）、瓦器質土器（甕）がある。

土師器（1～6、図版14－1）

坏と小皿があり、1のように高台の付いた小皿があるが、これは数点あるのみである。皿部は口径9.2cm、器高1.0cmである。全体にうす手で調整は比較的丁寧である。2～6は坏で胎土・手法とも前述のものと同じく、2はやや小ぶりで口縁部はうすくわずかに外反する。3・4の

体部はほぼ直線的で５・６は内湾気味である。６は体部下位が円味を帯びている

磁器（７～12）

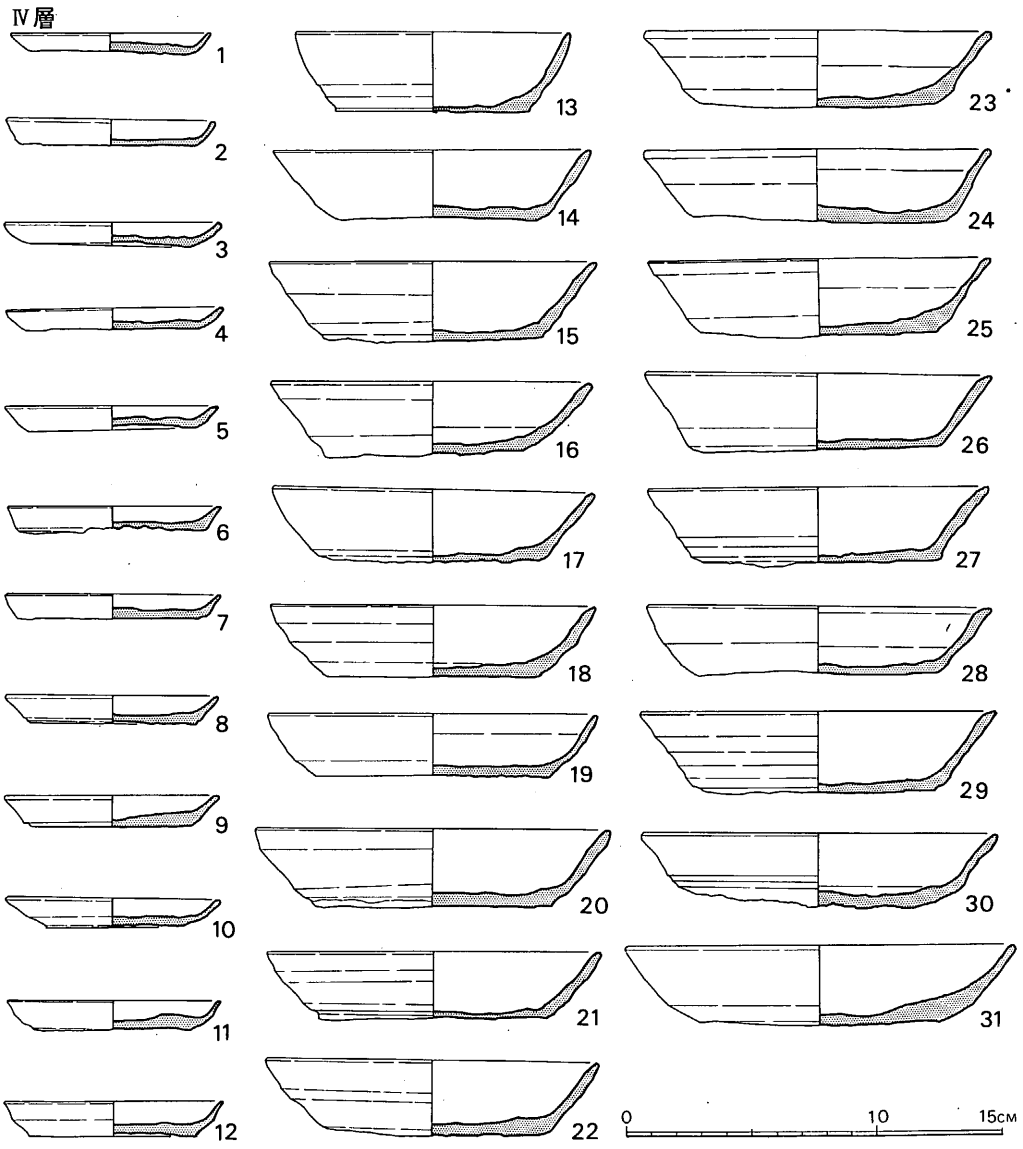
７（第11図－５）は景徳鎮窯系の影青の合子の蓋である。天井部が平らたい平形の合子である。⅙残存する小片であるが、復原口径6.6cm、器高1.2cmを測る。側面に菊座形の、また天井部に花形の型抜き文様がある。天井部の文様に大きい特徴がみられる。全体にうす手で、天井部中心がへこみ、口縁部は厚く稜をなす。胎土は灰色で釉色は黄色味をおびた透きとおった空色を呈し光沢がある。施釉は内面では中心部分に一部あるのみで他はなく、外面には全面に施されている。８は同安窯系青磁の皿である。底部の½が現存する。全形を知り得ないが浅い無高台の器形である。底部は上げ底状を呈し、ヘラ削りである。細沈線の円圏で区画されたみ込みに草花文と櫛描きの施文がみられる。胎土は灰白色を呈し密である。釉色はやや空色を帯びた淡緑色である。外底部には施釉されていない。９は景徳鎮窯系の影青の平形合子の蓋である。½残存しており、復原口径は9.4cm、器高2.2cmを測る。天井部に双鳳の型抜文様がある。文様の線は太く、粗っぽい感じである。うす手で口縁部はやや厚くなっている。胎土は純白に近く、釉色は淡青色の透きとおった空色を呈する。影青と称するものの典型的なものである。施釉は外面には全面にされ、内面は中心部のみ薄くかかっている。10（第11図－９）は口縁部の小片である。復原口径15.6cmを測る。口縁部折り返した玉縁状の口縁をもつ。折り返し部分の厚さは約0.7cm、幅1.4cmである。釉色はやや黄味を帯びる白色のものである。11は竜泉窯系青磁の碗である。底部と体部の一部が現存する。前述のⅠ層－９、Ⅱ層－３（註３）と同じであるが釉色は黄色味の強い緑色を呈する。み込みの中心に「金玉満堂」の刻印を有する。12は同安窯系青磁の碗である。⅙残存しているが、復原口径が15.6cmある。内湾気味で、口縁部で外反する。胎土は濁灰白色を呈し、釉色はうすい空色を呈した緑色である。釉薬はうすく、余り光沢がない。内体部に細い線の草花文がある。

第Ⅳ層（第７図Ⅳ－１～31、第８図１～９、図版14）

Ⅳ層には土師器（坏・小皿）、磁器（青磁・白磁・青白磁）、陶器（褐釉・黄釉）、瓦器（埦）、瓦質土器（火鉢）がある。

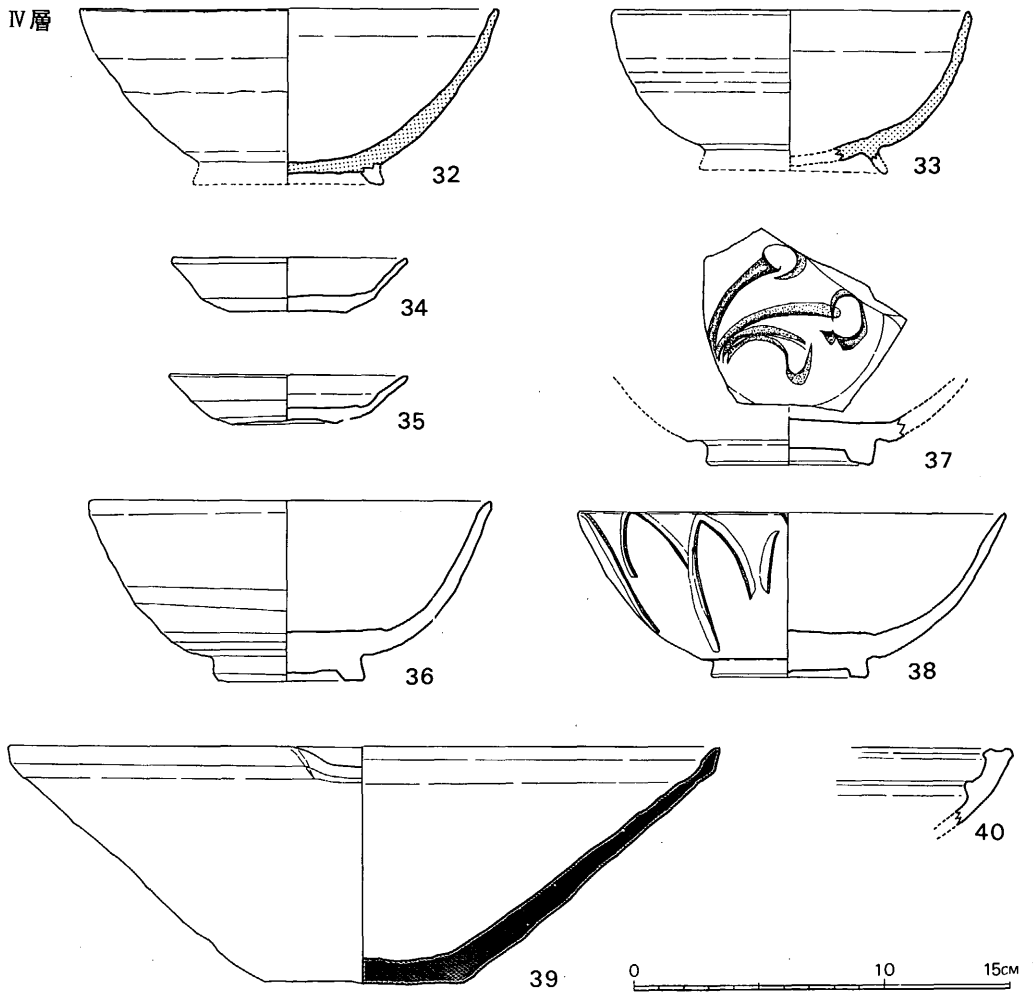
土師器（第７図１～31、図版15）

土師器には坏・小皿の二種がある。小皿１～12は口径7.8cm～8.4cmのもので大差ないが、8.4cm前後のものが多い。体部と口縁部のつくりに若干の差がみられる。１～３はうす手で内湾し、口縁端に円味がある。４～９はやや外反気味で口縁端をうすくつまみ上げている。10～12は先述のものとやや異なった特徴を示し体部がうすく体部中位に稜をもつ。13～31は坏で、13を除いて口径12.2～15.0cmの範囲のものである。12.0cm前後のものと13.0cm前後のものが主である。13は他に比べ口径が小さく、特殊である。14～17は体部がうすく、ほぼ直線的である。18～22は内湾気味のもので23～25は口縁部がわずかに外反する。26～29は体部が外反気味で口縁部が



第7図　溝（SD 605）出土土器実測図II

肥厚する。29は器高が高くなる。30は体部中位から外反し、底部は円くなる。31は口径・器高・底径とも一まわり大きく例外的なものである。以上の坏・小皿は、胎土に微砂を含有し、体部はヨコナデ、内底部はナデ調整である。底部の切り離しは糸切りで、全てに簾状圧痕を有する。ほとんど淡茶灰色を呈する。



第8図　溝（SD605）出土土器実測図Ⅲ

瓦器（第8図32・33）

瓦器は二点あり、いずれも埦である。二点とも½残存している。いずれも高台部を欠損しているが、32の復原口径は16.8cm、器高は約7.8cmを測る深めの埦である。体部と口縁部は内湾しながら外上方へ延びる。内面は粗雑なヘラミガキを施し、器壁は滑らかである。外面体部中位以下は指頭圧痕が乱雑に残っており、体部の上位にはわずかであるがミガキがある。内面と外面体部の上位は黒色を呈し、外面は全体に黒灰色である。33は復原口径14.0cm、器高約6.5cmを測る。32に比べ体部は更に丸味をもち、体部は直上気味に立ち上がる。内面のヘラミガキは不明瞭であるが、32と同様粗雑なものと思われる。外体部中央には3条のヨコナデの痕跡がある。胎土には若干の砂粒が含まれているが硬質のものである。口縁部は黒色を呈し他は灰白色である。

層位	番号	口径	器高	底径	備考
I	1	6.8	1.8	4.5	小皿　糸切り離し
	2	6.6	1.6	4.6	〃　〃
	3	8.6	1.0	6.6	〃　〃
	4	8.4	0.9	7.0	〃　〃
	5	12.6	2.8	8.3	坏　〃
	6	12.9	3.2	7.2	〃　〃
	7	13.8	3.6	10.4	〃　〃
II	1	8.0	1.0	7.4	小皿　〃
	2	14.2	3.0	11.0	〃　〃
III	1	9.0	2.3	6.6	高台付小皿　〃
	2	13.0	2.7	9.1	坏　糸切り離し
	3	14.0	2.9	8.8	〃　〃
	4	12.8	3.0	8.5	〃　〃
	5	12.8	2.5	8.2	〃　〃
	6	14.0	3.4	10.3	〃　〃
IV	1	7.8	0.9	6.3	小皿　〃
	2	8.0	1.0	7.0	〃　〃
	3	8.4	1.0	6.2	〃　〃
	4	8.4	0.9	7.0	〃　〃
	5	8.4	1.1	6.6	〃　〃
	6	8.0	1.0	7.4	〃　〃
	7	8.4	1.0	7.2	〃　〃
	8	8.2	1.2	6.5	〃　〃
	9	8.2	1.3	6.3	〃　〃
	10	8.2	1.0	5.2	〃　〃
	11	8.2	1.2	6.2	〃　〃
	12	8.4	1.5	6.6	〃　〃
	13	10.8	3.2	7.8	坏　〃
	14	12.4	2.9	7.9	〃　〃
	15	12.6	3.2	8.8	〃　〃
	16	12.2	3.0	7.8	〃　〃
	17	12.6	3.0	8.3	〃　〃
	18	12.8	2.9	8.6	〃　〃
	19	12.8	2.5	9.4	〃　〃
	20	13.8	3.2	9.4	〃　〃
	21	13.0	2.7	9.0	〃　〃
	22	13.0	3.0	9.0	〃　〃
	23	13.3	3.1	9.2	〃　〃
	24	13.2	3.0	10.0	〃　〃
	25	13.2	3.1	9.4	〃　〃
	26	13.6	3.1	9.5	〃　〃
	27	13.4	3.0	9.6	〃　〃
	28	13.2	2.8	9.5	〃　〃
	29	14.0	3.3	9.6	〃　〃
	30	14.0	3.0	11.0	〃　〃
	31	15.0	3.2	9.4	〃　〃

第1表　溝（SD605）出土土師器（坏・小皿）計測表

層位	青磁											白磁		青白磁			褐釉	黄釉
	竜泉窯系									同安窯系				景徳鎮窯系				
	A		B	C		D		E										
	碗	壺	碗	碗	皿	碗	皿	碗	皿	碗	皿	碗	皿	皿	壺	合子	壺	盤
I	3	2	14	15	5					1	2	3	3	2		1	6	5
II	5		7	8	2					1			1		1		2	
III	1		9	3		2				1	5					2		
IV	5		5	10		5		1	2	4	2		5		1		5	1

A　粉青色(すんだ空色)…蓮弁に鎬がある。　B　黄緑色(枇杷手)…蓮弁・鎬のあるものとないもの、全く文様がないもの。
C　灰緑色(くすんだ緑色)…蓮弁に鎬のあるものとないもの、全く文様がないもの。　D　底部に形彫りのあるもの。
E　蓮弁がなく、内面の体部をタテに6分割するヘラ文様(刻み)のあるもの。

第2表　溝（SD605）出土磁器・陶器点数

磁器（第8図34～38、図版14－34・35・38）

34・35はいずれも竜泉窯系の青磁皿である。二点ともほぼ完形のもので、34は口径9.2cm、器高2.2cm、底径4.6cmを測る。底部は平らで、ヘラ削りされている。体部中位からやや下で明瞭な稜をもって立ち上がり、口縁は円くおさめている。釉は体部中位から下は釉がかかっていない。露胎の部分は茶灰色を呈する。釉色はやや緑がかった空色を呈し茶色の下釉がみられる。胎土は暗灰白色を呈する。35は口径9.4cm、器高2.0cm、底径4.1cmを測る。34に比べ口縁部が外反気味である。底部はやや上げ底である。釉色は淡灰緑色を呈し光沢がある。36は竜泉窯系の青磁碗でほぼ完形に近い。口径15.7cm、器高7.2cm、高台径6.0cmを測る。第2表－B、第11図－3にあたるもので、釉薬はやや厚目で黄色味の強い緑色を呈する。口唇部に貫入がみられる。37は竜泉窯系の青磁碗で底部のみ残存する。第2表－D、第11図－16にあたるもので、内底部のみ込みに草花文状の文様が形彫りされている。釉薬は厚めで灰緑色を呈する。38は竜泉窯系の青磁碗で体部の一部を欠損しているがほぼ完形のものである。口径は17.0cm、器高6.6cm、高台径6.2cmを測る。体部の立ち上がりは内湾気味で円弧状を呈する。釉色は灰緑色のよごれた色の粗製品である。光沢がなく白いブツブツがある。外体部には蓮弁の文様があり、弁は幅広のもので、平たんで鎬がなく先端は円くダレている。

須恵器系土器（第8図39、図版14－39）

39は須恵器系の片口鉢である。ほぼ完形に近く、口径28.2cm、器高9.5cm、底径8.0cmである。底部から体部への立ち上がりはほぼ直線的で外上方へ延びる。口縁端部は「く」の字状に内へ

曲げており明瞭な稜をもっている。片口は幅4.0cmあり口縁部をおさえただけのものである。胎土は砂粒の含有が目立ち粗い。内外面ともヨコナデであるが、内底部はナデ調整を行っている。また体部には粘土紐の巻上げ痕跡の凹凸がみられる。底部切り離しは糸切り離しである。全体に灰白色を呈するが口縁部外面は黒色を呈する。

陶器（第8図40）

40は陶質のもので口縁部の一部が残存するのみであり、口径および全形は知り得ないが、形状としてはかなり大きなもので鉢状のものと考えられる。器形の特徴は口縁部の内面に二条の突帯がみられることである。この突帯は貼り付けたものではなくつまみ出したもののようである。胎土は砂粒の混入が著しく黒灰色を呈し表面はザラザラしている。内外面ともうすい釉状のものがかかっており淡褐色を呈している。通称「南バン」と呼ばれているものであろうか（第11図－12）。その他に、瓦質の火鉢の脚部片が1点出土している。黒色の堅い焼きのもので脚部は直径2cmの円形のものである。

SD600溝出土土器（第9図、図版16）

SD600溝埋土の状態はSD605と大差なく、それと同様4層に分けることができる。発掘範囲が狭かったためSD605に比較して土器の出量は少ない。土器の種類もSD605と同様である。

第Ⅰ層（Ⅰ－1～6、図版16－2～6）

Ⅰ層には土師器（坏・小皿）、磁器（青磁・白磁）、陶器（褐釉）がある。

土師器

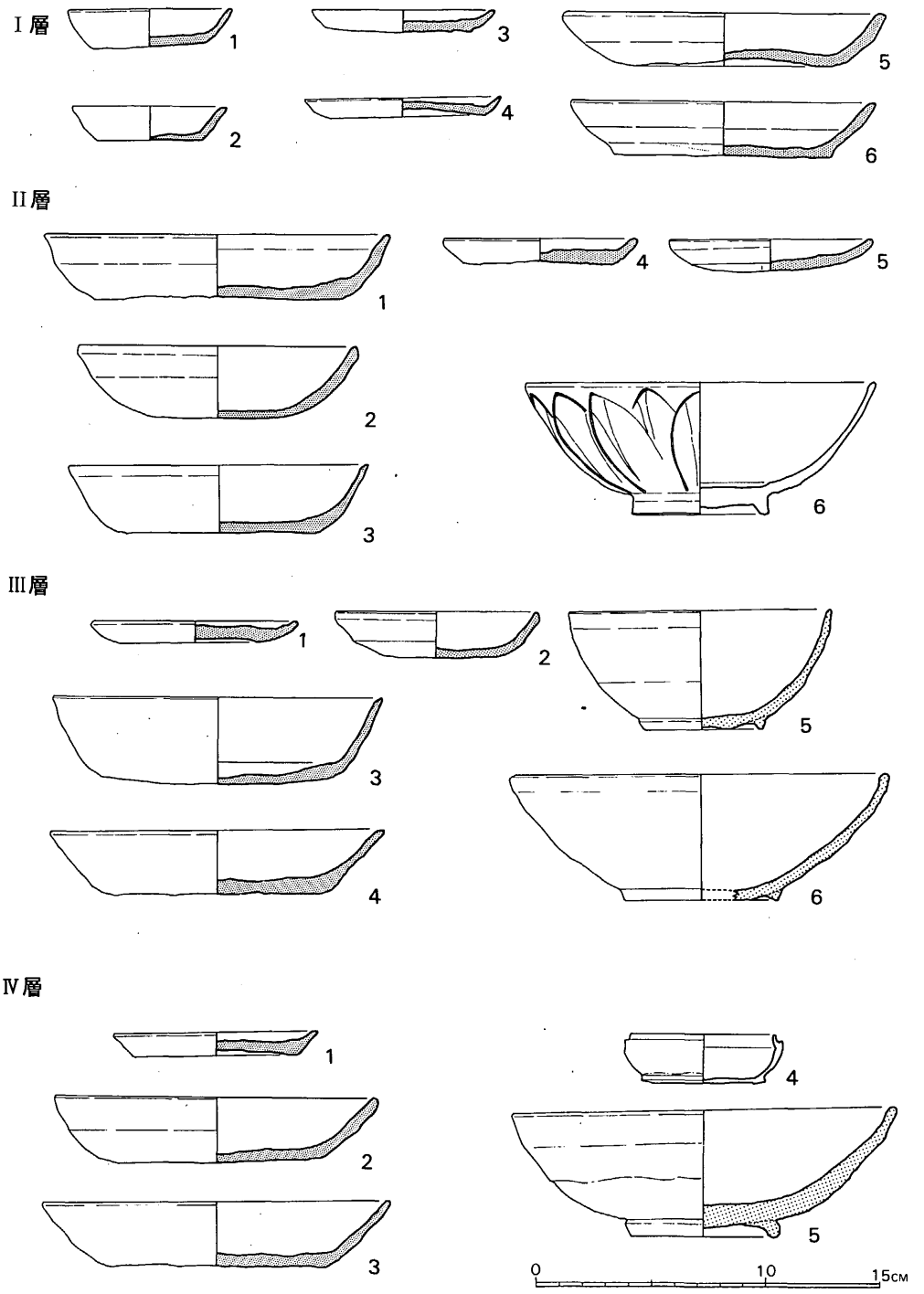
土師器には坏と小皿の二種があり、小皿には二種類ある。小皿はSD605のⅠ層出土のものと非常に似ている。胎土、手法も同じである。5・6はやや口径が大きい。5は手捏ねの坏で、二点ほどある。器形に歪みがある粗製のもので、器肉が全体に厚く、口縁部はとくに厚くなる。底部から体部にかけて円味があり、底部中心はへこむ。胎土には砂粒の混入が目立ち、体部および口縁部はヨコ方向のナデであり、底部の調整はナデによるものか、ヘラによるものか明確でない。いわゆるヘラ切り底のものとは違う。6は内湾気味で体部中位が肥厚している。

第Ⅱ層（Ⅱ－1～6、図版16－1・2・4）

Ⅱ層には土師器（坏・小皿）、磁器（青磁・白磁）、陶器（褐釉）がある。

土師器（1～5）

1～3は坏で、1は口径が15.0cmと大きく数はわずかである。器肉が厚くがっしりした感じのものである。体部中位に稜をもち口縁部は外反する。2は手捏ねのものでⅠ層－5より小形で底部は円く、器高も高く異なった形状を呈する。胎土、手法ともⅠ層－5と同じである。3は口径13.0cmのもので体部は直線的でうすく、口縁部はわずかに外反する。1・3は糸切り離しである。4・5は小皿で、4は器肉が厚くぼってりした感じで体部が短かく口縁部は円くなっている。5は手捏ねのもので底部は円い。口縁部の内外面はヨコ方向のナデで調整し、底部はナデ



第9図　溝（SD600）出土土器実測図

によるものか。この種のものは1点である。

磁器（6）

6は竜泉窯系の青磁碗である。½残存し復原口径は15.0cm、器高5.8cm、高台径6.0cmを測る。全体に器肉がうすくやや小振りである。体部は内湾気味で、外体部には蓮弁があり、弁幅はやや広めで弁中央が盛りあがった鏑手のものである。弁先端はやや尖った感じのものである（第2表－B）。

第Ⅲ層（Ⅲ－1～6、図版16－5・6）

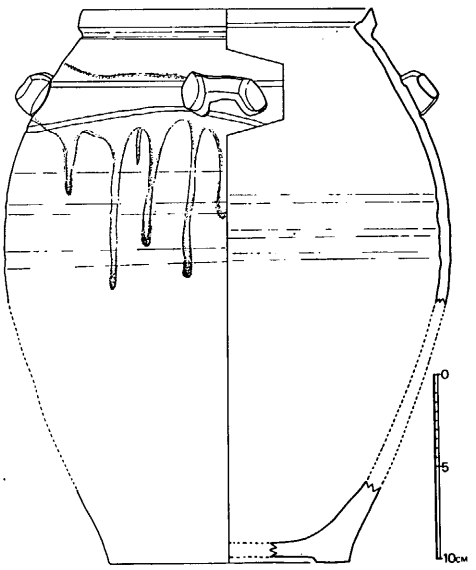
Ⅲ層には土師器（坏・小皿）、磁器（青磁・白磁）、陶器（褐釉）がある。

土師器（1～4）

1は底部が厚く、体部は大きく開き口縁部をわずかにつまみ上げたものである。2はⅡ－1を小形にした感じのもので形態等は類似している。3・4は口径に差はないが3は器高が高く、全体に器肉がうすく体部はとくにうすく口縁部はわずかに外反する。4は直線的な体部をもつものである。

瓦器（5・6）

瓦器は2点あり、いずれも埦である。5は½残存している。復原口径は11.2cm、器高は5.2cm、高台径5.1cmを測る。小形の埦で、体部は内湾気味で口縁部はほぼ直上につまみ上げ口縁端部は円くおさめている。胎土には砂粒の含有はみられず精緻なものである。高台は低く断面三角形に近いものである。ヘラミガキの施行は不明瞭であるが内面は滑らかで外面の体部上位にはその痕跡が一部みられる。外体部中位以下は指頭痕が残る。灰黒色を呈する。6は約½が残存する。復原口径16.0cm、器高5.5cm、高台径6.6cmのものである。断面三角形の低い高台を有し台部はほぼ直線的で口縁上端部が、わずかに内湾する。断面は粗雑なヘラミガキを施し、器壁は滑らかである。外体部ではヘラミガキはみられず指頭圧痕が口縁部近くまである。胎土には砂粒の含有はなく緻密である。焼成は堅緻である。口縁部と内底部は灰黒色（銀白色）を呈し他は灰白色である。



第10図　溝（SD600）出土壺実測図

陶器（第10図、第11図－17）

褐釉の耳付壺で、口縁部と底部の破片があり同一個体と思われる。復原すると口径15.4cmであり、器高は図上で復原すると約30.0cm、底径13.0cmである。口縁部は「く」字形に外反し、

口縁部直下と頸部耳の下に沈線が3条ある。頸部では沈線のため段がつく。体部上位が最もふくらむ。器壁はうすく粘土紐巻上げ痕が残る。耳は2個残存し、その間隔から四耳壺のものである。胎土は緻密で茶色を呈する。内面は白っぽい釉状のものがみられ、外面は褐色の釉が頸部にかかり胴部釉が流れている。高台は削り出しの低い高台である。福岡市の多々良遺跡出土のものと類似している。

第Ⅳ層（Ⅳ－1～5、図版16－1・3・4・5）[註4]

Ⅳ層には土師器（坏・小皿）、磁器（青磁・白磁・青白磁）、瓦器がある。

土師器（1～3）

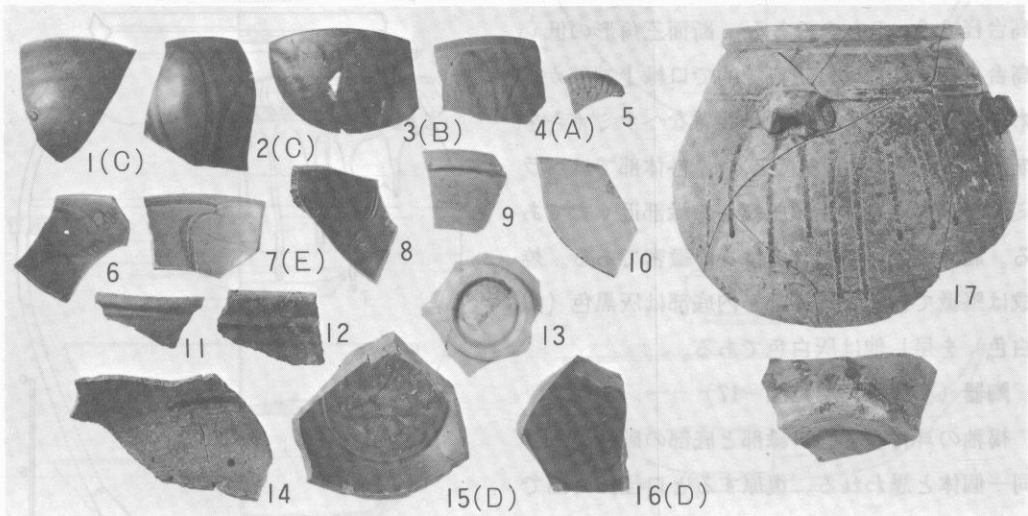
1は底部が厚く口縁部をわずかにつまみ上げただけのものである。2は手捏ねのもので胎土および手法は前述のものと同様に粗製のものである。底部から体部にかけ円味をもっている。この種の手捏ねの土器は底部と体部、口縁部の器肉がほぼ同じ厚さであることが特徴である。3は器肉がうすく、口径・底径ともに大きく平たい感じのものである。体部はほぼ直線的に外向する。

磁器（4）

景徳鎮窯系の影青の平形合子である。½残存し、復原口径6.2cm、器高2.1cm、底径5.4cm、蓋受けの立ち上がりは高く直立する。体部は内湾し、口縁部付近は蓋受けのため厚くなる。底部には低く幅広の高台を有する。釉薬は薄目で透明な空色を呈する。

瓦器（5）

瓦器の椀で口縁部の一部を欠損しているがほぼ完形のものである。口径はいびつで楕円形を呈する。口径17.0cm（長径）、15.0cm（短径）、器高は5.5cm、高台径6.5cmを測る。高台は太く外



第11図　溝出土陶磁器

層位	番号	口径	器高	底径	備考
I	1	6.9	1.7	4.8	小皿　糸切り離し
	2	6.6	1.5	4.6	〃　〃
	3	8.0	1.0	6.4	〃　〃
	4	8.5	0.8	6.6	〃　〃
	5	14.0	2.0	10.0	坏　未調整(手づくね)
	6	13.2	2.4	9.4	〃　糸切り離し
II	1	15.0	2.8	10.8	坏　〃
	2	12.0	3.2	11.0	〃　〃
	3	13.0	3.0	8.4	〃　〃
	4	8.4	1.1	6.6	小皿　〃
	5	8.8	1.4	6.8	〃　未調整(手づくね)
III	1	8.8	1.0	5.7	小皿
	2	8.6	2.5	7.4	〃　未調整(手づくね)
	3	14.2	3.8	10.0	坏　糸切り離し
	4	14.4	2.8	10.0	〃　〃
IV	1	8.8	1.0	7.0	小皿　糸切り離し
	2	13.8	3.0	12.9	坏　未調整(手づくね)
	3	14.8	2.8	9.4	〃　糸切り離し

第3表　溝（SD600）出土・土師器（坏・小皿）計測表

層位	青磁												白磁		青白磁			褐釉	黄釉
	竜泉窯系									同安窯系					景徳鎮窯系				
	A		B	C		D		E											
	碗	壺	碗	碗	皿	碗	皿	碗	皿	碗	皿	碗	皿	皿	壺	合子	壺	盤
I								1		6			1				1	
II			3	1						3		1	2				1	
III			2														1	
IV										2	1		2				1	1

A　粉青色（すんだ空色）……蓮弁に鎬がある。　　D　底部に形彫りのあるもの
B　黄緑色（枇杷手）……蓮弁に鎬のあるものとないもの、全く文様がないもの。
C　灰緑色（くすんだ緑色）……蓮弁に鎬のあるものとないもの、全く文様がないもの。
E　蓮弁がなく、内面の体部をタテに6分割するヘラ文様（刻み）のあるもの。

第4表　溝（SD600）出土磁器、陶器点数

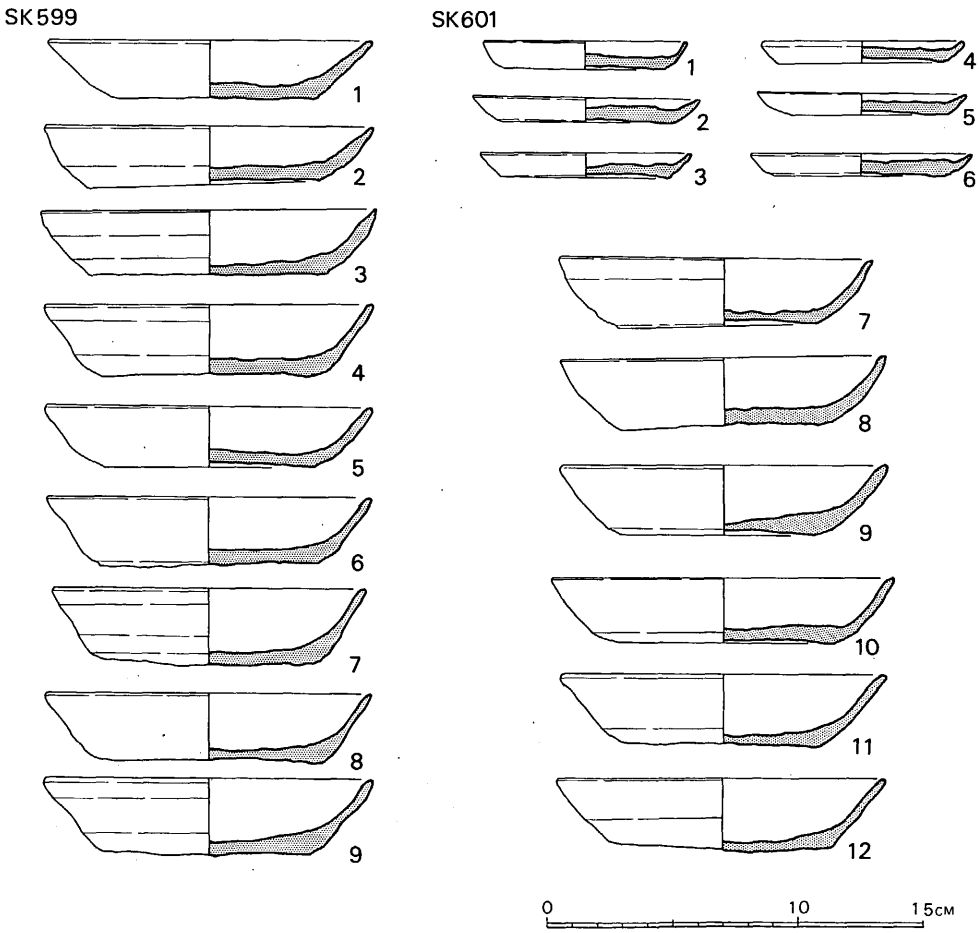
開した安定感のあるものである。内面のヘラミガキは粗雑であるが明瞭で全面にわたって施行されている。外面にも内面より粗であるが明瞭に施行されている。器高が低く開いた感じである。胎土は緻密で精製されている。体部はやや円味をもって立ち上がり口縁部はわずかに「く」字状に曲がり稜をなす。体部中位では粘土を貼り付けた様なふくらみがある。黒色を呈する。

SK599土坑出土土器（第12図1～9）

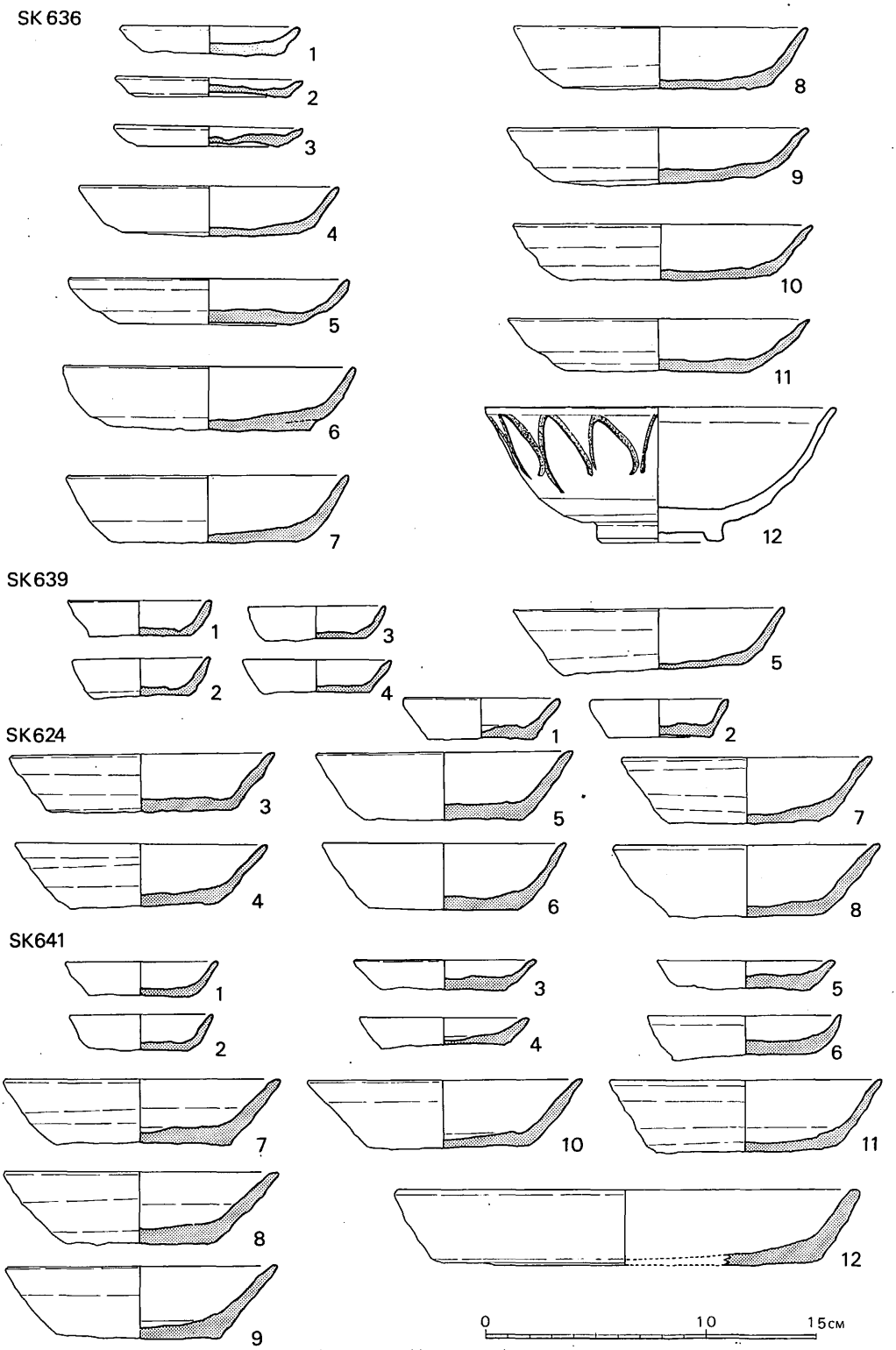
全て坏で、口径12.8～13.2cm、器高2.5～3.0cm、底径が8.2～9.4cmの範囲のものである。1は口径と底径の差が大きく体部は直線的で、開きが大きくなる。2・3は内湾気味で口縁部がうすくなる。4～9は体部中位および口縁部付近で外反するもので口縁部はわずかに肥厚する。端部は円くおさめている。これらの胎土には微砂を含有し、調整は体部の内外面ヨコナデ、内底部はナデ調整である。

SK601土坑出土土器（第12図1～12）

1～6は小皿で、1の口径がやや小さく、他はほぼ同じ大きさのものである。1は底部の厚



第12図　Aトレンチ土坑出土土器実測図



第13図　土坑出土土器実測図

い器肉に比べうすい体部と口縁部をもつ。やや内湾し体部下位に稜をもつ。2～6は厚い底部から体部と口縁部をわずかにつまみあげたもので6はそれが著しい。

7～12の坏は口径が12.4cmとやや小さく他は12.8～13.4cmの口径で、器高2.8cmの範囲のものである。1は内湾気味で口縁部が「く」の字状に外反する。7・8は体部が円味をもち内湾し、9～12はほぼ直線的な体部で口縁部は円くしている。これらは胎土、手法ともSK599と同じである。

SK636土坑出土土器（第13図1～12、図版17－2・3・9・12）

土師器（1～11）

1は口径が7.8cmで2・3に比較して小さい。器肉は厚くぼってりした感じの体部と口縁部をもつ。2・3は口径が同じで底部がうすくなる。4～11は坏で4の口径が11.6cmと小さく他は13.0cm前後のものである。8～11は底部から体部にかけて円味があり、体部が外へ開く特徴があり、一つのまとまった形状を示す。

磁器（12）

12は竜泉窯系の青磁の碗である。ほぼ完形で口径16.0cm、器高6.1cm、高台径5.8cmを測る。体部は内湾し、口縁部は「く」の字状に外反する。そのため口縁部内面にわずかな稜をもつ。外面体部には短かくて幅広の蓮弁を有する。弁は扁平で鎬がなく弁先端は円くなっている。釉はやや厚目で釉色は黄色気味の強い緑色を呈する。第2表－B、第11図－3にあたるものである。

SK639土坑出土土器（第13図1～5、図版17－1・4）

土師器

小皿と坏があり1～4は口径が小さく器高が高くなるものである。1・2はうすい底部で体部および口縁部が肥厚する。内底部の周囲に円状のくぼみがみられる。3・4は器肉がうすくやや内湾気味の体部をもつ。

SK624土坑出土土器（第13図1～8、図版17－4・8）

土師器

1・2は小皿でSK639の1～4に比較してやや器高が高くなり器肉も厚くなる。3～7は坏でこれらは器高が高くなり、底径が小さい特徴を示し若干の差はあるがまとまった形状のものである。

SK641土坑出土土器（第13図1～12、図版17－2・3・6・7・11）

土師器

1～6は小皿で、1・2は他に比較して口径が小さく器高が高くなる。3～5は口径7.8～8.4cmの範囲のもので3は体部がうすく4・5はぼってりした感じのものである。6は口径、器高ともに一まわり大きい。7～9は坏で口径12.1～12.4cm、器高3.0～3.3cmの範囲のもので前述のSK624の坏より口径がやや大きくなり底径も大きくなるため形態的にはSK624のそれと大差ないが、やや全体的に大きくなった感じである。12は破片で復原口径21.0cmの大皿で1片のみ検出した。体部は内外面ヨコナデ、内底部はナデ、外底部は糸切りで調整されている。

土坑名	番号	口径	器高	底径	備考
SK599	1	12.8	2.3	8.3	坏　糸切り離し
	2	13.0	2.5	9.2	〃　〃
	3	13.2	2.5	9.4	〃　〃
	4	13.0	2.8	8.3	〃　〃
	5	13.0	2.5	8.3	〃　〃
	6	12.8	2.8	8.6	〃　〃
	7	12.2	3.1	8.2	〃　〃
	8	12.8	2.7	8.7	〃　〃
	9	12.8	3.0	8.2	〃　〃
SK601	1	8.0	1.1	6.2	小皿　糸切り離し
	2	9.0	1.1	7.2	〃　〃
	3	8.2	1.0	6.8	〃　〃
	4	8.0	0.9	6.6	〃　〃
	5	8.2	0.9	6.2	〃　〃
	6	8.8	0.9	7.0	〃　〃
	7	12.4	2.8	7.9	坏　〃
	8	12.8	2.8	7.7	〃　〃
	9	12.8	2.8	7.5	〃　〃
	10	13.4	2.6	8.4	〃　〃
	11	12.8	2.8	7.8	〃　〃
	12	13.0	2.9	8.3	〃　〃
SK636	1	7.8	1.3	6.5	小皿　糸切り離し
	2	8.4	1.0	6.6	〃　〃
	3	8.4	1.0	6.4	〃　〃
	4	11.6	2.3	8.2	坏　糸切り離し
	5	12.6	2.0	7.8	〃　〃
	6	13.0	2.9	9.2	〃　〃
	7	12.8	3.0	9.2	〃　〃
	8	13.2	2.8	9.3	〃　〃

第5表　土坑出土土師器（坏・小皿）計測表（その1）

土坑名	番号	口径	器高	底径	備考
SK636	9	13.6	2.7	9.2	坏　糸切り離し
	10	13.4	2.5	9.1	〃　〃
	11	13.6	2.5	8.3	〃　〃
SK639	1	6.4	1.6	4.6	
	2	6.4	1.8	4.4	
	3	6.2	1.5	4.6	
	4	6.8	1.5	4.8	
	5	12.2	3.0	8.1	
SK624	1	6.0	1.7	4.6	小皿　糸切り離し
	2	6.8	1.9	5.0	〃　〃
	3	11.9	2.6	8.0	坏　〃
	4	11.4	3.0	6.3	〃　〃
	5	11.4	3.0	7.2	〃　〃
	6	10.8	3.1	6.9	〃　〃
	7	11.2	3.1	6.3	〃　〃
	8	12.0	3.3	6.9	〃　〃
SK641	1	6.8	1.5	4.5	小皿　糸切り離し
	2	6.4	1.6	4.3	〃　〃
	3	8.4	1.4	5.8	〃　〃
	4	7.8	1.4	5.6	〃　〃
	5	7.8	1.4	6.0	〃　〃
	6	8.8	2.0	6.3	〃　〃
	7	12.2	3.0	7.8	坏　糸切り離し
	8	12.4	3.3	7.0	〃　〃
	9	12.2	3.3	7.4	〃　〃
	10	12.4	3.1	7.4	〃　〃
	11	12.1	3.3	8.2	〃
	12	21.0	3.5	16.6	大皿　〃

第5表　土坑出土土師器（坏・小皿）計測表（その2）

以上、溝および土坑から出土した土器について記述したが、ここで気付いた点を、まとめてみたい。

土師器

溝SD605の第Ⅳ層出土の土器は共伴した「貞応三年」銘木札より13世紀前半代に比定することができる。完形もしくはそれに近いものについて計測した結果から坏については口径 12.0～14.0cm、 器高3.3 ～2.5cm、 底径8.0 ～9.8cmのもので浦城出土のII－1類(註5)のものが半数を占める。他のものは口径がやや小さいがこれに類するものであろう。又小皿については口径が7.8～8.6 cm、 器高が0.9～ 1.5cm、底径が5.2cmの範囲のもので浦城出土の小皿の分類II－1類とII－2類のものがあり量的には後者のものが多い。

Ⅰ層出土のものについてみると、坏では口径12.6～13.3cm、 器高2.5～3.2cm、 底径7.2～9.4cmの範囲であり、浦城のII－1とII－2類の中間に位置するものと考えられる。

小皿については2種類があり、口径3.6cm、器高1.6cm、底径4.5cmのものと、 口径8.4～8.6cm、器高0.9～1.0cm、底径6.6～7.0cmの二種があり、後述のものはII－2類に属するものである。口径3.6 cmのものが共伴してくる。

また土坑の土器については各土坑別にみるとかなりまとまった形態のものがある。各土坑の層位関係、切り合い関係はないが口径が小さく、器高が高く底径が小さくなる傾向がある。とくにSK599、SK601、SK636、とSK639、SK624、SK621とは明らかな形態の違いがみられ、SK639、SK624、SK641のものが後出のものと考えられる。これらの土坑については溝埋土との関係から13世紀後半～14世紀前半(註6)頃に考えて差しつかえなかろう。

瓦器

瓦器の碗がSD605の第Ⅳ層およびSD600の第Ⅲ層・Ⅳ層から出土しているがSD605 の第Ⅳ層出土の瓦器碗は森田氏編年のIII－aおよびbに比定できるもので、氏はその時期を12世紀の後半から13世紀初頭に考えられており(註7)、今度の調査結果と大差なかった。

須恵器系土器

SD605から出土した須恵器系土器の鉢は量的にはわずかである。全て器形は鉢と考えられるもので、第Ⅰ層から出土したものには内面に幅広の櫛目があり、第II層より下層では櫛目のものはみられない。

瓦質土器

SD 605 の 第Ⅳ層から瓦質の火鉢片 1 片と甕の口頸部 1 点が出土している。火鉢片は脚部の部分のもので、脚は直径2.0cmの円形のものである。

陶器

SD605の東側で検出の大きな落ち込み状の遺構から、かなりの量の備前および常滑の甕片が出土している。

陶磁器

同時期に並列する溝SD600とSD605から出土したものについて述べる。両溝は層位も一致し、既述してきたように第Ⅳ層から貞応三年銘木札が発見され溝の最上層のⅠ層の遺物を勘案すると、13世紀前半～14世紀前半の確実な遺物として指摘できる。従来この時期については曖昧のところが多く、その意味で、この溝出土遺物のもつ意義は大きい。中国製陶磁器についてまとめてみると、次のことが指摘できる。

① 出土した陶磁器片のすべてについて個体数を調らべると、青磁が多く白磁が少ない。第Ⅳ層では青磁が34に対し、白磁は約⅙の5個体分である。第Ⅰ層においても青磁42、白磁6でその割合はほぼ同じである。

② 青磁では竜泉窯系の碗、皿が多く、同安窯、景徳鎮窯系青白磁、施釉陶器があり、この組みあわせは、この時期の九州における標準的タイプである。

③ 竜泉窯系青磁は、釉調と施文手法によりA～Eに大別できる。Aは従来一般に砧手とよばれた粉青色に近い釉色の上手のものであり、BおよびCは黄味あるいは灰色を帯びたいわゆる下手とされるものである。13世紀前半代と考えられる第Ⅳ層において、A～Eは共伴していることがまず注意される。しかもその量的割合は、B～Eのタイプが23個体分に対しAは5個体で、すでにこの時期において前者がない。この割合は上層にいくにつれて開き、第Ⅰ層ではB・Cの34に対しAは5である。もちろん全体の出土量は多いとはいえないので早急な結論は慎むべきであるが、AタイプとB～Eのタイプに時期的先後関係を求める考え方に再検討の資料を提供するといえよう。

④ 第Ⅳ層すなわち13世紀前年代に同安窯系の碗、皿は確実に存在し、最近の中国側の資料によってこれは同安窯の製品として間違いないものとなっている。第Ⅳ層の出土品はおおむね酸化焔焼成の時間の短い青緑色の透明釉の施されているものである。

⑤ 褐釉の四耳壺と考えられる器形は、釉薬が胎土となじまず剝落している。この種のものはすでに12世紀から存在し、13世紀においても継続して輸入されている。しかし器形など細部の点については検討の余地がある。

⑥ 黄釉の盤は最近にわかに資料が増加しつつある陶器である。胎土の極めて粗いもので、円盤状の底部に体部を接合するつくりで、黄色を帯びた緑色の薬が、内面すべてと外面は口縁下まで施こされ、それ以下は露胎のままである。この種のものは12世紀前半（福岡市田島経塚）から出土し13世紀に及ぶが、12世紀のものは口縁を鍔状にのばしているのに対し13世紀の器形は口縁を玉縁状におさめる。Ⅳ層出土品は後者であり、この器形が13世紀前半にすでに存在していることを証明した。

⑦ 青白磁の合子は出土数が少ないが、第Ⅲ層および第Ⅰ層出土品は12世紀経塚出土品とは明らかに異っている。12世紀のものは、側面を菊座形にわけ、蓋天井部に草花文、七宝文をいずれも細線で浮彫様に型づくりしている。これに対し今回の溝検出品は2個とも菊座を

欠き平滑で、文様も相対的に太い浮出しである。同じく影青合子でも12世紀と13世紀との相違があることを明らかにする資料である。

木器

木製品として墨書木札、鼓胴、毬打遊戯具、足駄、箸状木製品、絵馬の一部がある。これらは主として東大溝の第Ⅳ層（黒色粘土層）から土師器と共に出土した。特に墨書木札については、出土したうちの一点に紀年銘があり、共伴遺物と共に貴重な資料といえる。第6表は出土品の計測値を示したもので、最大径、復原径を表示した。

① 墨書木札（図版26－1・2・5・6） 1は東大溝第Ⅳ層(黒色粘土)から出土したものである。木札は長さ20cm、幅4.5cm、厚さ0.3cmを測り、頭部は左右に浅い切込みを有する山形のものである。材質はヒノキ製と思われ、表に「日」「×」「山」「鬼」等の文字と記号から成る「咒咀」が書かれ、一種の物忌札と考えられる。裏には「貞応三年十一月日」と書いた紀年銘が記されている書体などから(註8)同一人物によって書かれたものであろう。ちなみに貞応三年十一月二十日（1224）には元仁元年に改元されている。咒咀は紙や木札などに書かれ、これを「符」と呼称しているが、符は時代によって異なり、又人々の要求により書かれるもので、今回出土の木札は当時の人々が、(註9)「除災招福」を願った信仰の一端がうかがえる。又これらは古く道教や修験道、密教と民間とのつながりを提示するものとして興味深い。2は「南无多聞因(ヵ)……」と判読できるものが出土した。長さ8.5cm、幅3.2cm、厚さ0.3cmを測る。おそらく供養関係の名号木札であろう。5・6は仮字で墨筆されたもので、判読不可能である。5は幅、6.8cm、6は5.6cmで、いずれも上部が欠損している。

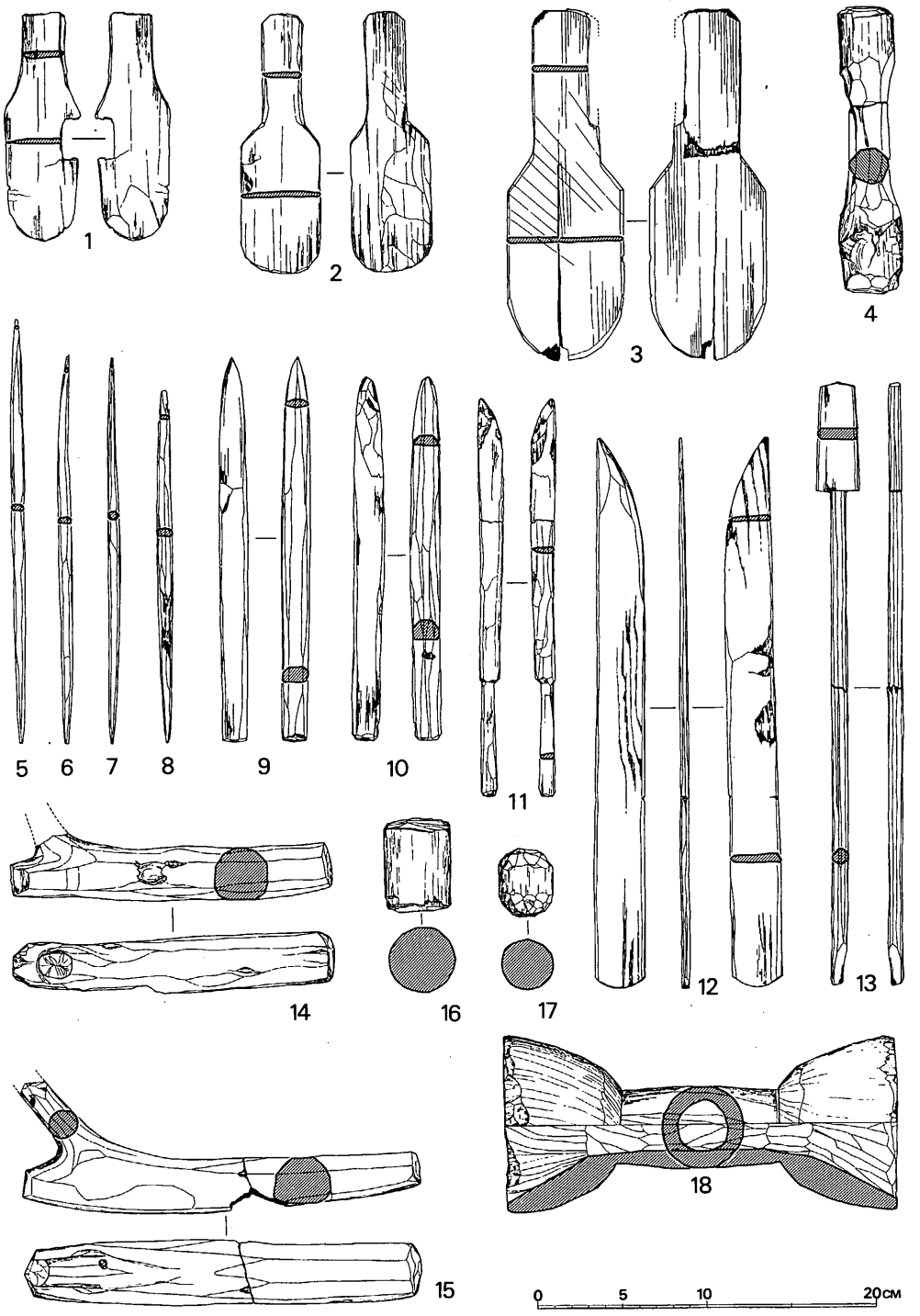
② 杓子（第14図1～3、図版24） 杓子3個が出土した。1は中央部に約2cmの割れがあり、全体に擦減っている。2は柾目材を使用し、丁寧に仕上げている。3は1・2より大形のもので、材質は杉と思われ曲物を再利用しているものである。

③ 不明品（第14図4） 用途の判然としないもので、中央部約10cmを丸く削っている。上下を若干加工しており、一見摺子木棒を思わせる。

④ 箸状木製品（第14図5～8、図版24） 箸状のもので平均長約23cm、厚さ0.4cmを呈する。両端を細く尖らせ、きれいに整形している。今回は約600本ぐらい出土した。草戸千軒町遺跡では、数千本出土しており、用途については「とめぐし」と解している。

⑤ 篦状木製品（第14図9・10、図版24） これらも用途は(註10)判然とせず、草戸千軒町遺跡では出土例から「漆を塗る工具」と考えられている。先端は剣型を呈し、断面はカマボコ型をしている。(註11)今回2点出土した。

⑥ 刀形木製品（第14図11・12、図版24） 11は刀身と柄部に分離し、刀身長約17cmで峰から刃部、鋒にかけて薄くなる。柄部は長さ6.5cmで丁寧に仕上げている。草戸千軒町遺跡で同類のものが出土している。(註12)12は全長32.6cmの大形のもので丁寧に加工している。特に鋒



第14図　第33次発掘調査出土木器実測図

（単位　cm）

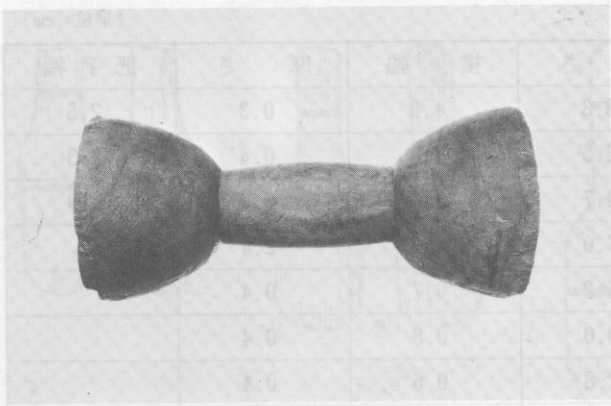
名　　称	図版番号	長　さ	横　幅	厚　さ	把手幅
杓　　子	1	13.3	4.2	0.3	2.5
	2	15.5	4.8	0.4	2.3
	3	20.7	6.8	0.3	3.9
不　明　品	4	17.0		2.4	
箸　状　木　製　品	5	25.2	0.7	0.4	
	6	23.0	0.8	0.4	
	7	22.8	0.6	0.4	
	8	20.8	0.9	0.5	
箆状木製品	9	22.7	1.5	0.9	
	10	21.4	1.6	1.2	
刀形木製品	11	23.5	1.3	0.4	0.9
	12	32.6	2.7	0.5	3.0
題　　箋	13	35.6	2.4	0.7	0.9
毬打遊戯具	14	19.0	3.1	3.1	
	15	23.3	3.3	2.8	1.7
	16	5.5		3.9	
	17	4.0		2.9	
鼓　　胴	18	23.1	4.8	1.1	

第6表　第33次調査出土木器計測表

部は弓状を呈する刀形の典形的なものである。刀身長約21.3cmで柄部との接点部に切込みを有する。柄頭は丸く仕上げており、長さ約11.3cmを測る。

⑦ 題箋（第14図13、図版24）　文字は書かれてないが題箋と考えられる。標題部の長さ約6.5cmで、頭部を山形にし下方にやや広がっている。軸部は丸く径約0.9cm、長さ29.1cmで、末端は差込みやすいように尖らせている。

⑧ 毬打遊戯具（第14図14～17）　「毬打（ぎっちょう）」といわれる遊戯の用具と考えられる。毬杖（ぎっちょう）（14・15）3個体と毬（16・17）数十個が出土した。毬杖は自然木を利用したもので、15は柄の部分が若干残存している。共に底部と両側面は平らで、側面から上面に丸味をもち、先端部はやや擦減っている。後端部は三角状に尖らした形をなしている。毬は径約3～4cmのものが多く、中には径約6cmほどの孔を穿ったものもある。毬打は「打毬技（だきゅう）」から変化した(註13)

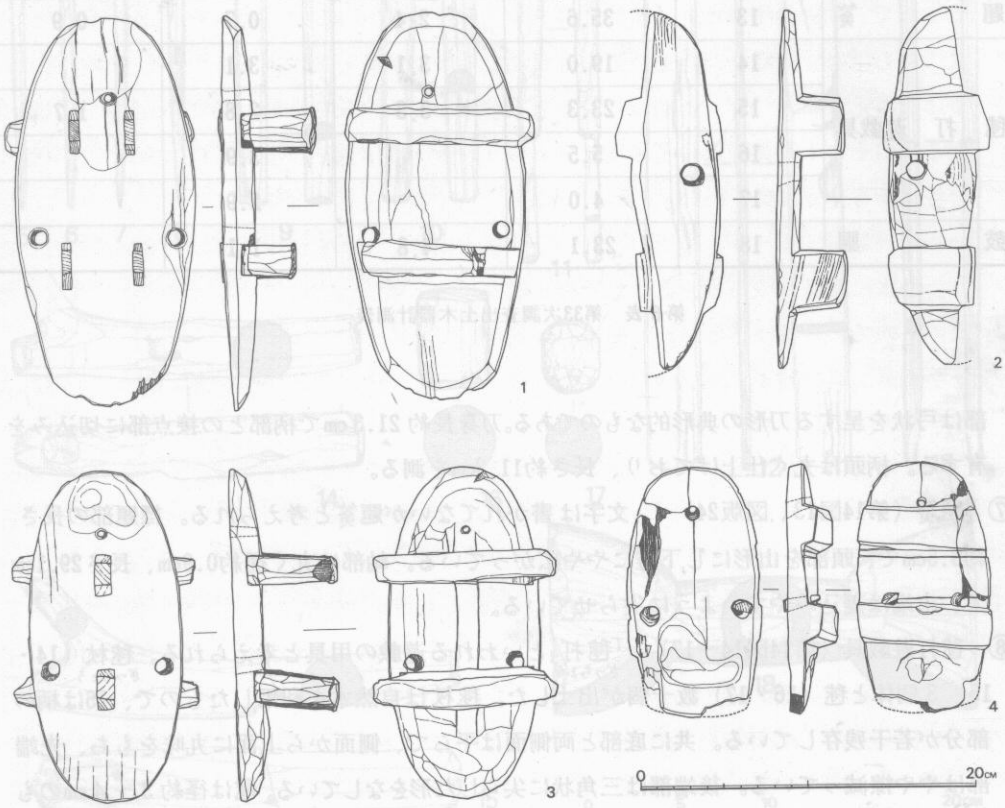


第15図　鼓胴

ものといわれ、「年中行事絵巻」や「鳥獣戯画」に遊戯の様子がうかがえる。

⑨　鼓胴（第14図18、第15図）

一木をロクロで挽き、胴の中央部が細く括れた細腰鼓である。(註14)左右両面に鼓面をもち、鼓面の外径約10.5cmである。鼓面縁から括れ部にかけ、ゆるやかに湾曲し鉢形を呈する。胴の中央部はやゝ中太りとなって、括れ部の長さ約9.5cmを測る。合内面は空胴で、括れ部内面径３cm、鼓面内径9.2cmである。ノミ状のもの



第16図　第33次発掘調査出土足駄実測図

（単位cm）

図版No. ＼ 名称	台　長	台横幅	台の厚さ	高　さ	歯上端幅	歯下端幅	厚　さ	備　　考
1	23.0	10.7	2.0	5.6	9.8	11.2	2.4	差　歯
2	21.5		1.5	4.1			3.5	連　歯
3	19.6	9.1	1.8	6.2	7.2	10.8	1.7	差　歯（½欠）
4	14.9	7.9	1.8	2.9	7.6	8.0	2.3	連　歯

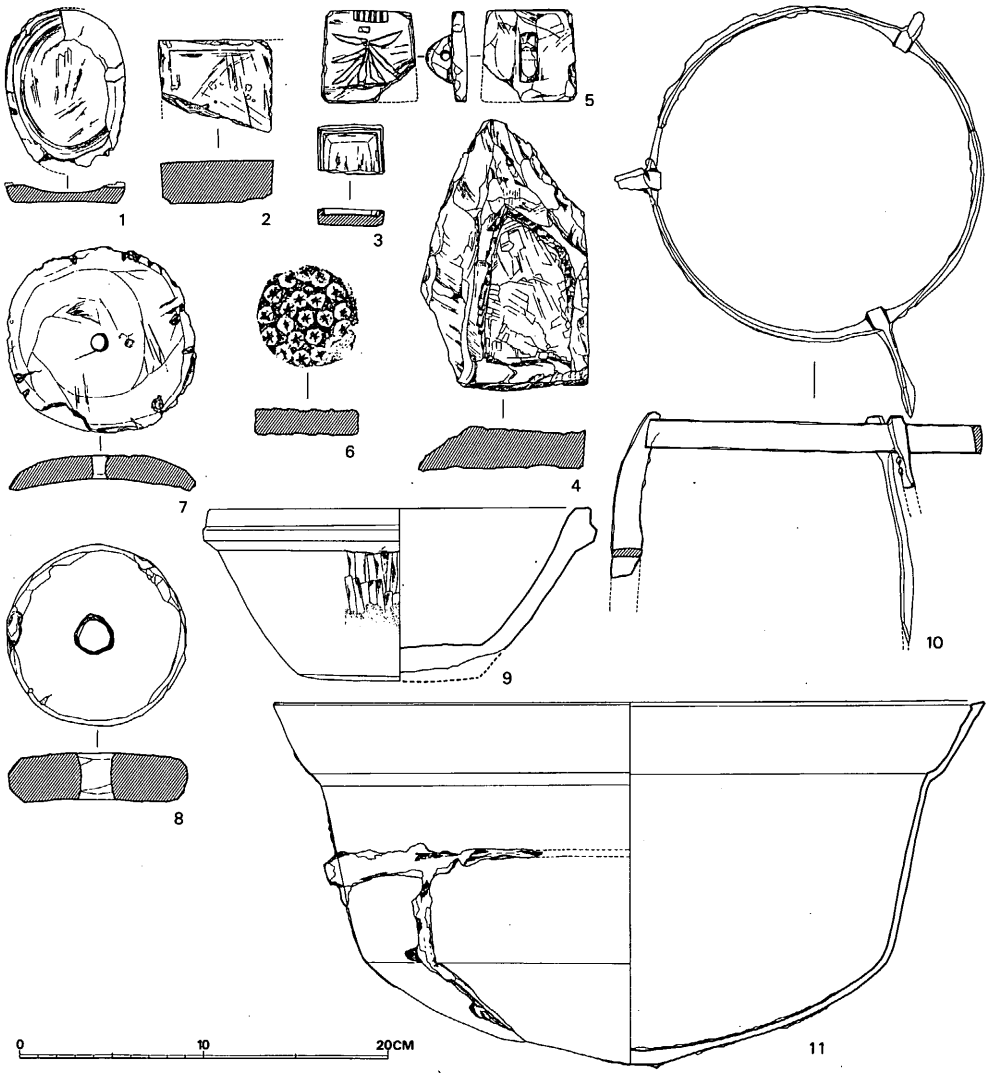
第7表　第33次調査出土足駄計測表

で丁寧に仕上げている。「馬医草紙絵巻」には巫女が「鼓」を打っている様相が描かれている。(註15)

⑩　足駄（第16図1～4、図版25）　足駄は小児用、大人用を含めて9個体出土した。第7表に示した計測値は最大値であり、2の台長は復原長を表示したものである。又第16図の実測図は保存状態のよいものを掲載した。

1はヒノキ製で長楕円形を呈し、台の下端周辺は薄くなっている。台部と歯部から形成され、差歯のもので前、後歯に2個所づつの木楔が打ち込まれている。後歯は擦減っている。鼻緒孔は前面が0.5cm、後が約1cmで共に貫通している。2は½が欠損しているが、長楕円形を呈するものと考えられる。一枚板を削りだした連歯で、台部に鼻緒孔約1.3cmを穿っている。3は今回出土した中で最も保存状態のよいものである。台部と歯部から成り、銀杏歯の差歯で、台部との離脱を防ぐため前後の歯に1個所づつの木楔を打ち込んでいる。鼻緒孔は前面で径約0.6cm、後で径約1.1cmの孔が内側に向けて貫通している。歯の底部と台部の先端は擦減っており、使用した痕跡がうかがえる。右足駄と考えられる。4は小児用のもので、長楕円形を呈する。破損が多く台部と歯部は一木から成る連歯のものである。歯部底面と台部後方が著るしく擦減っている。鼻緒孔は前面で径0.9cm、後方で径約1.1cmで内側に狭く穿っている。後方右の鼻緒孔には木楔が打ち込まれており、鼻緒の一部が残存していた。

⑪　絵馬（図版26－4・7）　絵馬と考えられるものの一部が2点出土した。4は縦長15.7cm、最大横幅13.5cmで左半部が欠損している。右端部は杓子形に加工しており、墨筆で鹿と兎らしい動物画が描かれている。絵馬と様相が若干異なっているため、板絵ではなかろうか。7は下端幅が30.2cm、上端幅29.5cm、厚さ0.3cmで、上端をやや山形にしたものである。上端から約5.7cm残存し、墨筆で馬の臀部らしきものが描かれている。絵馬は社寺に祈願・報謝のために奉納する扁額である。奈良時代頃に発生したといわれ、室町時代末期から近世初期に至って隆盛期となった。当初は馬の絵を納めていたが、武将等の出現により後に、人物、風俗、花鳥、動物、山水など多岐複雑化した多種の画題が描かれるようになった。(註16)



第17図　第33次発掘調査出土特殊遺物実測図

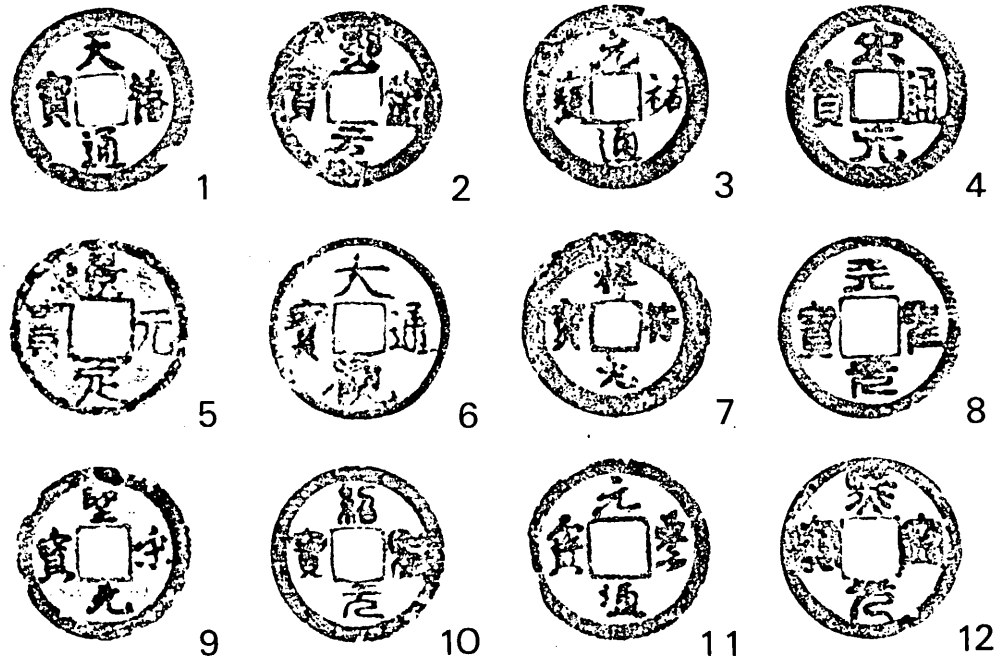
特殊遺物（第17図、図版27・28）

第33次調査では特殊な石製品や鉄製品も出土した。第17図に示す1～4は硯、5・6は印判である。7・8の遺物はその用途が判然としないため、不明石製品として考えた。9～11は井戸（SE561）埋土から出土したものである。

1は硯縁が破損しており、楕円形状を呈する。硯面の海部は縦方向に削った形跡を残し磨滅している。底部は平坦で全体に鼠色を呈している。2は右の縁部が欠損しており、周辺の細い沈線から硯使用を物語っている。砥石に転用したものである。3は滑石製で幅3.5cmの小形のものである。4は輝緑凝灰岩の未成品で、ノミの痕が克明に残っている。輝緑凝灰岩は福岡

県嘉穂郡の笠置山が原産地として知られている。5は滑石製の印判で、天地の判断がつきにくい。裏面には摘みを有し、4㎜の孔を穿っている。表面は一見花形状を想定させ、細い7弁から成り、上部に歯形を配する異形のものである。6は径約5.6cm、厚さ1.4cmの円形の印判で、表と裏面に径約0.8cm程の円形状の菊花文が密に印刻されている。7は径約10cm、厚さ約1.3cmの滑石製で中央に径約0.7cmの孔を有する円盤状のものである。外周の割れが激しいため、紡錘車と想定していいものなのか疑問である。8は径約9.7cm、厚さ2.5cmの瓦製で中央に約2cmの孔を穿ったものであり、上面に布目痕、下面に斜格子目文の叩きが残る。9～11は井戸(SE561)埋土の最下層から一括して出土したものである。9は滑石製石鍋で口径20.8cm、底径11cm、高さ9.3cmを測る。内部側面は縦と横方向に削った痕跡が残り、底面と共に磨滅している。外面口縁部は幅約1.4cmの鍔を有し、体部はノミ状のもので縦方向の削りが認められる。鍔から底部にかけて煤の付着が著しい。10は五徳といわれるもので、幅1.5cm、厚さ0.3cmの輪形を呈した金輪である。脚部は三脚から成り大部分が損失している。五徳の歴史は古く弥生時代に土器の底部を支えたと思われるものが発見されており、鉄の利用が盛んになるにつれ、今日に至っている。西行物語絵巻の「旅宿」に掲載されている。11は鉄鍋である。口径38.4cm、高さ19.7

(註17)



第18図　第33次発掘調査出土貨幣拓影（実大）

cmの大きなもので、底部はやや尖り、口縁部は外向し薄手に仕上げている。外体部には紐状で3方から吊したと考えられる痕跡が認められ、全体的に煤の付着が著しい。

貨幣（第18図）

今回土器、木製品の他に、顕著な遺物として貨幣がある。大宰府史跡調査の中ではこれまでに第5・23・28次の調査で多くの貨幣が発見されており、これらは観世音寺地区に集中して検出されている。(註18) 第5次調査では、北宋銭が主体をなし、唐銭、明銭も出土している。これらの出土貨幣は若干の疑問を伴うにしろ、層序関係ならびに年代を決定する好資料といえるものである。しかし出土中には、鐚銭も混在していることから、詳細に検討しなければならない。

今回は総数12枚で、すべて判読可能であり、土坑（SK641、606、614）とSD605の第Ⅰ層から主に出土した。第8表は、発見貨幣と出土地点を示したものである。1～3は土坑（SK641）、4・5はSK606、6・7はSK614の埋土（暗褐色土）から多量の土師器ないし、青磁、白磁片と共に出土した。これらのほとんどは北宋銭であるが、5はSK606から出土した南宋銭である。

（単位cm）

図版番号	銭種	径	厚さ	出土地点	初鋳年代（年）
1	天禧通宝	2.4	0.1	土坑（SK641）	宋真宗 1017
2	熙寧元宝	2.3	0.15	〃	宋神宗 1068
3	元祐通宝	2.45	0.17	〃	宋哲宗 1086
4	宋元通宝	2.4	0.12	SK606 土坑埋土	宋太宗 960
5	景定元宝	2.35	0.1	〃	南宋理宗 1260
6	大観通宝	2.4	0.15	SK614 土坑埋土	宋徽宗 1107
7	祥符元宝	2.5	0.1	〃	宋真宗 1008
8	天聖元宝	2.4	0.13	SD605 溝第Ⅰ層	宋仁宗 1023
9	聖宋通宝	2.3	0.12	落・込み	宋徽宗 1101
10	紹聖元宝	2.3	0.15	暗褐土	宋哲宗 1094
11	元豊通宝	2.4	0.13	茶褐土	宋神宗 1078
12	熙寧元宝	2.4	0.1	表土	宋神宗 1068

第8表　第33次調査出土貨幣計測表

土坑出土の貨幣中、5を除いた他の鋳造年代は、11世紀に集中している。又5.（景定元宝）は初鋳年が1260年で、13世紀の中頃とされるものであり、他のSK641、613出土貨幣に比べて製作年代が新しく、このSK606の時期を考えるとき5の検出によって、上限を知る一つの資料といえる。しかるに、わが国への流入期間を考慮し、かつ、貨幣と共伴して、出土した土師器等より、SK606の土坑の時期を考えると、少なくとも13世紀後半頃に考えられよう。

小　結

以上、遺構と遺物についてその概略を記した。今回の調査は左郭の8条9坊推定地における溝等の確認を大きな目的とした。調査の結果SD600とSD605の二条の溝を検出し、この溝が政庁中軸線からほぼ9町の距離に位置することを確認した（1町＝ 108mとして計測すると9町の距離はSD605溝のほぼ中央付近にその線がくる。）。条坊地域の調査はまだ緒についたばかりで今後に待つところは多いが、条坊を考える上で一つの資料となるものである。

郭内条坊を考える上での問題点として、これまでの発掘調査の成果(注19)から次の様なことが考えられる。

① 都府楼地区の南門・中門・正殿を結ぶ中軸線と、観世音寺の講堂の中軸線との東西距離は593mであり、これを5.5町とすれば1町は107、82mとなる。これは一つの基準である。

② 福岡県教委発掘第4次蔵司地区では県道の北側に東西に走る築地が発見され、それには門があった。その中心と都府楼の軸線の距離は325.30mで3町とすれば1町108.4mとなる。以上1・2が条坊の地割線上に正しく乗るかどうかは検討を要するが、地割線にのっていることは疑問あるまい。

③ 鏡山説9条7坊において、その中心に南北に走る道路が発見されている。これは西側に側溝をもつ。またその中に東西に走るやはり側溝をもつ道路が検出されている。南北の道路の中心は都府楼軸線より 702.9 mである。

④ 県教委第14次の大楠地区（県道吉木―関屋線の南隣）では南北方向に幅13m、深さ約2mの大溝とその西に約18mで、幅約1.5m、深さ0.5mの小溝の 2条の溝を検出。 小溝は政庁中軸線から西へ218mに位置し、2町として1町は109mとなる。

また東・西に位置する2条の溝SD600とSD605からは多量の遺物が出土したが、とくに今回顕著な遺物として「貞応三年」の紀年を有する木札がある。この木札が溝埋土の最下層から出土したことは少なくとも13世紀前半代にこの溝が在存したことを証明した。

溝の築造については最も重要な事であるが、出土した土器等の遺物に13世紀前半代をそれほど遡ぼるものがみられず、ここでは一応、貞応三年（1224）の時期の存在から、それをあまり遡ぼらない時期の築造が考えられる。またこの溝の廃絶の時期を考えるならば、第Ⅰ層の埋土が、溝の東側等で検出した多数の土坑の埋土と類似し、溝Ⅰ層の出土遺物および土坑出土遺物から考えてその廃絶の時期を13世紀後半～14世紀前半に考えたい。

SD605溝の東側で検出した柵および建物、それに土坑、井戸等は時期差があるものと思われるが、これらの時期は溝廃絶期の前後の時期から14世紀前半代のものと考えても差しつかえなかろう。

なお陶磁器については当館学芸二課の亀井明徳の教示を得た。

註

1） 鏡山猛『大宰府都城の研究』風間書房　1968

2） 亀井明徳「九州出土の宋・元代陶磁器の分析－大宰府出土品を中心として－」考古学雑誌第58巻4号　1973

3） 「前掲書」

4） 福岡市教育委員会『多々良遺蹟調査報告書』　福岡市埋蔵文代財調査報告書第二十集　1972

5） 福岡県教育委員会『浦城跡』第45集　1970

6） 溝（SD605）の東側で層位的には上層に位置する南北方向の石群があり、ここから常滑焼の口縁部が出土しており、これは行基焼第三型式に位置づけられており、これによれば鎌倉時代終末から室町時代にうつる南北朝時代に考えられている。杉崎章『常滑の窯』学生社　1970

7） 森田勉「九州地方の瓦器椀について」考古学雑誌　第59巻第2号　1973

8） 辻村泰圓・水野正好「南都元興寺極楽坊中世信仰資料包蔵坑発掘調査概要」大和文化研究7－1　1962

9） 重松敏美著『求菩提山修験文化攷』豊前市教育委員会　1969

10） 『草戸千軒町遺跡1969年度発掘調査概報』広島県教育委員会　1970

11） 同上

12） 「草戸千軒町遺跡第9・10次調査出土の木製品」No.9福山市教育委員会　1974

13） 関忠夫編『日本の美術－遊戯具－』　至文堂　1974

14） 奈良六大寺大観刊行会編『奈良六大寺大観』第9集　岩波書店　1965

15） 渋沢敬三編著『日本常民生活絵引3－馬医草紙絵巻概説－』角川書店　1971

16） 河田貞編『日本の美術－絵馬－』　至文堂　1974

17） 渋沢敬三編著『日本常民生活絵引3』角川書店　1966

18） 福岡県教育委員会『大宰府史跡－昭和45年度発掘調査概要－』　1970

19） 渡辺正気「大宰府条坊の諸問題」大宰府研究会会報No12　1975

3．第34次調査

第34次発掘調査は月山の東側の水田約 720m²について行なった。調査地点は政庁跡とは月山を間にして対称の位置にあり、方4町からなるといわれる政庁地区の東端、左郭2坊、に接している。筑紫郡太宰府町大字観世音寺字月山 547他に属する。

大宰府政庁は都府楼跡を中心として、県道関屋－吉木線の北側の方4町の区画にその庁域を推定され、東に方2町の学校院、さらにその東に方3町の観世音寺の区画がそれぞれ考えられている。しかし大宰府史跡の発掘調査の過程ではいま一つそれぞれの四至がはっきりせず、政庁の庁域が方4町よりも広がる可能性が指摘されるなど再検討の段階にきている。第34次の調査地点は政庁の中軸より東へ約2町の位置にあり(註1)、政庁地区と学校院地区の推定境界にほぼ相当する。したがって政庁と学校院との間になんらかの区画施設の存在する可能性があり、その有無の確認を調査の目的とした。また昭和48年度に実施した第31次発掘調査で東西方向の柵列を検出し、それがさらに東西にのびることを確認したが(註2)、自然地形からみて左郭2坊付近で北側に曲がる可能性があった。この点の確認もあわせて今回の調査の目的とした。

調査は8月7日から9月26日にかけて実施した。表土・床土の除去後、8月22日から遺構の検出にかかり、9月10日にはその遺構のほとんどを確認した。9月17日から実測を開始し、26日には調査を終了した。調査の結果、目的とした政庁・学校院間の区画に関する遺構・資料の検出はなかった。しかしながら第31次調査の東西柵列に対応すると推定される柵列を東西－南北方向に確認でき、初期の目的を十分に果たすことができた。このほか掘立柱建物2棟・井戸4基・土坑などの遺構を検出している。

検出遺構

柵（SA670） 調査区内のほぼ中央部で、南北－東西方向に直角に屈折する柵列を、南北方向11間分、東西方向3間分検出した。柱穴の掘り方は0.8～1m前後の隅丸方形をなすものが多い。中に3個柱根の残存するものがあったが、いずれの径も10cmをわずかに越える程度のものであった。柱間寸法は残存柱根3本の間隔の平均が約1.90mであるなど多少の出入りがあるが、約7尺である。

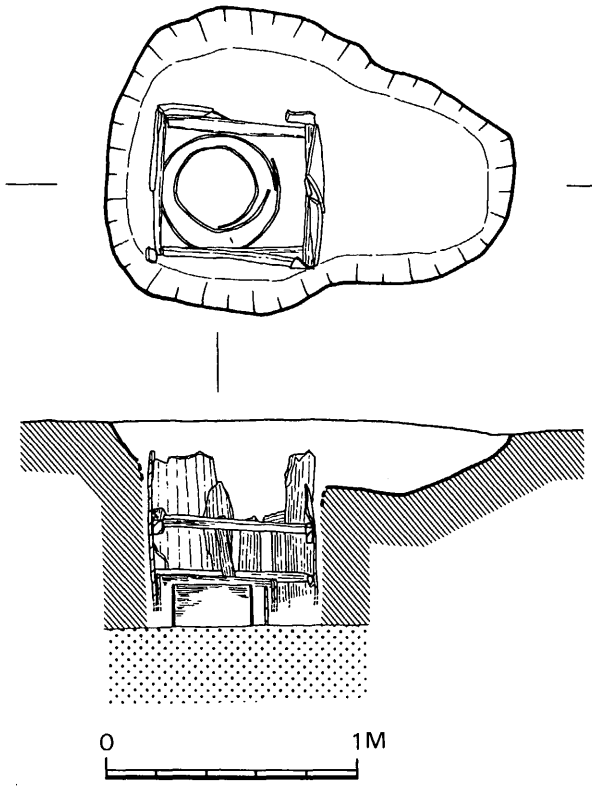
この地点はかつて自然の流路であったらしく、流木などの有機物を含む砂土が一面にみられる。柵列・掘立柱建物などの遺構は砂土の上に灰褐色の粘質土で整地した基壇状の部分で検出される。基壇状の部分は柵の東側に約2m、南側に約5m張り出しており、柵列同様南北－東西方向にほぼ直角をなしている。

掘立柱建物（SB665） 柵列の内側で検出された。梁行2間(柱間寸法8.8尺)、桁行5間（柱間寸法8尺）の南北棟である。柱根の掘り方は柵にくらべやや小さめの不整円形をなすものが多い。柱根1本が残存していた。柵列と並行しており、また柵との間の適切な配置からみて、

柵と同時期のものであろう。

掘立柱建物（SA663）　SB665に重複して検出された。梁行2間（柱間寸法約6尺）、桁行2間（柱間寸法約7尺）の東西棟のべた柱の建物である。柱穴の掘り方は50cm前後の円形に近いものである。柱穴の切合いからみてSB665に後出する。

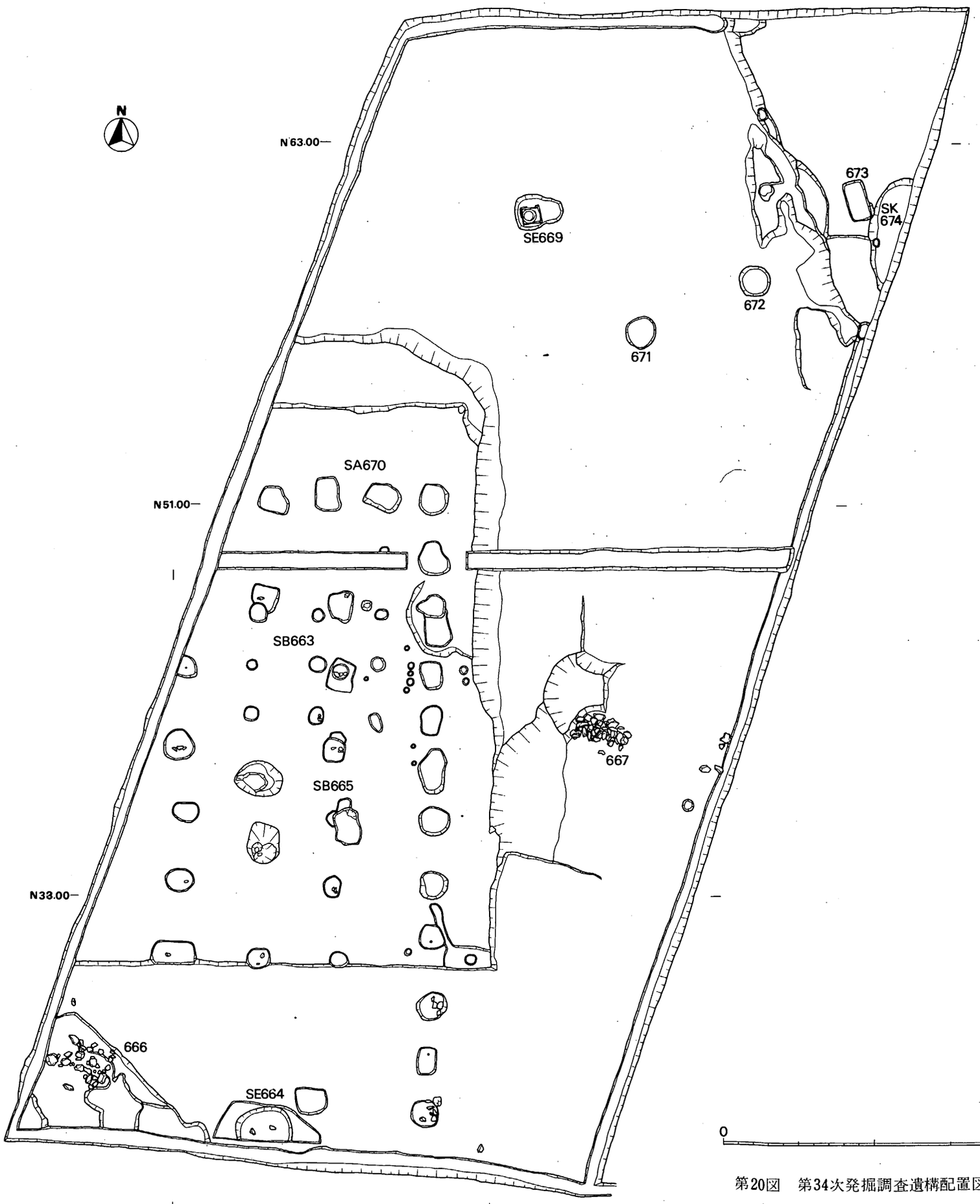
井戸（SE669）　井戸は柵の北東に3基（SE669・671・672）、調査区の南辺に接して1基（SE664）、検出された。SE669（第19図）の掘り方は長径160cm、短径120cmの不整楕円形をなす。一辺約60cm、深さ60cmの方形の井戸枠は幅5～30cm程度の板を縦に並べ、横桟を二段に組んで固定している。下段の横桟とほぼ同じ高さで、二重に据えられた径約45cm、径約30cmの曲物の上端が検出された。曲物は枠の西側に偏よって位置し、それを固定する施設はみられなかった。他の3基はいずれも掘り方のみで枠は抜きとられたものと考えられる。



第19図　井戸（SE669）実測図

土坑（SK673）　調査区の北東隅近くで検出された。N15°Eに長軸をとる。坑底で長さ123cm、北側幅60cm、南側幅56cmをはかり、ほぼ長方形を呈する。深さ約20cm。坑壁は四壁ともに焼けて堅くなっており、1～2cmほどの厚さに燃焼部が赤変している。しかし坑底はまったく焼けておらず、黒色の炭化有機物が堆積していた。坑内から遺物は検出されなかった。性格不明の土坑である。

土器溜（SK674）　SK673に接して検出された。遺構のかなりの部分が調査区外に広がるため完掘できなかったが、土師器・灰釉陶器・緑釉陶器などを一括して包含しており注目される。土坑は不整楕円形をなすと思われる。発掘部分の最大径は356cmをはかる。坑内の埋土は2層に分けられる。上層は厚さ約35cmの暗褐砂質土層でほとんど遺物を含まない。下層は厚さ約20cmの暗灰土層で、この層中に多数の土器を包含していた。



第20図　第34次発掘調査遺構配置図

このほか調査区内で性格不明の栗石群（SX666・667）などを検出している。

出土遺物

出土遺物は土器・瓦塼類が主で、他に滑石製品などが若干出土している。出土量は比較的少ない。土器は全域から出土したが、ことに土器溜SK674ではセットをなして出土しており、また井戸SE664・669・681でも2～3点ではあるがまとまって出土している。したがって土器はまず全域出土の土器を概観し、次に各遺構出土の土器をみておきたい。

土器（第21図・図版19）

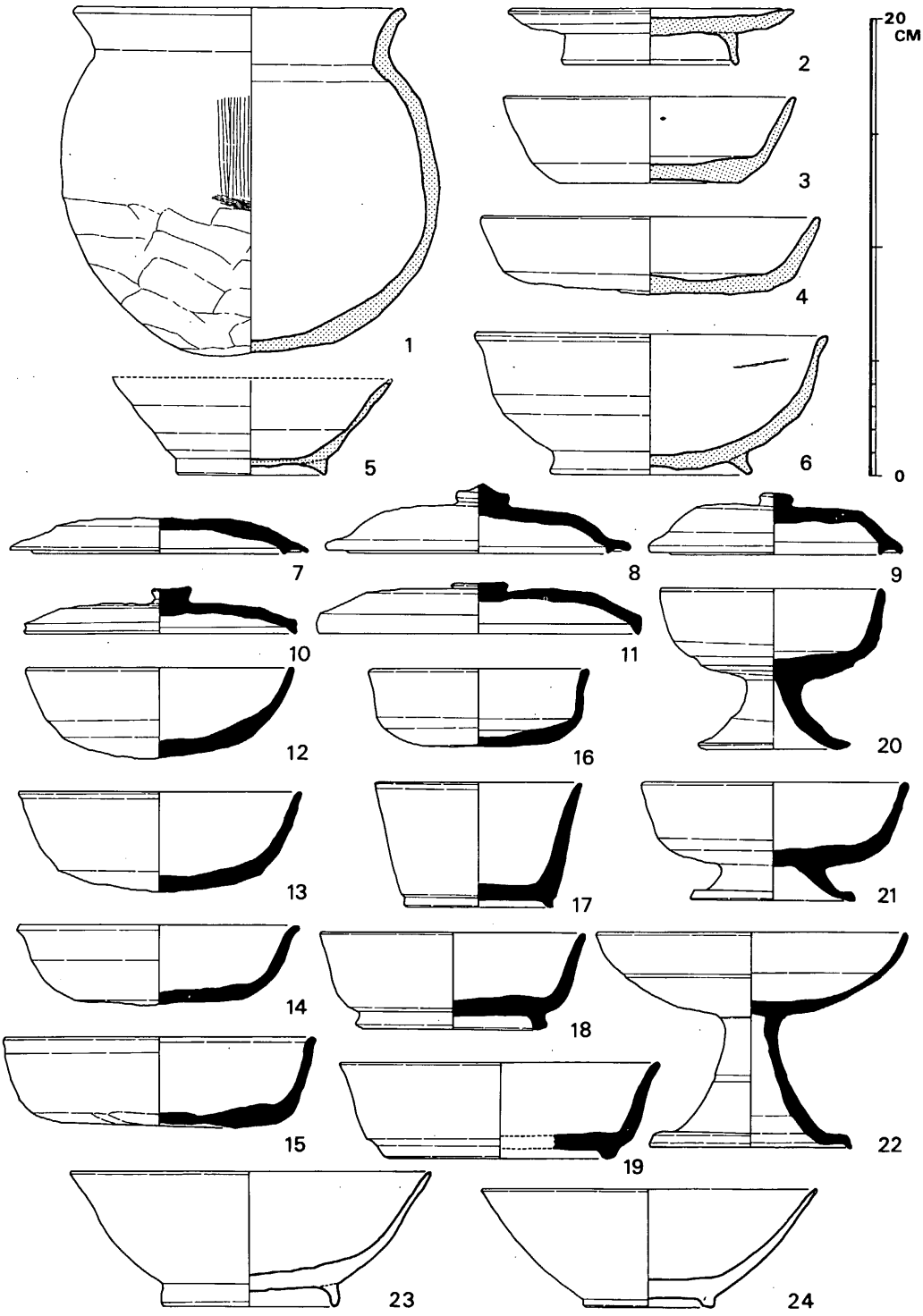
土師器（1～6）　壺・坏・有高台埦・皿・有高台皿などがみられるが、大半は小破片となっている。基壇状の部分を覆う灰褐土層からの出土が多く、1～6もそこからの出土である。

壺（1）　粗雑なつくりの壺で、赤黄色を呈し、部分的に黒灰色をなす。堅緻に焼成されているが、胎土に砂粒を多く混じえるため器表がややもろい。外面は口縁から頸部付近にかけて横なでで調整している。胴部の最大径より上位は縦方向の粗い刷毛目調整がみられ、一部に斜方向の細い刷毛目調整がみられる。最大径の下位から底部にかけてはヘラ削りの痕跡が乱雑に残っている。内面は横なで調整される口縁部を除いて、全体的にきわめて乱雑にヘラ削りされている。底部は丸底である。

坏（3・4）　3は灰黒色～灰褐色を呈する。体部は直線的につくられており、内外ともに横なでで調整されている。口径12.6cm、深さ3.0cm。底部には簾状圧痕をかすかに残す。胎土に細砂を含み、焼成が軟質のため、器表の保存状態はよくない。4は口径14.6cm、深さ2.6cmをはかる。3ほど洗練されたつくりでない点を除けば、色調・胎土・焼成ともに類似している。底部はヘラ切りされている。

有高台埦（5・6）　5はやや外反気味に広がる体部をもつ。口径は12.2cmほどに復原される。器壁はほとんど砂粒を含まない精選された胎土でうすくつくられている。堅緻に焼成され、淡い黄褐色を呈する。底部を除いて横なでで調整される。ヘラ切りされ簾状圧痕を残す底部には径6.5cmほどのするどくつくられた脚端を有する高台が付される。有高台埦は他にも出土しており、それらには6のように体部がわずかに内湾し口縁部に向かって広がる例が多い。6は内黒の土師器で、口径15.3cmの体部は内湾しつつ大きく外に広がる。ヘラ切りされた底部に、径8.5cmの高台が付される。胎土にほとんど砂を含まず、やや軟質の焼成とあいまって器表があれ、調整は不鮮明である。外面が横なで調整されるほか、内外ともにヘラみがきの痕跡がみられる。内面には全面に漆状の付着物がみられる。

有高台皿（2）　やや軟質に焼成され、淡い黄灰色を呈する。口径12.2cm、器高2.5cm。浅くつくられた皿部に高い高台が付されており、全体を横なで調整して仕上げている。胎土はわずかに細砂を含むが、よく精選されている。



第21図　第34次発掘調査出土土器実測図

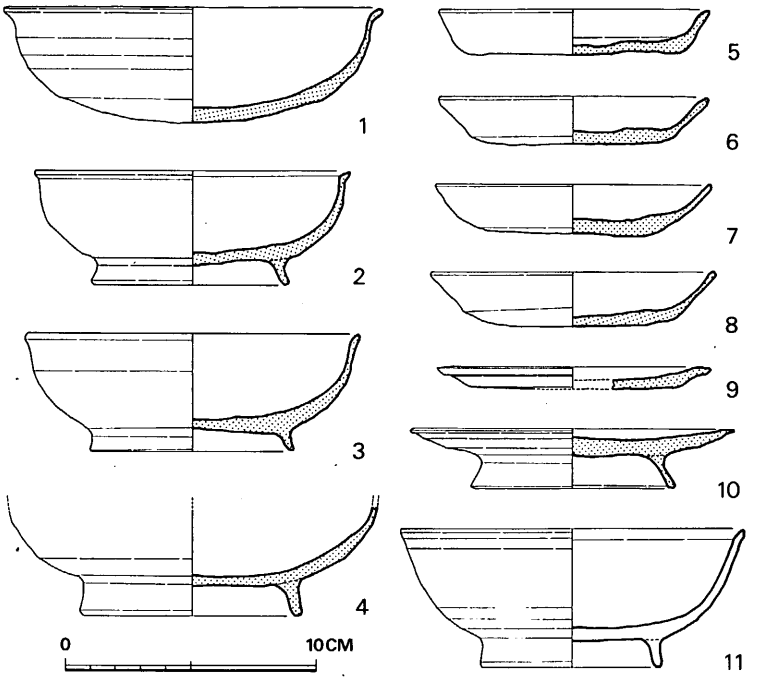
須恵器（7～22）　坏蓋・坏身・高坏などが出土している。灰褐土層からの出土が多いが、基壇状をなす茶褐土層（16・20）、灰砂層（18・21）からも出土している。

坏蓋（7～11）　もっとも出土量の多い器種である。つまみをもたず口縁部の先端に身受けのかえりのつくもの（7）、擬宝珠形のつまみをもち口縁部の先端に身受けのかえりのつくもの（8・9）、擬宝珠形のつまみが扁平となり口縁端が断面三角形をなすもの（10・11）、の三種に大別される。このうち後二者が多くほぼ同程度出土している。口径10～11cmほどの例が大半を占めるが、さらに大形の例が若干ある。7は天井部がヘラ削りされている。ほかはすべて横なでないしなで調整されている。胎土にわずかの砂を含む。堅緻に焼成され、内外ともに茶褐色を呈する。8・9は天井部はヘラ削りされているが、つまみ・口縁部付近および内面は横なでないしなで調整されている。わずかに細砂を含む胎土は堅緻に焼成され、灰色～淡い灰褐色を呈する。8・9の形態をとる例では9のようにやや扁平化したつまみを有する例は少なく、8の形態をとるものがほとんどである。10・11は胎土・焼成・調整ともに8・9と同様である。10は淡い茶灰色を、11は焼成がやや軟質のためか灰白色を呈する。

坏身（12～19）　坏蓋に対応して坏身の出土も多い。高台を有さないもの（12～16）と、高台を有するもの（17～19）の二種に大別できるが前者が圧倒的に多い。12～15は灰褐土層からの出土。いずれも細砂混じりの胎土を用い、堅緻に焼成している。灰色を呈する。底部がヘラ削りされるほかは横なでないしなで調整されている。12・13はやや安定を欠く底部から内湾しつつ口縁部にいたる体部をなす。14・15は安定した底部をもち、やや内湾気味の体部は口縁近くでわずかに外反する。16は茶褐土層からの出土。小豆色を呈する。調整は他の坏身と等しいが、全体につくりがていねいである。体部はわずかに外反するがほぼ直立する。外底部に円と直線を組み合わせた乱雑な刻文がある。17～19は有高台埦で、18が灰砂層、他は灰褐土層からの出土。精選された胎土を用い、堅緻に焼成している。灰黒色を呈する。調整は他の坏身と等しい。底部に低い高台を付しており、18ではそれがわずかに外方に張り出す。体部はいずれもわずかに外反しつつ口縁部にいたるが、17は体部がいちじるしく高くなる。

高坏（20～22）　灰色を呈する。少量の砂粒を含むがよく精選された胎土を用いており、また堅緻に焼成している。坏部の外底から体部にかけてヘラ削りするほかは、横なでないしなで調整をほどこしている。22には内底にもヘラ削りがみられる。20は茶褐土層、21は灰砂層からの出土で、短脚の高坏である。ことに21は脚が低く、高台と大差ないほどである。22は灰褐土層からの出土。20・21にくらべ器肉のうすい坏部は大きく外に広がりつつ口縁部にいたる。高くつくられた脚は裾部で急に外方に広がり、端部は内側に折り返えされている。

灰釉陶器（23）　灰褐土層からの出土。体部はやや内湾しつつ立ち上がる。内外ともに横なで調整されている。灰釉は全体におよばず、ことに外面はほとんど釉が認められないほどにうすい。釉のかからない部分は灰白色を呈している。胎土にかなり砂を含んでおり、堅緻に須恵



第22図　第34次発掘調査土器溜（SK674）出土土器実測図

質に焼成されているにもかかわらずもろい。口径15.7cm、器高5.9cm。

越州窯青磁（24）　灰褐土層から数点出土している。24は口径14.6cm、器高5.2cmをはかる。体部はやや内湾しつつ広がり、削り出された高台がつく。精選された胎土をきわめて堅緻に焼成している。うぐいす色の釉が全体にうすくかけられている。内外ともに重ね焼きの痕跡が白く残っている。

これらの出土の土器を概観すれば、基壇状の部分の整地および灰褐土層から出土する須恵器はほぼ第Ⅵ・Ⅶ期（奈良時代およびその直前）のものを中心とし、それよりも新しいものを含む。基壇状の整地が柵および掘立柱建物(註3)SB665と無関係とは考えられないところから、これらの遺構の時期を消極的に示すと考えてよかろう。

土器溜（SK674）出土土器（第22図・図版18）

土師器・灰釉陶器・緑釉陶器が一括出土したが、小破片が多い。内黒土師器や土師質の緑釉陶器は小片で図示できなかった。

土師器（1～10）　有高台埦と坏が主で、それ以外の器種はほとんどない。

坏（1・5～8）　1は口径14.7cm、深さ4.0cmをはかる。体部は大きく内湾するが、口縁部

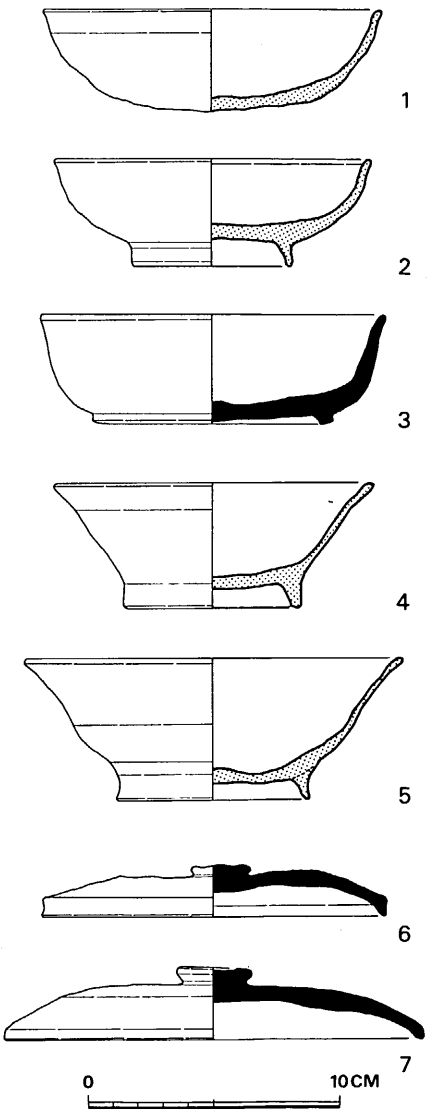
近くで急に大きく外反する。不安定な底部はヘラ切りされ、簾状圧痕を残す。外底部を除き横なでないしなで調整している。内面にスス様の付着物がみられる。胎土には細砂を含む。焼成はやや軟質で、淡い黄灰色を呈する。5～8は口径11cm、深さ1.5cmほどの大きさのもので、直線的ないしやや内湾気味の体部をなす。体部および内底は横なでないしなで調整される。底部はすべてヘラ切りされており、5・6には簾状圧痕がみられる。胎土はよく精選され、わずかに細砂を含む程度である。淡い黄灰色を呈し、やや軟質に焼成されたものが多い。

有高台埦（2～4）　1と同形の体部に高台の付されたもので、胎土・色調・焼成および調整も1と一致している。4の外底部はヘラ切りされており簾状圧痕を残すが、2・3ではなで消している。4のような高い高台の例は少ない。

皿（9）　口径9.7cm、深さ0.5cmほどに復原される。淡い赤褐色を呈す。胎土はわずかに砂粒を含む。焼成が軟質のため器表の保存状態が悪く、調整は不明。口縁部先端の上面に一条の凹線をめぐらしている。

有高台皿（10）　口径12.6cmの浅い皿部にやや高めの高台が付されている。器高2.4cm。全体に横なでないしなで調整されている。底部はヘラ切りである。ほとんど砂を含まない胎土をやや軟質に焼成している。淡い赤黄色を呈する。

灰釉陶器（11）　有高台埦1点が出土している。体部はゆるやかに内湾しつつ口縁にいたる。口径13.6cm、器高5.5cmをはかる。径6.9cmの高台が貼付けられる。体部の下半にわずかにヘラ削りの痕跡を残すが、全体に横なでないしなで調整している。内面に釉がかけられているが、内底にはいたらない。外面の釉はきわめてうすく、釉のかけられていない部分が大半である。胎土には砂を含まない。灰白色を呈し、堅緻に



第23図　第34次発掘調査出土土器実測図
1～3　井戸（SE669）
4、5　井戸（SE671）
6、7　井戸（SE664）

焼成されている。

1～11は一括出土しており、セットをなす。出土の土師器はすべてヘラ切りで、糸切りの例は1点もない。また須恵器を共伴することもない。これらの事から一応の年代観をうることができるが、積極的な年代決定の根拠がなく、将来の編年の参考資料として提示しておきたい。

井戸（SE669）出土土器（第23図1～3、図版18）

いずれも井戸埋土の上層から出土しており、一括土器のしうるかについては疑問が残る。1は土師器の坏で、口径13.2cm、深さ3.1cmをはかる。丸く不安定な底部からやや内湾する体部をへて、わずかに外反する口縁部へと広がる。底部がヘラ切りされているほかは、全体を横なで調整されている。胎土は粗い砂を若干含む。堅緻に焼成され、黄灰色を呈する。2は土師器の有高台埦で、口径12.3cm、器高4.3cmをはかる。体部は1とほぼ同様の形態をなす。焼成がやや軟質である点を除けば調整その他の特徴も1に通じる。3は須恵器の有高台埦で、径13.5cm 器高4.4cmをはかる。体部はほぼ水平の底部からわずかに外に広がりつつ直線的に立ち上がる。低く付けられた高台は外方に広がる。底部がヘラ切りされるほかは横なで調整されている。胎土はよく精選されているが、やや軟質に焼成され、そのため器表が荒れている。内外とも灰色を呈する。

井戸（SE671）出土土器（第23図4・5、図版18）

2点とも井戸上層の埋土からの出土で、土師器の有高台埦である。大きさに相違があるものの高台から口縁部にかけてやや外反しつつ大きく外方に広がる体部は4・5とも良く類似している。全体を横なでないしなでで調整している。胎土には砂粒を多く含んでいる。4は淡い赤黄色を呈し、堅緻に焼成されている。口径12.4cm、器高5.0cm。5は淡い黄灰色を呈し、軟質の焼成である。口径14.7cm、器高5.6cm。

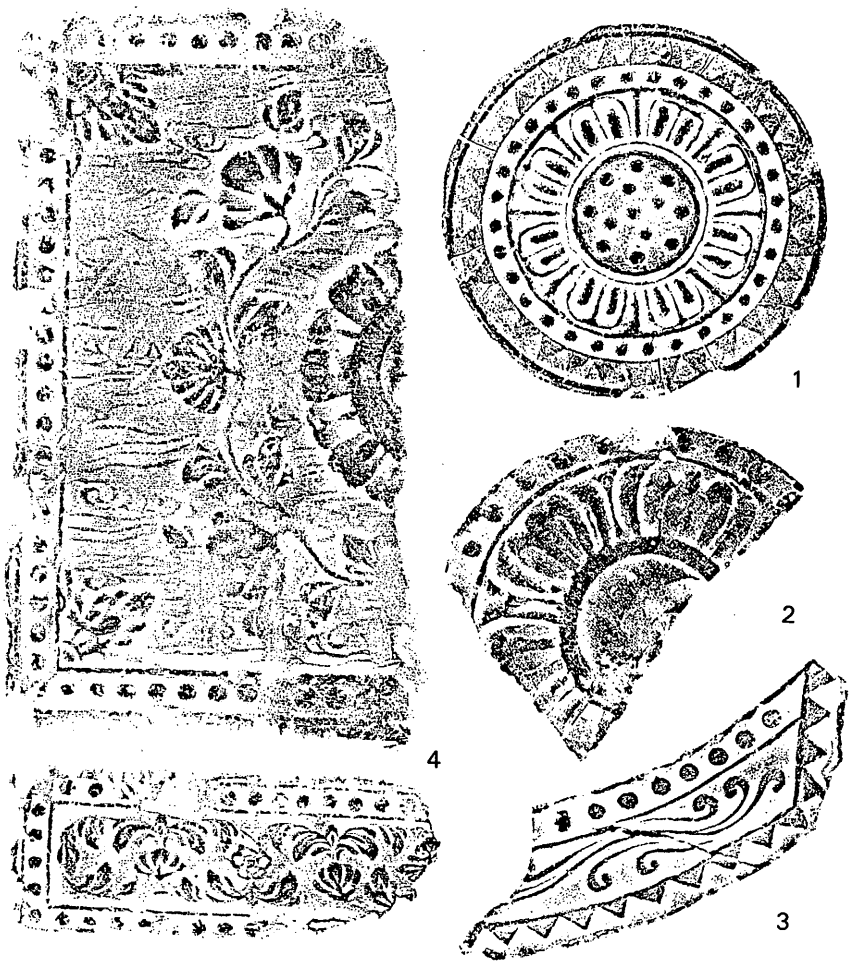
井戸（SE664）出土土器（第23図6・7）

2点ともに井戸上層の埋土からの出土で、須恵器の坏蓋である。扁平なつまみと断面三角形をなす口縁端を有し、灰褐土層から出土する坏蓋と共通する特徴をもつ。6は口径13.6cm、器高2.1cm。7は生焼けのためやや軟質で、赤褐色を呈する。口径16.5cm、器高2.9cm。

瓦塼類（第24図、図版22）

今回の調査で出土した瓦塼類は比較的少ない。丸瓦・平瓦が出土の大半を占め、わずかに軒丸瓦・軒平瓦・塼（文様塼を含む）がみられる。調査区の全域から出土している。基壇状の整地部分に包含された瓦のほとんどは縄目叩きで、床土および灰褐土層からは格子目叩きの瓦および塼が出土した。また井戸（SE664）の埋土中からも多数の瓦が出土している。

軒丸瓦は8点出土した。全形をうかがいうるのは第24図1・2の2例で、他は小破片となっている。1は老司式の系統をひく、やや小形の端整につくられた瓦である。内区は複弁の八弁蓮華文で、中房に1＋4＋8の蓮子を配している。外区は一段高くつくられ、内縁に32個の珠文、外縁に32個の陽起鋸歯文を配している。2は内区文様に重複がみられるなど粗雑につくら



第24図　第34次発掘調査出土瓦塼拓影

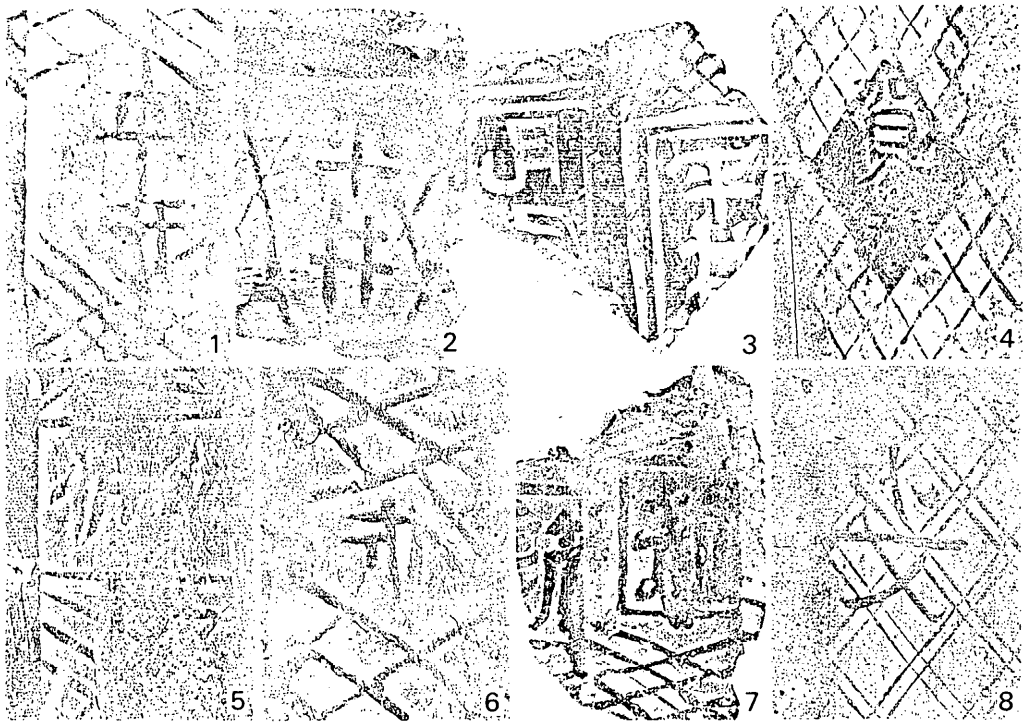
れているが、出土例の少ない瓦当文の瓦である。類例からみれば、内区は複弁の六弁蓮華文で、中房に１＋６の蓮子を配する。内区とほぼ一面をなす外区には21個ほどの珠文を配する。

軒平瓦は２点出土している。いずれも老司Ⅱ式に属し、内区に偏行唐草文を配する（第24図３）。３には笵割れがみられる。

文字瓦（第25図）は25点出土した。なかでも「平井」「佐」銘のものが多く、他に「安」「賀茂」「岡」「八年」がみられる。「平井」「佐」は叩目、書体などによって数種に細分される。結局25点の瓦は14種に細別され、１種１点の例が多く、この地点の特徴を示すものはない。

文様塼は８点出土しており、うち１点はいわゆる三角塼である。第24図４は昭和48年度の第31次調査で出土した完形の文様塼と文様を全く等しくしており、同笵と思われる。27.0cm×33.0

(註4)



第25図　第34次発掘調査出土文字瓦拓影(½)

cmに復原される大形塼である。上面と側面の2ヵ所に文様があり、いずれも鮮明に残っている。上面の文様は、長方形の外縁に珠文を配し、中央に単弁の蓮華文、その周囲に蔓草文をめぐらす。また四隅を覗花文で飾り、これらの文様の余白を波状文で埋めている。側面は周縁を珠文で囲み、その内側に唐草文を配している。

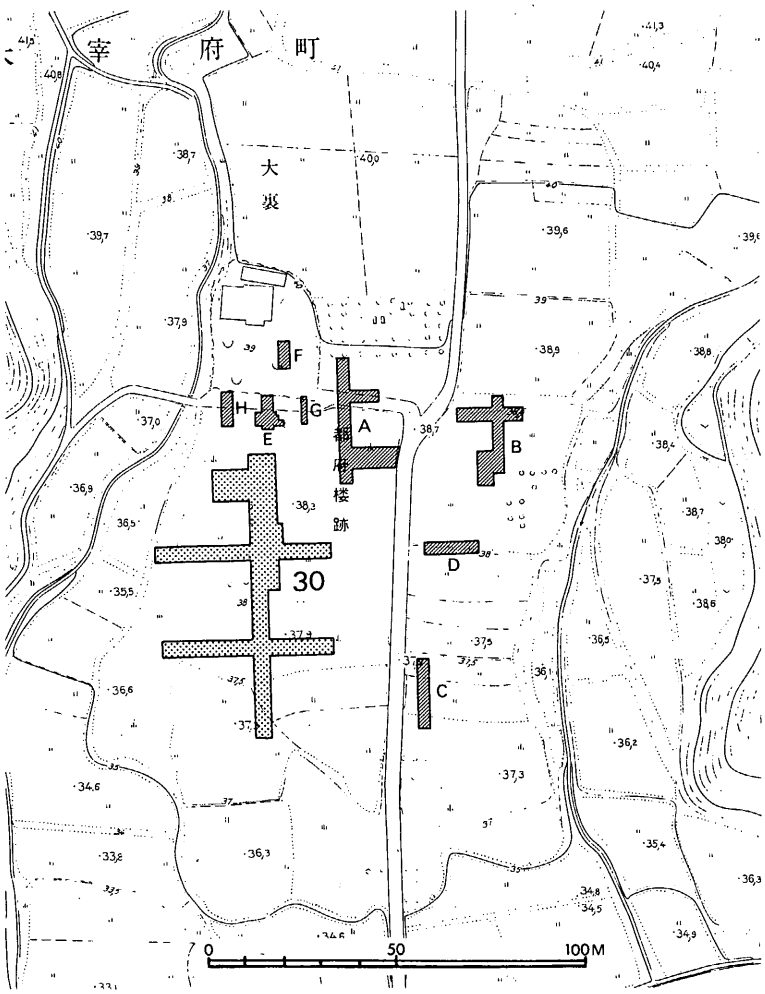
小　結

方形の基壇状の整地と柵に囲まれた掘立柱建物の存在の確認によって、学校院と政庁との関係に新たな問題が提起された。これまで学校院は政庁・観世音寺の間の方2町の区画に推定されてきたが、その点に疑問が生じてきたのである。

今回検出した柵SA 670の南北柵は政庁中軸線より229.24cmにあり、推定左郭2坊の線より13.24m東による。また東西柵は南門中心線より北へ62.46mにある。この東西柵が推定左郭2坊の線に沿って再び南折し、掘立柱建物SB 665を取り囲むとはいささか考え難く、自然地形からみて第31次発掘調査で検出された東西柵SA 560と一連のものと考えるほうがより妥当である。正しく並行する両東西柵は70.80m（約236尺）の間隔をもつ。

これらの柵が一連のものであるとすれば、政庁と学校院との間に左郭2坊を無視して広がる官衛的区画を想定しうることになる。すでに右郭では、右郭2坊の線が蔵司の倉庫群を切るなど、方4町の区画がかならずしも規則的でないことが知られている。左郭にもまた2坊の線を無視した区画が存在することになれば、政庁地区が方4町をなすという概念に再検討の必要が生じてこよう。これまでの発掘調査の結果からみても都府楼と通称されている政庁を中心にいくつかの官衛群が方4町以上の広がりをもって存在する可能性が考えられている。今回の調査はその可能性をより裏付けたといえよう。さらにまた学校院は方2町よりも小規模となる。

第31次調査の東西柵と、今回検出した東西ー南北柵が一連のものである可能性は強いが、まだまだ検討の余地が多い。しかもこのような想定の成立の可能性は内容が重要なだけに確認しておく必要がある。そこで第35次調査として第31次調査地点の西側を発掘し、ほぼ想定の正しさを確認した。したがって今回の成果の検討は第31次調査・第35次調査と関連させ、後述したい。



第26図　第30次補足調査遺構配置図

註1）九州歴史資料館『大宰府史跡第30・31・32次発掘調査概報』1974

2）　同　上

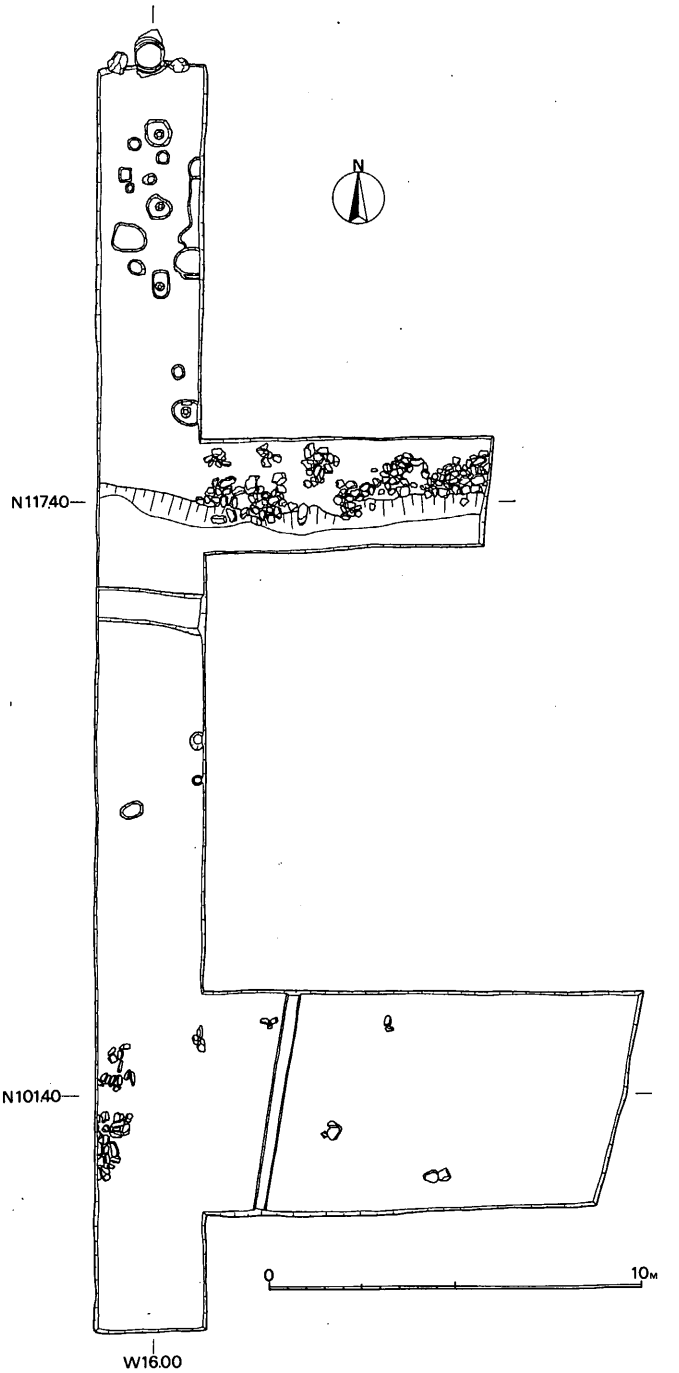
3）小田富士雄編『立山山窯跡群』1972

4）註1）と同じ

4．第30次補足調査

昭和48年度第30次調査として[(註1)]政庁回廊内西脇殿について調査を行った際、脇殿前面で玉石敷遺構を検出した。しかしながらこの調査は環境整備事業の事前調査であったため全面発掘は行わずトレンチによって遺構の状況を確認する程度にとどまった。この第30次調査の際の判断では、この玉石敷は約4mの幅で脇殿前面に敷かれているのではないかと推測した。しかしながらこの玉石敷の幅を確認した範囲はきわめて狭く、また敷かれた玉石の状況にも若干の疑問点があることから昭和49年度環境整備事業の開始に先立ち、この玉石敷の状況について、さらにくわしい知見を得るため補足調査を行うこととした。

この回廊内には現在そのほぼ中央部を南北に町道が通っており、また期間的な制約から広範囲を発掘調査することは無理であると判断したため第30次調査同様トレンチによって調査を行



第27図　第30次補足調査Aトレンチ遺構配置図

うこととした。トレンチ設定個所は第26図に示すとおりである。調査は9月9日に開始したが他の調査と並行して行ったため調査を終了したのは12月16日である。

検出遺構

検出した主な遺構は玉石敷、掘立柱建物及び東脇殿基壇の一部などである。ここではさきにも述べた如く回廊内の玉石敷の状況についての知見を得ることを主な目的としたためこの玉石敷を主体として各トレンチごとに遺構の状況について報告する。

Aトレンチ　正殿前面の西よりに幅3m、長さ30mで南北に設定した。このトレンチの北端は正殿最南列の礎石に接している。

現地形はトレンチの北端から約10m南のところから約40cmほど低くなる。この一段高くなった正殿前面では玉石敷は認められず正殿に接して掘立柱建物の柱穴掘方3個を南北方向に検出した。時期は不明であるが玉石敷以前の遺構と考えられる。トレンチ南半部では第27図の如くトレンチ西壁に接して一部玉石敷を検出したが他はすべて抜きとられている。

この玉石敷の上面は現地表面からわずか10cm程度で、きわめて浅い。したがってこの付近一帯の玉石敷は大半が抜きとられている可能性が大きい。

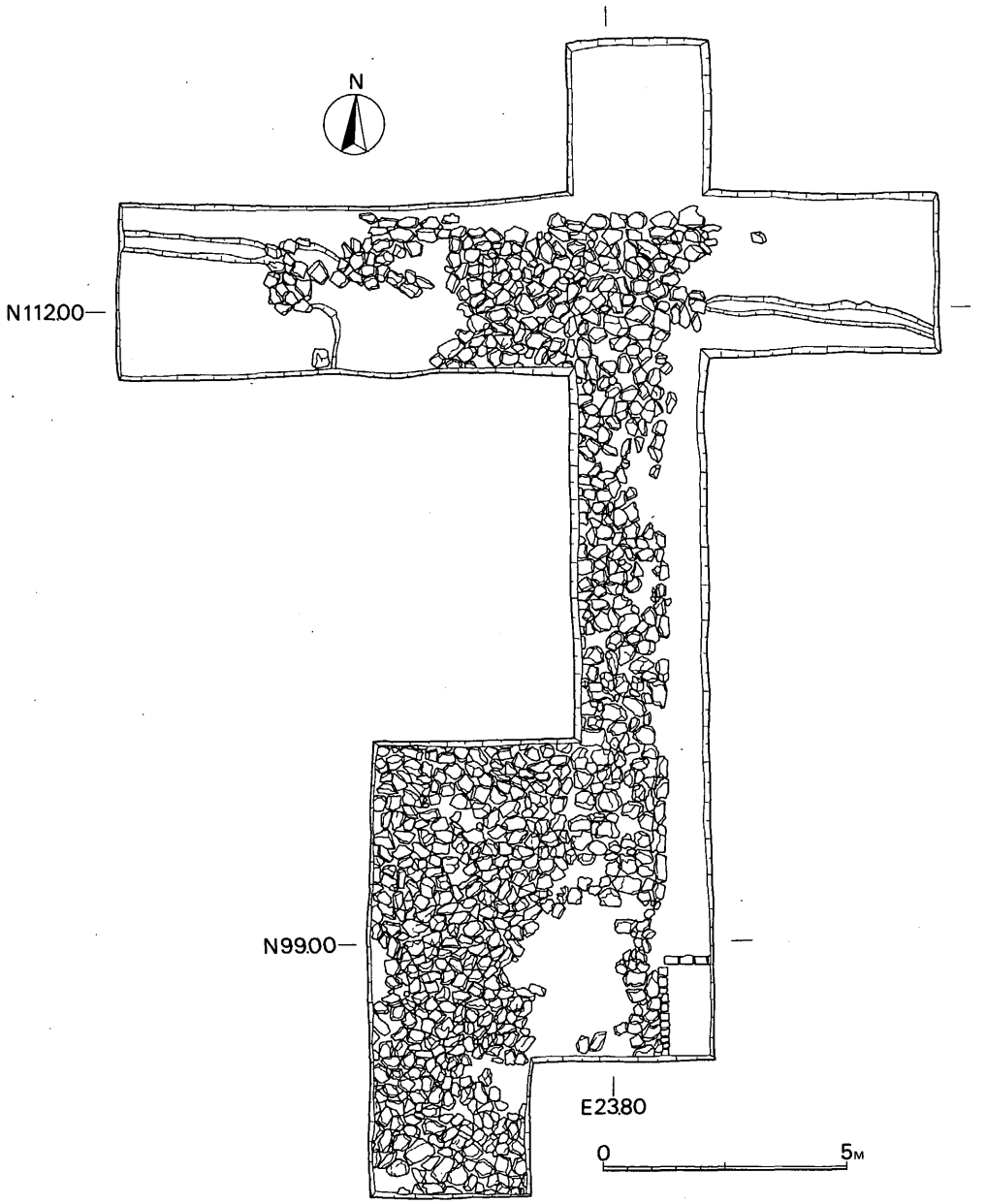
このAトレンチは正殿中心線から西にずれているため正殿中心線上の遺構状況を確認するため2ヵ所においてトレンチを拡張した。

南拡張区では予想どおり玉石は大半が抜きとられ1～2個の玉石が認められた程度である。北拡張区では正殿前面の一段高くなった部分では比較的良く遺存していた。しかしながらこの玉石の上面はトレンチ南端で検出した玉石よりも約30cmほど高い位置にある。

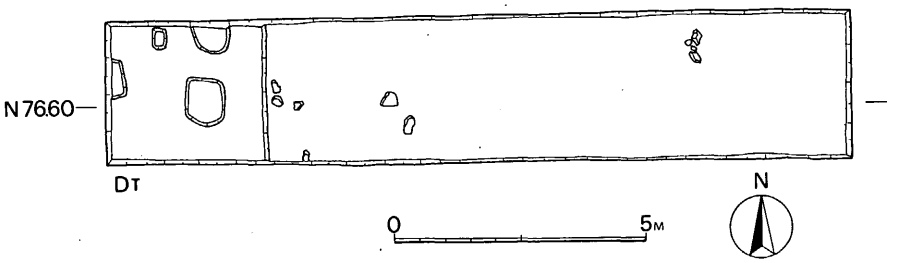
Bトレンチ　東脇殿前面に幅3m、長さ21mで南北方向に設定した。このトレンチの北端は昭和47年度に行った第15次調査地に一部くいこんでいる。このトレンチでは玉石敷の遺存状況はきわめて良く、西脇殿前面と同じように東脇殿前面も玉石敷であることが明きらかとなった。この部分に使用されている石は西脇殿前面のものの約2倍程度の大きさである。しかしながら確認した範囲が幅3mであったためさらにトレンチを拡張することとした。この結果南拡張区では一面に玉石敷が残っておりさらに西へも続いている。拡張の結果検出した範囲は東西6mである。また北拡張区では一部分玉石が抜かれた部分はあるが東西に約9m分を検出した。この結果からみて第30次調査の際に玉石敷幅を東西4mではないかと推測したことは誤りであることが明らかとなった。またこのBトレンチで検出した玉石敷の最北端の二列の玉石は互いに石の面を直線になるように並べられており、一種の見切りではないかと考えられる。このことは正殿前面の玉石敷が一段高くなっていることと関連性をもっている可能性がある。

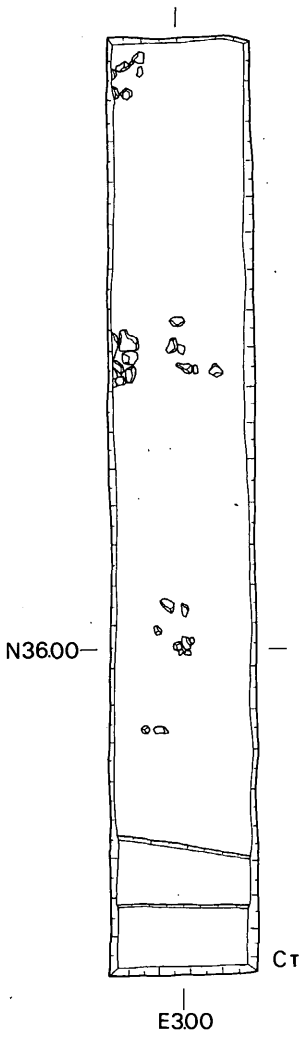
Cトレンチ　中門の北に幅3m、長さ19mで南北方向に設定した。トレンチ南端は第1次調査地に重さなっている。ここではトレンチの中央部および北端で数個の玉石を検出したのみで

他は全て抜きとられている。また遺存している玉石敷の最南端のものは中門基壇北端から北へ約17mの位置にある。



第28図　第30次補足調査Bトレンチ遺構配置図



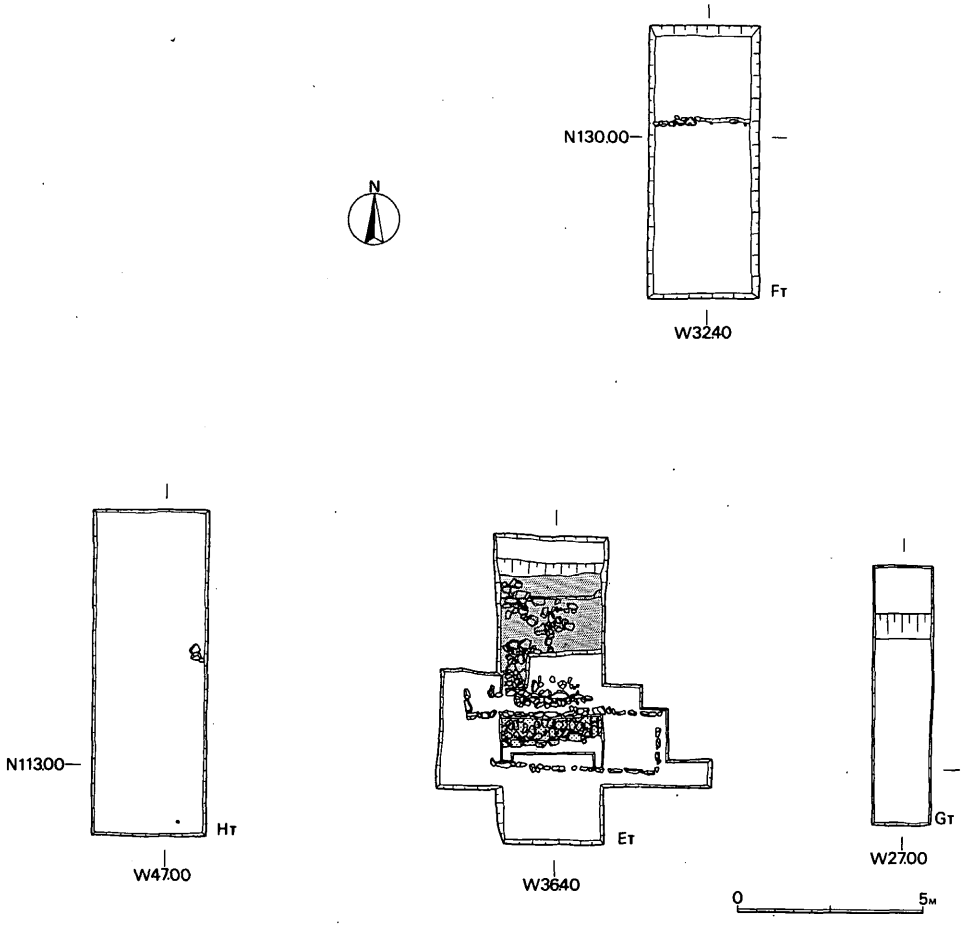


第29図　第30次補足調査
C・Dトレンチ遺構配置図

Dトレンチ　東、西両脇殿にはさまれた中央部のやや東よりに幅3m、長さ15mで東西方向に設定した。ここでは玉石はほとんど見当らず数個の玉石が散乱している状況であった。またトレンチ西端を一部掘り下げたところ掘立柱建物の柱穴掘方を検出した。

Eトレンチ　Aトレンチにおいて記述したごとく正殿前面の玉石敷と同トレンチの南端で検出した玉石敷との間には約30cmほどの高低差のあることが判明したが、この状況をさらにくわしく知るためAトレンチの西方約20mのところに幅3m、長さ9mの小規模のトレンチを設定した。このトレンチでは中央部に東西方向に並ぶ2列の玉石列とその北に接して小範囲の玉石敷を検出した。しかしながらAトレンチおよびBトレンチで検出した玉石敷とはかなり様相を異にしているため、さらに東、西に拡張するとともに、さらに深く掘り下げたところ下層からは2時期にわたる玉石による遺構を検出した。最下層の遺構は最南列の玉石が溝の側石状に一段高く積まれており、東西にのびる玉石溝とも考えられる。またその上層のものは玉石がかなり抜かれてはいるが、さらに広がっているものと考えられる。次に最初検出した最上層の遺構は西拡張区において南側の玉石列が北へ折れ北側の玉石列に接続している。この玉石列に囲こまれた内部は小さな礫が敷かれている。

Fトレンチ　正殿西側の北面回廊の部分について幅3m、長さ7.5mで南北方向に設定した。正殿東側の北面回廊については昭和46度に第15次調査として発掘調査を実施した



第30図　第30次補足調査E・F・G・Hトレンチ遺構配置図

が、この時には玉石敷らしき遺構は一切検出されていない。今回のこのFトレンチにおいてもトレンチ中央部よりやや北へ寄ったところで東西にならぶ回廊基壇の側石を検出した。

しかしながらこの基壇側石より南では何らの遺構も検立されなかった。

G・Hトレンチ　Eトレンチで検出した玉石組み遺構は、さらに東、西にのびていると推定されたためEトレンチの西に幅3m、長さ9m、東側に幅1.5m、長さ7mの小規模なトレンチを設定し調査を行ったが、この二つのトレンチでは何ら遺構は検出されなかった。

小　結

今回の調査はさきにも述べたごとく昭和49年度の環境整備事業の事前調査として行ったため

時間的な制約と現在回廊内には、そのほぼ中央部に町道が南北に通っているためトレンチにより遺構の状況を調査せざるを得なかった。したがって玉石敷の細部について撤底的に追求できなかったことは否定できない。

ここでは今回の調査結果とさきに行った第15次調査および第30次調査の結果をも勘案しながら回廊内部の状況について若干の考察を加えておきたい。

第30次調査として行った西脇殿の調査において、脇殿前面から玉石敷遺構が検出され、この調査結果から推測して東、西両脇殿、および正殿、中門に囲こまれた地域にはおよそ幅4mの玉石敷がおかれているのではないかと考えられた。しかしながら検出遺構のところで述べたごとく今回の調査で東脇殿前面に設定したBトレンチでは幅9m以上にわたって玉石敷を検出しまたAトレンチおよびCトレンチにおいても、ごく一部ではあるが玉石敷が検出された。このことからみて東西両脇殿、および正殿、中門に囲こまれた回廊内中央部は全面にわたって玉石敷がおかれていたと考えても大過ないものと思われる。

またAトレンチ北拡張区で検出した玉石敷は約30cmほど高くなっており、正殿前面は東、西両脇殿前面の玉石敷よりも一段高くなっていたと考えられる。しかしながらその具体的な点については今回の調査では明確にし得なかった。ただBトレンチにおいて検出した玉石敷の最北端の2列の玉石が一種の見切り的な意味でならべられたものと考えると、この石列を境にして正殿前面が一段高くなるのではないかとも推測される。しかしながら、高低差が、わずか30cm程度であることから、ここでは断定することはさけておきたい。

註1）九州歴史資料館『大宰府史跡　第30・31・32次発掘調査概報』1974

註2）本調査については、九州芸術工科大学の沢村仁教授には、たびたび現地において指導、助言をいただいた。記して謝意を表する。

5．第35次調査

第35次調査は、政庁跡東側の通称月山と称する丘陵の南側の水田地約1,100m²について発掘調査を行った。

昭和48年度には、第31次調査として当該地の東側の水田地約1,150m²について調査を行っており、東西方向の柵列(SA560)を検出している。その結果第4次調査で検出した築地および南門築地、それに柵と3個所における都府楼前面の構造は(註1)、3個所とも位置的にずれることが判明した。又今年度、第34次調査として月山東側の調査を行い、東面柵列と北面柵列さらに掘立柱建物を検出した。この柵列と第31次検出の柵列を互いに延長すると一点に結ばれることなどから、小規模な官衙跡の存在を想定したのである(註2)。よってこれらは政庁庁域を考えるうえに大きな問題点となった。したがって今回は、第31次調査で検出した柵列の西方の行方、つまり南門

築地との接続関係、又政庁と学校院の境界問題など相互の接続関係を明確にすることを主な目とした。

調査は当該地の東半部が私有地であり、耕作上の関係から11月1日に開始した。当初は発掘区を私有地の西側一区画までとし、耕作土等を除去した後、11月20日から遺構検出に入った。遺構検出は西と東の両端から併行して行い、東側の柵列の検出を計ったが、柱穴らしき遺構はなく、昭和50年1月10日よりさらに東側の一区画を拡張し発掘した。1月14日その柱穴を検出し、東西4間、南北3間で北折することが明確となった。西側においては、遺構面が深く後世の攪乱もあって、遺構検出に多少困難を併ったが1月24日終了した。調査に着手した当初は、政庁地区の第30次補足調査があり、作業員が半数となったため検出にかなりの時間を費した。写真撮影、実測を行った後、細部の補足調査を行い、2月16日すべて調査を終了した。

検出遺構

第35次調査において検出した主な遺構は柵、掘立柱建物、石組溝、溝、土坑などである。遺構は主に発掘区の東と西に分離し、東側では、第31次調査で3期に分かれたうちのI期に属する柵（SA560）、II期の溝（SD562）とIII期の掘立柱建物（SB675、676、677）がある。その他土坑（SK678）およびピット群を検出した。西側においては、北西から南東にかけて幅約15mの自然流路があり、それに堆積した砂礫層の上に石組溝（SD687、688、689）を検出した。これらの遺構について以下述べる。

柵（SA560）　第31次発掘調査で検出した柵（SA560）の延長である。柵は東西に4間、南北に3間分を検出し、柵列が北折することが明らかとなった。柱穴は0.8～1.0m前後の方形状のもので、柱間寸法は約2.10m（7尺）である。東西柵列はII期のSD562によって大部分壊されている。これら柱穴埋土からは少量の土器片が出土したが、器形を推定できるものはなかった。この柵は政庁中軸線から約117.14mで北折し、南門築地との接続、又第4次調査で検出した築地との接続関係は途絶えたこととなる。

溝（SD562）　この溝も第31次調査検出の延長である。東西方向に走り柵（SA560）を切断しているものである。溝は幅約0.6～0.8m前後で、深さ約0.3mのU字溝を呈する。発掘区東端から西へ約21m延び、後世の自然流路により削除されている。溝埋土は暗茶灰色土で土器片、瓦片が若干出土した。

石組溝（SD687・688・689）　発掘区西端に検出した石組の溝である。これらの溝は、幅15mの北西から南東にかけて自然流路があり、それに砂礫が堆積した上部に構築されているものである。その堆積状況は場所によって多少の出入りはあるが、大きく3層から成り最下層（I層）より茶褐荒砂、II層は灰色荒砂、III層は茶灰色土と黄灰色土である。III層の上部には、茶灰砂



第31図　第35次発掘調査遺構配置図

土（礫・瓦を含む層）があり、瓦片が若干出土した。

SD687は688の南東に検出した溝である。長さ約5m、最も保存状態のよいところで3段積重ねている。石は径約45cmのものが大部分で、北東側を石面としている。SD687と688の新旧関係は、SD687がII層の灰色荒砂を切って茶褐荒砂の上に石を積んでいることから、SD688より後に構築されたものと考えられる。

SD688は発掘区北西端から南東に長さ約13.5m、幅1.2mの石組溝である。北西端部で最も保存状態がよく、両側石は径約40～50cmの不定形のもので一段分残存していた。内面は人頭大の石を敷いている。石は自然石を用い、II層の上に築造していることが判った。堆積層には瓦片土器片が多量に含有し、特に瓦は砂礫に混って、おびただしい量が出土した。

SD689は687の南側に検出した南北方向の石組溝である。この溝は意外に保存状況がよく、幅約1.6m、長さ約13.5mで、北から南方に若干傾斜を有する。側石は西側が保存がよく、南方において3段分残存していた。東側は北方で1個、南方で6個残っている。溝内面はSD688よりやや大きい自然石を敷詰めている。内面石敷上部は灰色砂土（やや赤味がかった砂）で、土師器、瓦片が若干出土した。この灰砂はSD688にも認められた。石組溝の構築は地山（花崗岩バイラン土）の上に石を積んでおり、東側積土との新旧関係は堆積土の層位からSD689が先行するものと考えられる。

掘立柱建物（SB675・676・677）　いずれもSA560の北と南側に検出した掘立柱建物である。SB675は北側に検出した梁行2間（柱間寸法7尺）、桁行2間(柱間寸法8尺)の東西棟である。この建物の柱穴掘方は0.2～0.3mの小規模なもので、掘方埋土から土師器片が出土した。

SB676は675と重複し、梁行2間（柱間寸法7尺）、桁行3間（柱間寸法6.5尺）の東西棟である。この建物は675と異り約9度南側に傾向いている。柱穴掘方は0.3～0.4m、深さ約0.4mで、掘方埋土から土師器片が若干出土した。

SB677はSD562と切合い関係をもつ小規模な建物である。この建物はSB676と方位を同じくし、梁行2間（柱間寸法6尺）、桁行2間（柱間寸法6尺）のもので、第31次調査のSB555と類似している。掘方は小さく径約0.15～0.2m、深さ0.3mである。梁行西側の中柱はSD562と切合っており(註3)、これらからSD562が先行するものと考えられる。

土坑（SK678）　SB675の北側に検出し、黄灰色粘質土（地山）に掘込まれた土坑である。一辺が約1mの隅丸方形を呈し、深さ約0.9mである。この土坑は層位的に、黒色土（炭化物と若干黄色粘土が混り、土器を多量に含む）が、上層で茶灰色土、下層で暗黄灰色土と交互になっている。黒色土は4層認められた。第33図に示す土器はこれらから出土したものであるが、主として黒色土に包含していたものが多い。

その他発掘区北域において土坑（SK679、680、681）とSD689の西側で礎石2を検出した。土坑は地山（花崗岩バイラン土）を掘込んでおり、大きさは一定してないが約5×3m、深さ

約1mのものである。底部に人頭大の自然石や瓦片が検出した。土坑から出土した遺物は少ないが、近世陶器を含んだものもあり、時期的に新しいものと考えられる。又礎石は自然流路により流されたものと考えられ、政庁脇殿の礎石に類似するものである。

出土遺物

土器（第32図7～23、図版21）

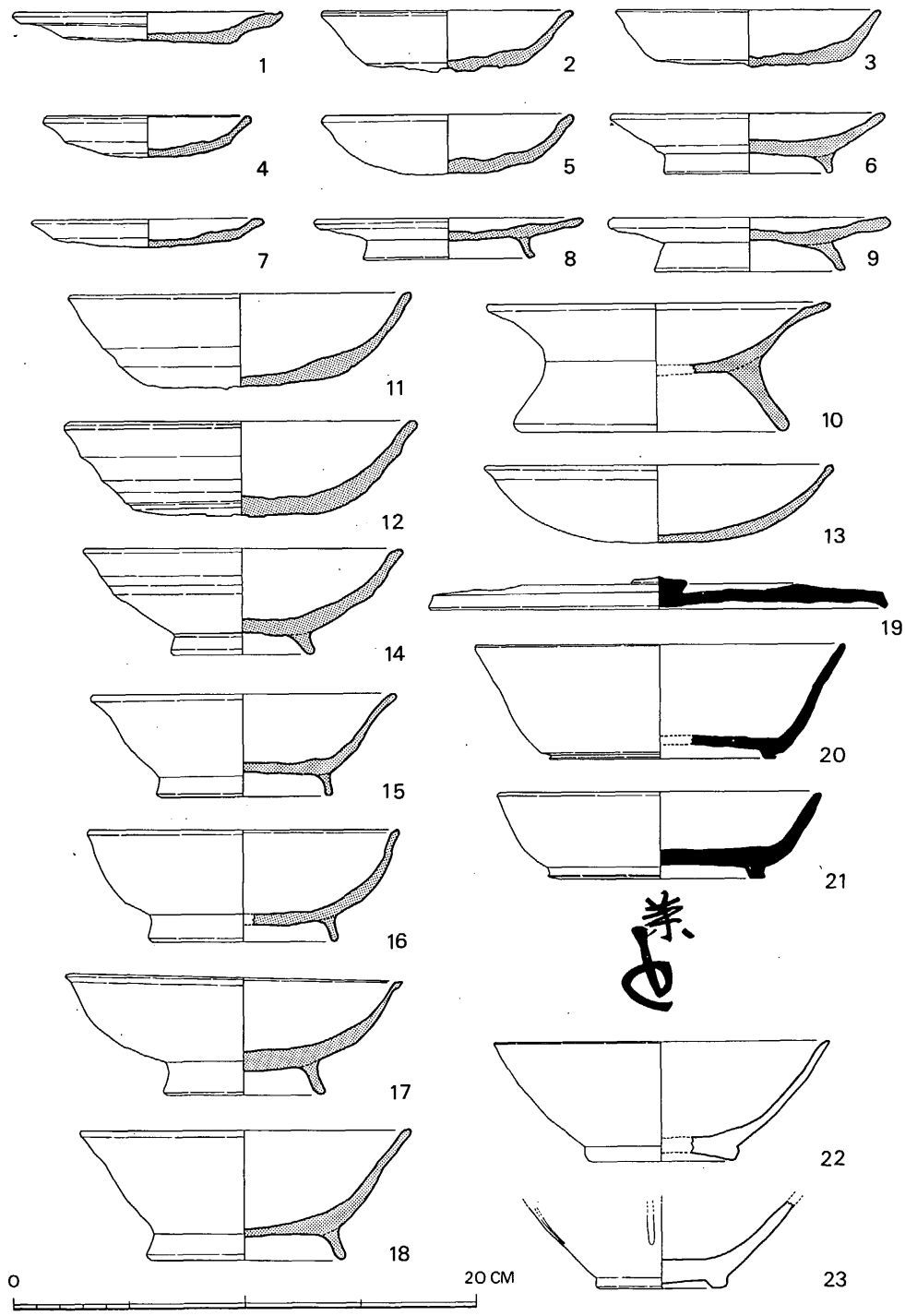
土師器（7～18）

皿（7）　灰色粘土層からの出土。口径9.4cm、深さ0.9cmをはかる、全体を横なでないしなで調整している。底部はヘラ切りされ、簾状圧痕を残す。胎土に少量の砂を混じえる。堅緻に焼成され、淡い灰色を呈する。

有高台皿（8～10）　8・9は灰色荒砂層、10は灰砂層からの出土。8は口径11.2cm、器高1.8cmをはかる。皿部は浅くつくられ、やや外方に広がる高台を付している。調整は7と同様で、やはり簾状圧痕を残す。精選された胎土を用い、堅く焼成されている。淡い黄茶色を呈する。9は口径11.8cm、器高2.4cm。8同様の特徴をもつが、外底部のヘラ切り痕をなで消している。口縁部は肥厚し、やや内湾気味に広がる高台を付ける。10は類例の少ない大形の有高台皿で、口径14.3cm、器高5.6cmをはかる。8と同様の調整がみられる。やや軟質に焼成され、淡い赤褐色を呈する。皿部はうすくつくられているが、約2.5cmの高さの高台は厚くつくられている。

坏（11～13）　11は暗茶灰土層、12・13は灰色粘土層からの出土。11・12はほぼ同形の坏で、口径14.5～15.0cm、深さ3.3～3.6cmをはかる。やや内湾気味に立ち上がる体部は大きく外方に広がり、口縁にいたってわずかに外反する。厚くつくられた器壁は横なでないしなで調整されるが、底部はヘラ切りされ簾状圧痕を残す。胎土はわずかに細砂を含む程度によく選ばれている。淡い黄褐色～灰白色を呈する。12はやや軟質に焼成される。13は口径14.8cm、深さ3.0cmの坏で、前二例にくらべうすい器壁をていねいに調整してつくっている。胎土には多くの砂を含み、焼成のあまさとあいまって器表の保存状態が悪く、わずかに底部にヘラ切りの痕跡をみる程度で調整は明らかでない。淡い灰褐色を呈する。

有高台埦（14～18）　いずれも細砂を混じえる胎土をやや軟質に焼成している。淡い黄白色～黄褐色を呈するものが多い。体部は横なでないしなで調整されているが、15の内底にはヘラ削りかと思われる痕跡がある。底部はヘラ切りされており、14を除いて簾状圧痕がみとめられる。14は灰砂層からの出土。口径13.5cm、器高4.6cmをはかる。11・12と同様の形態の坏に底く外に広がる高台を付したものである。15は柵SA560を切る東西溝SD562の埋土中から出土したもので、口径13.0cm、器高4.5cmをはかる。体部はゆるやかにS字状にカーブしつつやや外反して口縁端にいたる。高台は細く直立するようにつくられている。16は灰色荒砂層からの出土で、口径13.3cm、器高4.9cmをはかる。ていねいにつくられた体部は内湾しつつ立ち上がり、口縁近くで



第32図　第35次発掘調査出土土器実測図

わずかに外反する。15に似た高台を付す。17は灰黄粘質土層からの出土で、口径14.3cm、器高5.1cmをはかる。ていねいにつくられた体部は内湾しつつ立ち上がる。口縁端はわずかに肥厚して外折する。やや外反する高台を付している。18は茶褐荒砂層からの出土で、口径14.0cm、器高 5.6cmをはかる。15と同様の形態を示す。

須恵器（19～21）

坏蓋（19） 茶褐荒砂層からの出土。口径19.1cm、器高1.4cmの大形の蓋である。やや扁平の擬宝珠形のつまみ、平坦につくられた天井部、断面三角形を呈する口縁端に特徴がある。天井部をヘラ削りし、他の部分を横なでないしなで調整している。砂粒を多く含む胎土を用いている。軟質に焼成され、暗い色調の赤褐色を呈する。

坏身（20・21） いずれも灰砂層出土の有高台埦である。20は口径15.8cm、 器高5.0cmをはかる。ゆるやかにS字状のカーブをえがきつつ立ち上がる体部にきわめて低い高台が付く。ヘラ切りされた底部を除けば、横なでないしなで調整されている。精選された胎土を堅緻に焼成している。灰色を呈する。21は口径13.7cm、器高3.7cmをはかる。やや浅い坏部は外に広がりつつ直線的に立ち上がる。低くつくられた高台は端部が外に広がる。調整は20と等しいが、底部のヘラ切り痕をなで消そうとしている。砂粒の多い胎土を堅緻に焼成している。灰色を呈する。低部には墨書があるが、一字が「菜」ないしは「茶」ではなかろうかと思われる程度で、判読できない。

越州窯青磁（22・23） 22は灰砂層、23は灰褐土層からの出土。精選された胎土を堅緻に焼成している。灰色を呈する。22はやや粗雑につくられている。内湾しつつ立ち上がる体部は鋭くつくられた口縁にいたる。底部は外見的には高台状をなすが、浅い上げ底をなす。外面に横なで調整痕がみられる。内面および外面の上半にはうすくうぐいす色の釉がかけられる。外面の下半はやや濃い色のうぐいす色の釉がかけられているが、釉のおよばない部分も多い。底部には釉はおよばない。内面に重さね焼の痕跡を白く残す。器高5.2cmで、口径は14.4cmほどに復原される。23はていねいにつくられており、うぐいす色の釉が全面にかけられている。 体部外面に縦方向の条線が切り込まれ、全体で6本程度に復原される。おそらく口縁部が六弁の花弁状をなすものであろう。内外に重さね焼の痕跡を残す。

溝（SD688）出土土師器（第32図1～3、図版21）

皿（1） 石組外側からの出土。口径11.5cm、深さ0.9cm。器壁は横なでないしなで調整され、ヘラ切りされた底部に簾状圧痕を残す。砂粒の多い胎土を軟質に焼成している。淡い黄白色を呈する。

坏（2・3） 石組外側からの出土。口径10.7～11.2cm、深さ2.0～2.2cmの小形の坏である。細砂のわずかに混じる胎土を用いている。体部および内底部は横なでないしなで調整され、ヘラ切りされた底部には簾状圧痕を残す。2の焼成はやや軟質で、灰褐色を呈する。茶褐色の有

機物が付着している。3は堅緻に焼成され、淡い茶黄色を呈する。

溝（SD689）出土土師器（第32図4～6、図版21）

皿（4）　石組溝内の埋土からの出土。口径8.7cm、深さ1.4cm。底部をヘラ切りするほかは器壁を横なでないしなでで調整している。砂粒をほとんど含まない胎土を硬質に焼成している。赤褐色を呈する。

坏（5）　石組溝底の流砂中からの出土。口径10.5cm、深さ2.0cm。4と同様に調整している。かなり多くの砂粒を含む胎土を軟質に焼成しているため、器表が磨滅している。暗い灰褐色を呈する。

有高台皿（6）　石組溝内からの出土。口径11.7cm、器高2.6cm、やや深めの皿部に低い高台を付している。全体を横なでないしなでで調整している。砂粒の少ない良質の胎土を用いる。焼成がやや軟質で、淡い茶黄色を呈する。

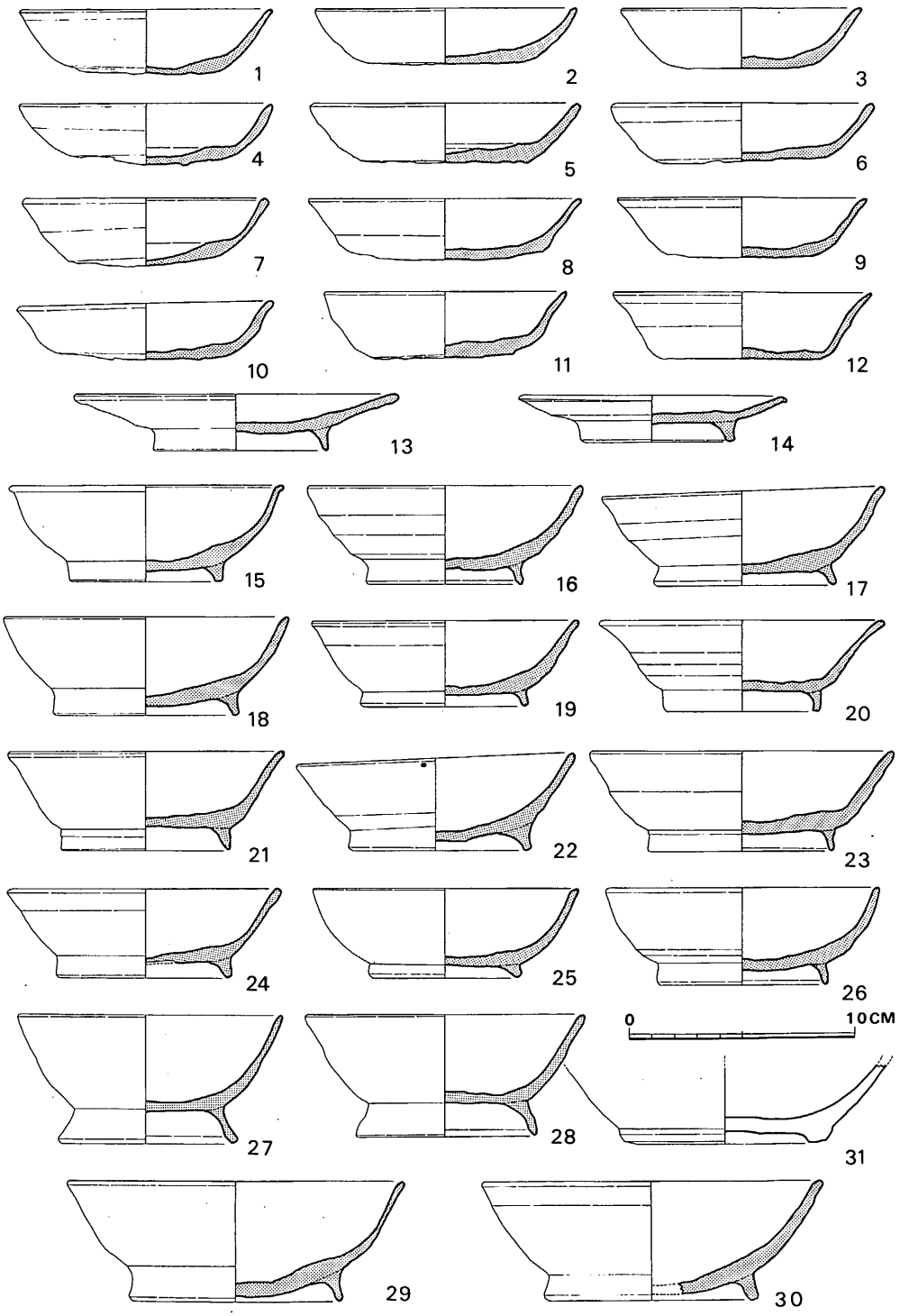
土坑（SK678）出土土器（第33図、図版20）

土坑SK678から大量の土師器・内黒土師器・黒色土器・須恵器・越州窯青磁などの土器が出土した。遺物は土坑内の数層にわたる埋土のうち二層から出土したが、相互に器種・形態などの差違はなかった。したがって以下の記述は上下両層を一括している。土器の大半は土師器の坏・有高台埦で完形ないしそれに近いもの約40点を含め多数出土しているが、廃棄されたためか、当初より破片となっているものが大部分で、数量などの確認はできなかった。黒色土器・須恵器・越州窯青磁などは破片の一部のみの出土で、ほとんど図示できなかった。なお土器以外に瓦類も出土している。

土師器（1～30）

坏（1～12）　有高台埦についで多く出土した。坏の形態は、体部がやや内湾気味に立ち上がるもの（1～7）、ほぼ直線的に立ち上がるもの（8・9）、内湾気味に立ち上がりつつ口縁近くで外反するもの（10・11）、大きく外反しつつ立ち上がるもの（12）、があるが大きな差違はない。1～7の形態の坏が多く、12のような例は少ない。全体に焼成が軟質で、胎土に砂粒を含んでいる。底部はすべてヘラ切りされ、4～10・12には簾状圧痕がみられる。底部を除けば体部内外面を横なで、内底面をなで、調整している。淡い黄灰色を呈するものが多いが、赤褐色を呈するものもある。口径・深さはそれぞれ10.4～11.9cm、2.1～2.8cmの範囲にあるが、口径11.1cm、深さ2.3cm程度の大きさのものが多い。

有高台埦（15～30）　もっとも多く出土した。上述の坏に高台を付した形態のものが多い。12cmほどの口径の体部に低い高台のつくもの（15～26）、12cmほどの口径の体部に高い高台のつくもの（27・28）、15cmほどの口径の体部に低い高台のつくもの（29・30）、がある。坏同様にやや軟質に焼成されている。わずかに細砂を含む良質の胎土を用いている。色調はまちまちであるが、淡い黄灰色～黄褐色を呈する例が多い。体部・高台は内外ともに横なで調整される。



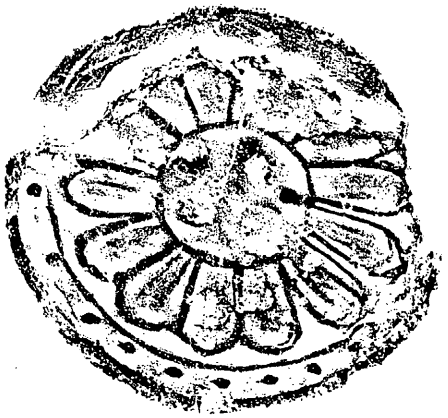
第33図　第35次発掘調査土坑（SK678）出土土器実測図

底部は内面をなで調整し、外面をヘラ切りしている。15・27～29はヘラ切り痕をなで消している。15～22・29には簾状圧痕がみられる。15～26の口径・器高・深さはそれぞれ11.7～12.4cm、4.0～4.5cm、2.7～3.5cmの範囲におさまるものが多く、坏にくらべて口径・深さともに一回り大きい法量を示す。したがって坏に高台を付したものではないが、たとえば7・9・10・12と24・21・17・20とはそれぞれ対応類似し、相互の関連を示している。低くつくられる高台はわずかに外方に張り出すものが多いが、直立に近い例もみられる。15は他の例と異なり、精選した胎土を堅緻に焼成している。灰褐色を示すが部分的に赤黄色をなす。体部は内湾するように立ち上がり、口縁近くで外折する。成形・調整ともにていねいになされている。25・26は丸く内湾気味に立ち上がる体部をなすが、坏に例をみない。24には漆状の、25・26にはスス状の黒色物、がそれぞれ付着している。27・28は外に大きく張り出す高い高台に特徴がある。したがって口径・深さは15～26に近いが、器高が5.4～7.7cmと高くなる。2例ともに外底部のヘラ切り痕をていねいになで消している。図示していないものを含め出土の有高台埦の多くは15～28程度の小形のものであるが、例外的に29・30は口径14.6～14.8cmをはかる大形のものである。器高は5.3～5.4cmで27・28に近いが高台が低いため4.5～4.6cmの深さとなり、一層容量を大きなものとしている。

有高台皿（13・14）　有高台皿は4点出土したが、無高台の皿は出土していない。13は口径14.1cm、器高2.6cm。外底部にヘラ切り痕が残るが、その他の部分は横なでないしなで調整している。若干砂を含むが、よく精選された胎土を用いる。焼成はやや軟質で、淡い茶灰色を呈する。やや厚めの器壁をなす皿部に対し、高台は細くつくられている。同様の例が他に2点出土しており、1点の底部には簾状圧痕が残る。14は口径11.3cm、器高2.1cm。調整は13と同様であるが、底部のヘラ切り痕をなで消そうとしている。胎土には砂を多く含み、比較的堅緻に焼成されている。皿部はうすくつくられ、それに分厚い高台が付される。口縁端が屈曲し、わずかに外方にたれさがる点に特徴がある。

越州窯青磁（31）　3点の破片が出土したが同一個体と思われる。精選された胎土を堅緻に焼成している。内外の全面にうぐいす色の釉をうすくかけているが、削り出された高台の下面には部分的にしかおよばない。

以上の一括出土の土器は中世土師器の型式編年を考える好資料である。土師器に一切の糸切り底を含まず、また依然として須恵器を共伴する、などの点が編年上の一応の目安となる。さらに下層から出土した粗雑なつくりの瓦当面の軒丸瓦（第34図）も参考となる。詳細な編年は将来を期した



第34図　第35次発掘調査土坑（SK678）出土軒丸瓦拓影（1/3）

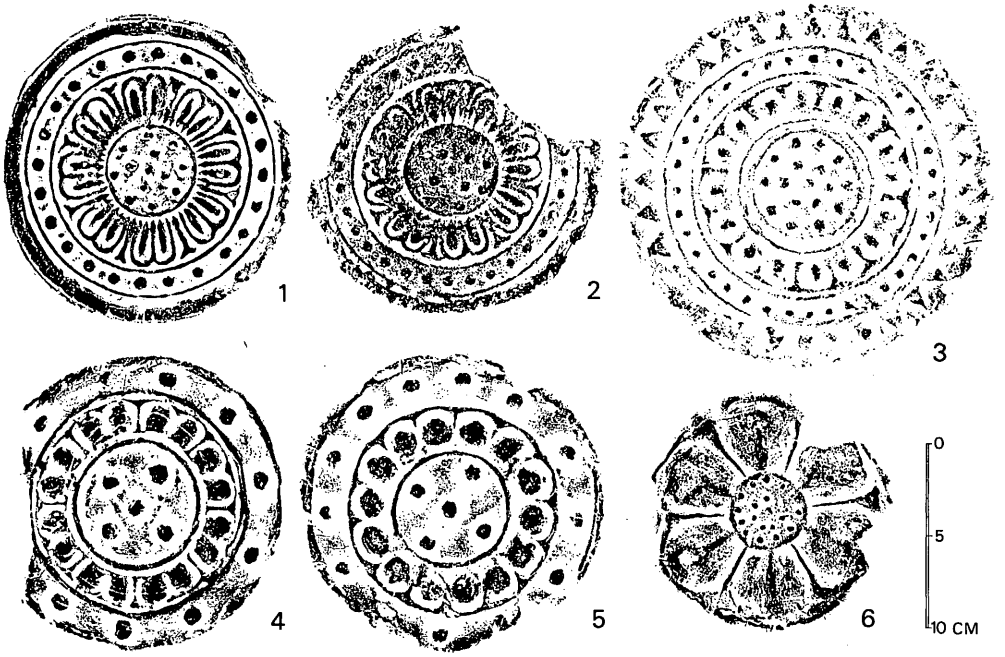
いが、一応平安時代中期頃のセットを示すものとして注目したい。同様の時期のセットとして第34次調査の土留溜SK674出土の土師器がある（第22図）が、それには先行すると考えている。

瓦塼類（第35・36・37図、図版23）

今回の調査で出土した瓦塼類は丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦と数種類の文字瓦等である。これらは主に自然流路の砂礫の堆積に混って出土したものが大部分である。これらはⅠ・Ⅱ期の茶褐荒砂、灰色荒砂から主に出土したものであり、その量は膨大なものである。Ⅰ・Ⅱ期の層序は時期的にそれほど差は認められない。現在もこれらの瓦について整理中であるため、ここではその概要にとどめておきたい。尚、挿図に示した拓影は、出土量の多いもの、新たに発見されたものを掲載した。

軒先瓦は総数 215点で文字瓦は現在 226点である。

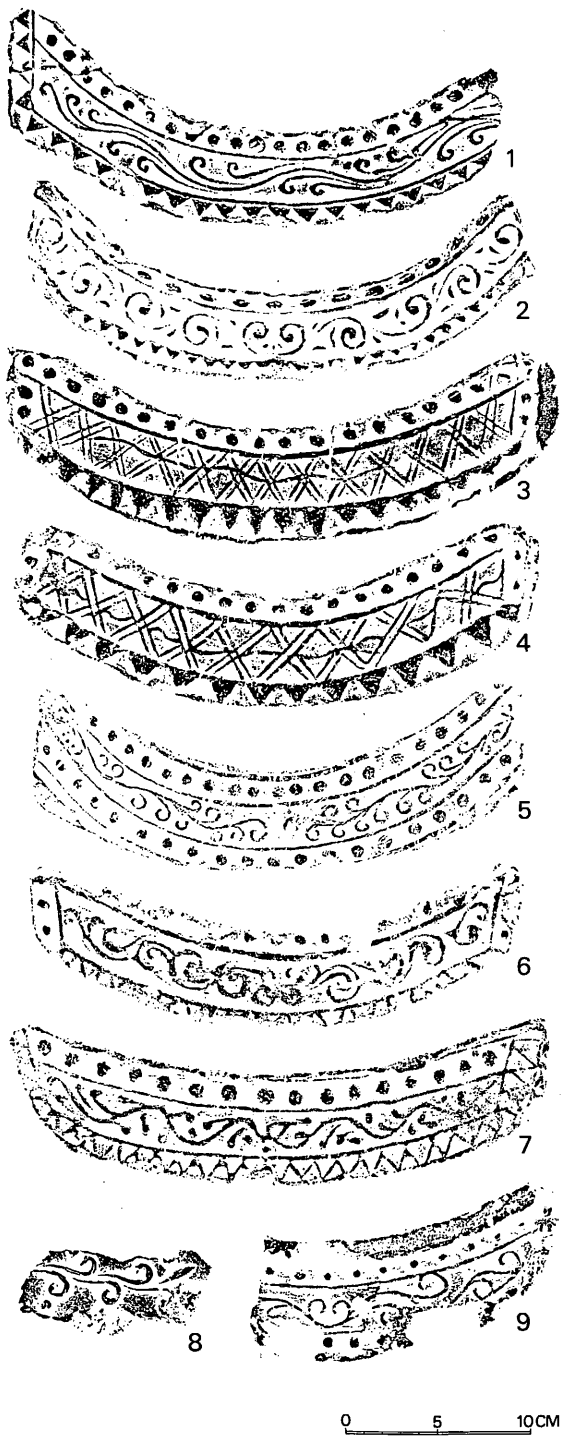
軒丸瓦は総数91点で20型式に分類できる。第35図1・2は鴻臚舘式と呼ばれているもので、主にⅠ・Ⅱ層から出土し、全体の40%を占める。鴻臚舘式と呼ばれるものは、これまでの発掘調査で特に政庁跡付近から多量に出土し、学校院、観世音寺地域からは若干出土する程度である。鴻臚舘とは現在の平和台球場付近にその跡が推定されており、付近からこの文様瓦が多量に出土したことから名づけられたものである。よって大宰府と鴻臚舘跡の相互関係や、その性質を知る瓦として把握しなければならない。4・5はSD687北側の黄灰土とSD689の石敷上部



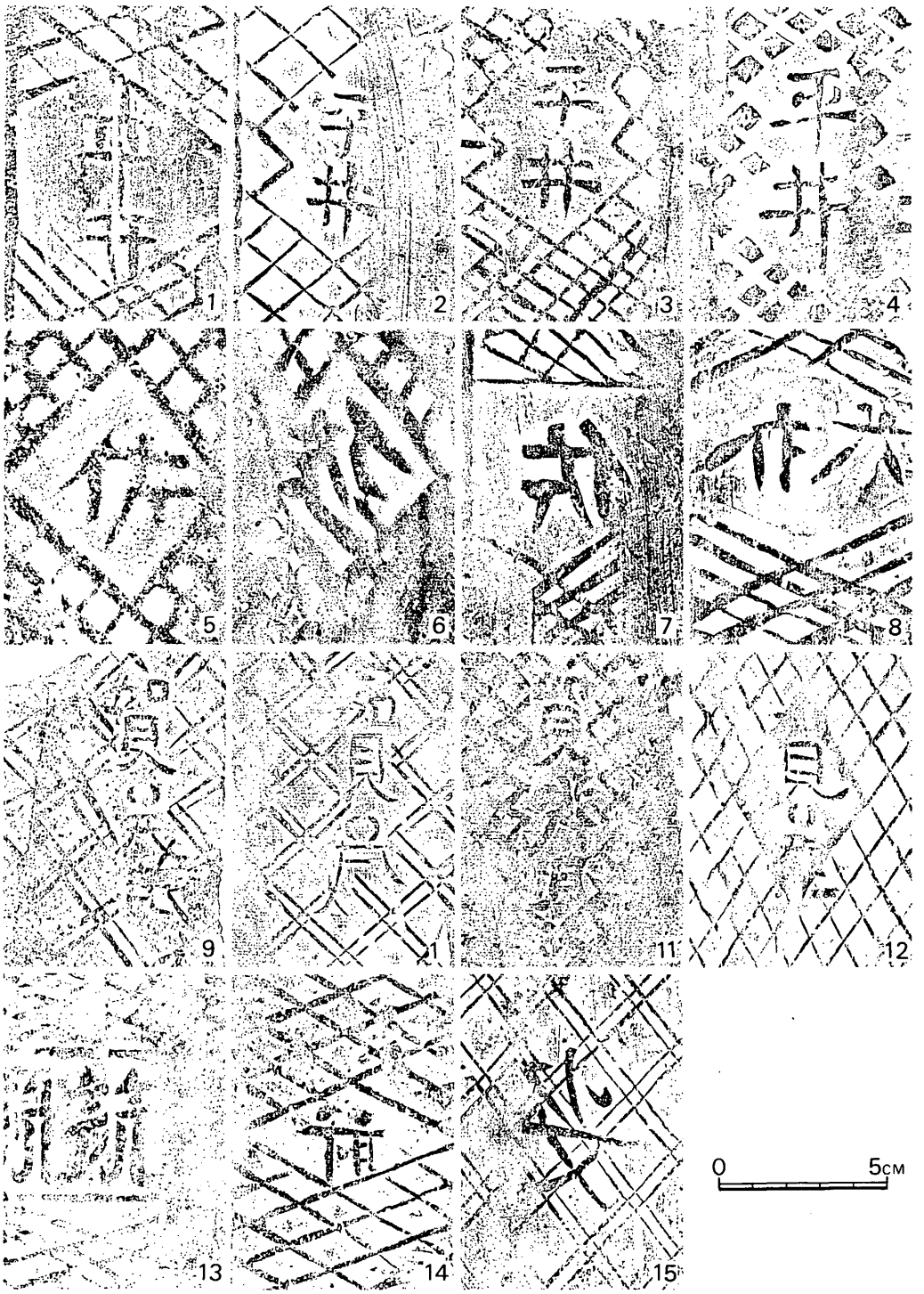
第35図　第35次発掘調査出土軒丸瓦拓影

を覆う薄い灰砂から主に出土した。4・5共に比較的類似しており、中房は1＋4である。弁は4が八弁複弁に対し、5は7弁複弁で丸味をもつ。外区の珠文も13に対し11である。文様、技法等から4が先行するものと考えられる。6は六弁単弁瓦で新たに発見されたものである。中房は1＋7＋12の小さな蓮子を配し、弁の中央部は高く稜線が入る。弁と弁の間は高い間弁で埋め、瓦当径13.2cmを測る。大宰府では単弁系瓦の出土例は少なく、これまでに4点出土している。

軒平瓦は総数124点で18型式に分類できる。このうち第36図1は所謂老司II式、2は鴻臚式と呼ばれているもので、各々全体の約30%を占める。1は約⅔がI・II層から、⅓は上層の茶灰色土、黄灰土から出土した。2はほとんどがI層から出土した。SD689の石組溝埋土からは、鴻臚舘式瓦が数点出土した。3・4は文様的に極めてよく類似している。内区は共に二重の斜格子が「×」印を1個体として形成し、3はそれが13で4に比べて密である。中央部には共に、波状線が一条入る。上外区、両脇区は珠文、下外区は下向凸鋸歯文である。8は今回新しく出土したものである。10cmたらずの断片であり、文様構成は明らかでないが、二蓮の唐草が上と下に各々蔓を巻き左から右



第36図　第35次発掘調査出土軒丸瓦拓影



第37図　第35次発掘調査出土文字瓦拓影

に流れ、唐津の上、下に珠文を配するものである。焼成は堅緻で胎土には砂粒が少く、段顎を呈する。Ⅰ層から出土した。

文字瓦は現在228点で8種類に分類される。その大多数が「平井」「佐」「賀茂」銘のもので、「平井」銘は108点で12種類、「佐」銘は71点で9種類、「賀茂」銘は35点で5種類に細分される。これらは叩目、書体などによって数種に分けることができる。第37図の2・3は文字が同一であり、後に叩板の格子に文線を追刻して格子目文を細くしているものである。「佐」銘のなかでは5が最も多く出土した。文字自体は「佐」「佐瓦」の2種類があり、文字は「平井」「賀」に比べて簡略化しているものが多く、格子に追刻しているものである。「賀茂」銘は大部分が二重斜格子目文で構成され、9が最も多く出土した。これらの瓦はⅠ・Ⅱ層ないし石組溝埋土等から多く出土したもので、226点という個数は出土数全体の⅓であり、未整理分を含めると、この数の2倍程度あるものと考えられよう。

小　結

第31次発掘調査は、大宰府史跡に新たなプログラムを表示した。それは南門築地と第4次調査検出の築地等を含めた三者の相関関係、ないし東西方向に走る五条路との関連問題である。(註4)この他推定条坊では、政庁中軸線から東西2町づつの方4町が庁域であると考えられてきたが、これらは、必ず正確を期するものなのか、又地形等により合理的に区画されたのか、政庁跡の四至を考慮する際の問題といえる。この様な重要問題を今年度の発掘調査によって明らかにしたといっても過言ではなかろう。第31次の柵列検出を考慮して第34次調査を実施したのである。

第35次調査では東西4間、南北3間の柵列を検出し、第31次検出の柵の延長部が政庁中軸線から約117.14mで北折することが明確となった。第34次調査で検出した東面柵列は中軸線から229.24mあり、SA560と一連のものとして考慮すると、この間は112.10m（374尺）となり、1町（108mとした場合）を若干上回る幅となる。よってこれらの成果を総括してみると、政庁跡と学校院は隣接せず、政庁跡の東側に単独の小規模な官衙施設が存在しうるものと考えられる。したがって、南門築地と第4次検出築地との三者相関関係は不可能なものとなった。これら官衙施設の検出により新たな問題として、その構造、性格はもちろん、政庁西側の築地等の行方につき、今後の調査に期待したい。

今回の調査では柵列の他、発掘区西域において石組溝3条を検出した。いづれも自然流路の砂礫堆積上に構築しているものである。自然流路はSD687の土層等から大きく2回の流れがあったものと考えられ、主にⅠ・Ⅱ層から膨大な瓦類が出土した。SD689の構築状態を検討してみると、側石東側の最下層において、地山を切り茶褐荒砂（Ⅰ層）が認められた。これはSD687・688の最下層でも確認することができ、自然流路の当初の堆積層と考えられる。SD689石敷上面には灰砂（ピンク砂土）が堆積し、この灰砂はSD688にも若干認められた。又両溝から出土した土師器等は器形的にそれほど変化のないことから、SD688と689は「く」の字形を呈する一連の溝

と考えられる。しかしSD689は当初の流れより古い時期に構築されており、688はII期の灰色荒砂の上に築造していることなどが疑問点として残る。これらの時期を想定すると、SD689の石組掘方から出土した瓦、又溝埋土の土師器、さらにI層出土の瓦等より、溝廃絶期の時期は、多少の出入りはあるにせよ平安時代中頃と考えられる。又SD688と689を一連のものとして考慮した場合、政庁東側の水路といかなる関係をもつのか、今後に残された問題点である。(註5)

註1） 九州歴史資料館『大宰府史跡　第30・31・32次発掘調査概報』　1974

註2） 高倉洋彰「月山東側の官衛地区の調査」（大宰府研究会会報10）　1974

註3） 註1）と同じ

註4） 註1）と同じ

註5） 第35次発掘調査については、土地所有者である大宰府町横岳在住の木村繁雄氏に多大の御援助を受けた。記して謝意を表する。

6. 政庁東における柵遺構について

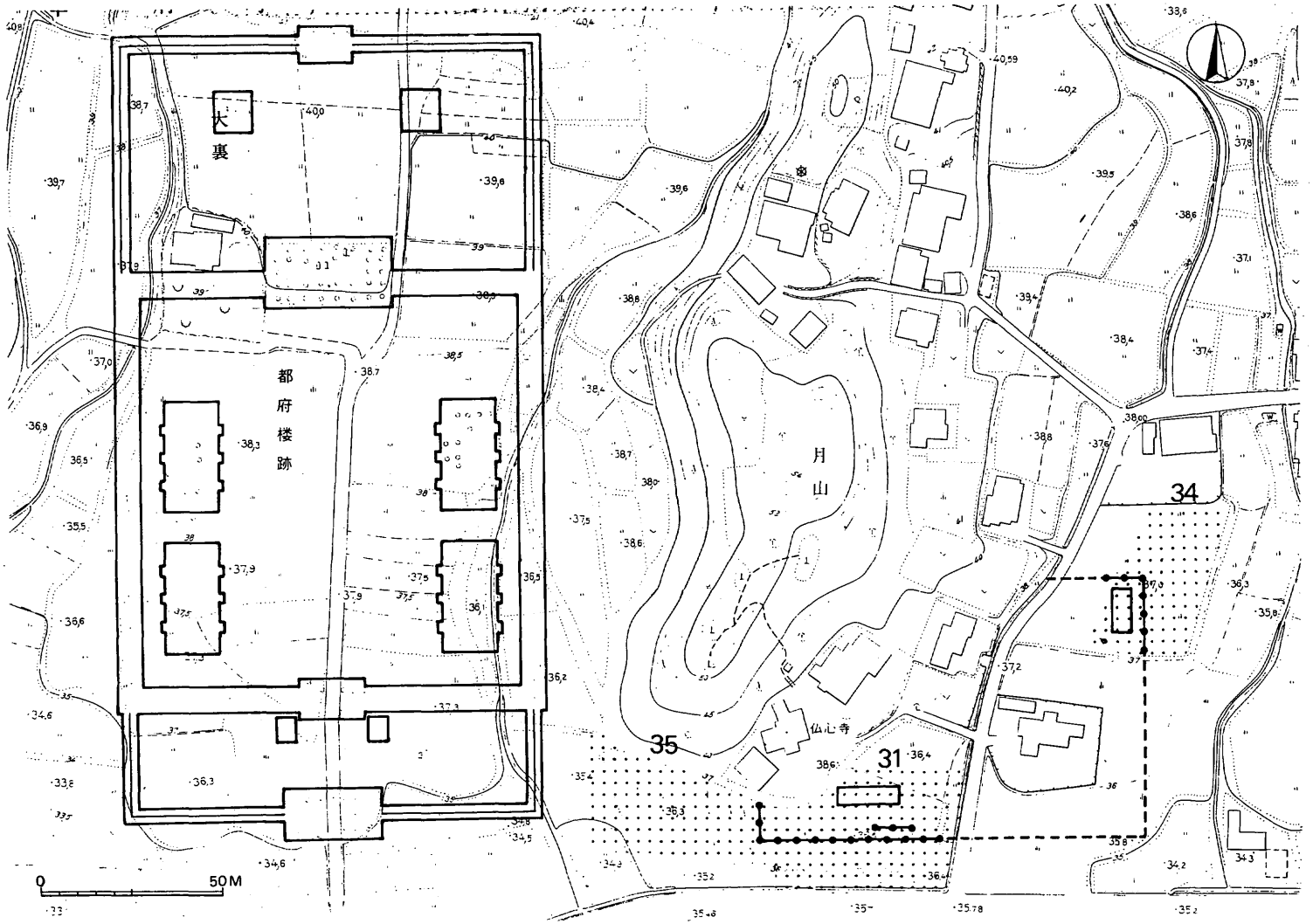
昭和45年第4次調査として行った蔵司西地区において東西に延びる築地が検出された。この築地はさらに東、西に延びることが現在の地形のうえから想定されるとともに、これを政庁地区における南門築地と比較すると約16mほど南へ寄っており、両者は直接的には接続しないことが考えられ、政庁地区を中心とした周囲の遺構のあり方に新な問題を提起した。しかしながらこの時点においては、調査の焦点が政庁地区におかれていたため、この問題追求のための調査にまで及ぶことができなかった。(註1)

昭和48年政庁地区における第26次調査(正殿後方築地)、第30次調査(西脇殿)の2ヵ所における調査によって、この地域における遺構の状況をほぼ把握することができたため、今後は調査の重点を学校院地区に移すこととした。ここにおいて昭和48年度最後の調査として位置的に第4次調査地とは対象的な位置にあり、またこれまでの推定によると政庁の東南隅にあたるとともに学校院との境界にも当る月山丘陵の南に隣接した水田について第31次調査を実施した。

この第31次調査結果では、当初予想した位置すなわち第4次調査で検出した築地の延長線上には築地は検出されず、それよりも約8m北へ寄った点、すなわち南門築地と第4次調査検出築地とのほぼ中間に東西にのびる柵を検出し、問題はますます複雑化した。(註2)

このように第4次調査検出築地と第31次調査検出の柵とは構造も異なり、位置的にもずれているため、これらの遺構を一連のものと考えることは困難となり、政庁前面における遺構のあり方とともに政庁の東に接して位置していると考えられている学校院との境界の問題についても新な疑問が生じてきたのである。

昭和49年度に入ってからは本概報においてこれまで述べてきたように学校院地区についての



第38図　第31・34・35次調査結果遺構配置図

調査を開始し、まず政庁と学校院との境界付近と考えられる学校院西辺部において第34次調査を実施した。この調査では政庁中軸線から約229.24mの位置に南北に延びる柵を検出したが、この柵はさらに発掘地域のほぼ中央部において西に折れることが判明した。この柵の柱間は2.10m（7尺）であり、第31次調査検出の柵の寸法と一致するところから、これらは一連のものである可能性が考えられた。

この第34次調査検出の柵と第31次調査検出の柵が仮りに一連のものとすると東西にのびる柵の南北間の距離は約70.8m（236尺）となる。

このような仮定のうえにたつと、これらの柵は政庁地区や学校院を区画するといった性格のものではなく、何らかのまとまりをもった一つの空間を区画するのではないかという可能性が強くなるのである。

このような観点から次の調査地については当初計画の学校院中央部の発掘調査が不可能となったため、この柵の西限を確認する調査に振り替え、第35次調査として第31次調査地の西隣接地の調査を行った。

この調査では発掘地域東半部において第31次調査検出の東西柵の西延長部分を検出するとともに、これが政庁中軸線から約117.14mの地点で北へ折れることが判明した。したがって、この南北柵と第34次調査検出の南北柵との距離は112.10m（374尺）となる。

以上政庁の東地域における調査の概略について述べてきたが、この3次における調査結果について若干の推測をまじえながら考察すると政庁の東には東西幅約112.10m（374尺）、南北幅約70.8m（236尺）の規模で柵によって囲こまれた空間があり、その柵の内部には、これまでに二棟の掘立柱建物が存在することが明確になったのである。

この遺構はおそらく大宰府に設けられた多くの官衙のうちの一つと考えられるが、その性格については現在までのところ不明である。またこの政庁の東における官衙の存在は[註3]、これまで考えられてきた政庁、学校院等の四至について再検討の必要性がでてきたといえよう。

ここで一つの試案を述べると、大宰府の政庁を中心とした地域は、これまで考えられてきたような政庁方4町、学校院方2町といった区画があるのではなく、平城宮における朝堂院と諸官衙の関係のごとく、大宰府においても都府楼における建物を中心として東は学校院、西は蔵司の台地一帯を含みこんださらに広い空間の中に大宰府の諸官衙が設けられていた可能性も十分あるものと考えられる。

註1）　福岡県教育委員会『大宰府史跡』昭和45年度発掘調査の概要
福岡県文化財報告書第47集　1971

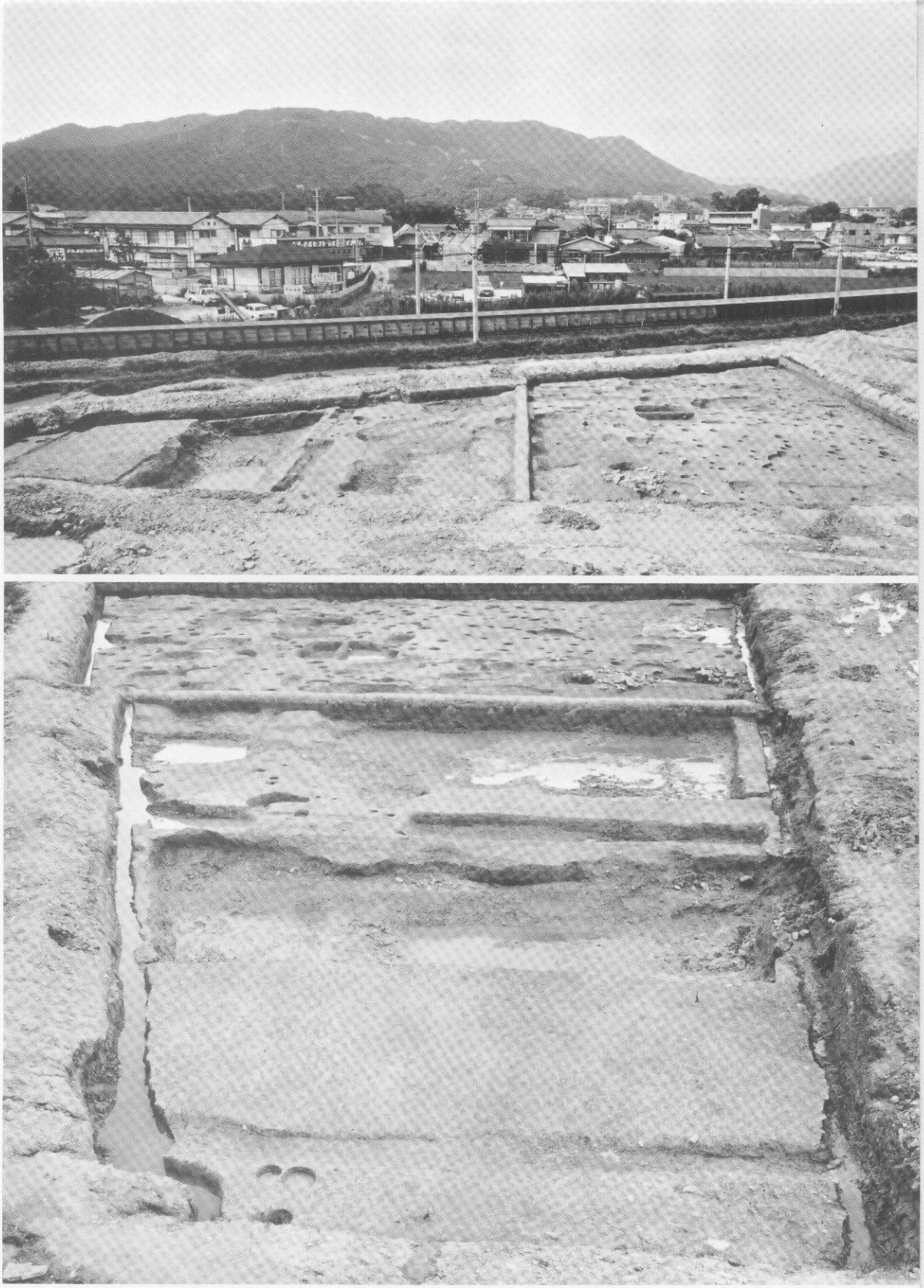
註2）　九州歴史資料館『大宰府史跡　第30・31・32次発掘調査概報』1974

註3）　このような考え方からすると第4次調査において検出した築地についても柵と同様に一つの官衙を区画する性格のものである可能性が強い。

この概報の製作・執筆・編集は、当館調査課の石松好雄・横田賢次郎・高倉洋彰・石丸洋・高橋章および調査補助員山本信夫・八尋直子がこれにあたった。写真撮影は石丸洋によるが、一部他の課員によるものがある。

大宰府史跡
昭和49年度発掘調査概報
昭和50年3月
発　行　九州歴史資料館
筑紫郡太宰府町大字太宰府字太郎左近1025
印　刷　秀巧社印刷株式会社

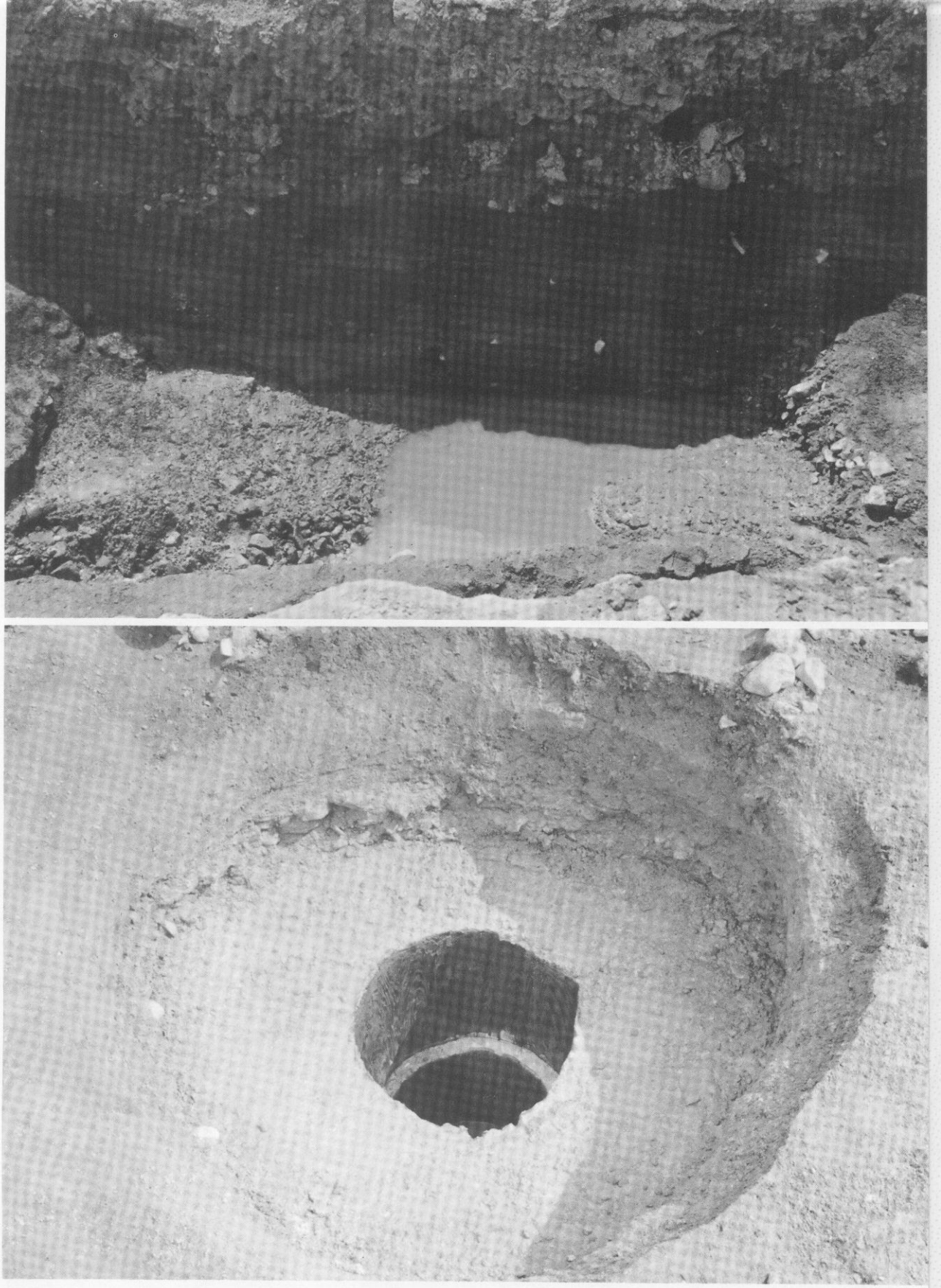
図　　版



図版１　第33次発掘調査　全景



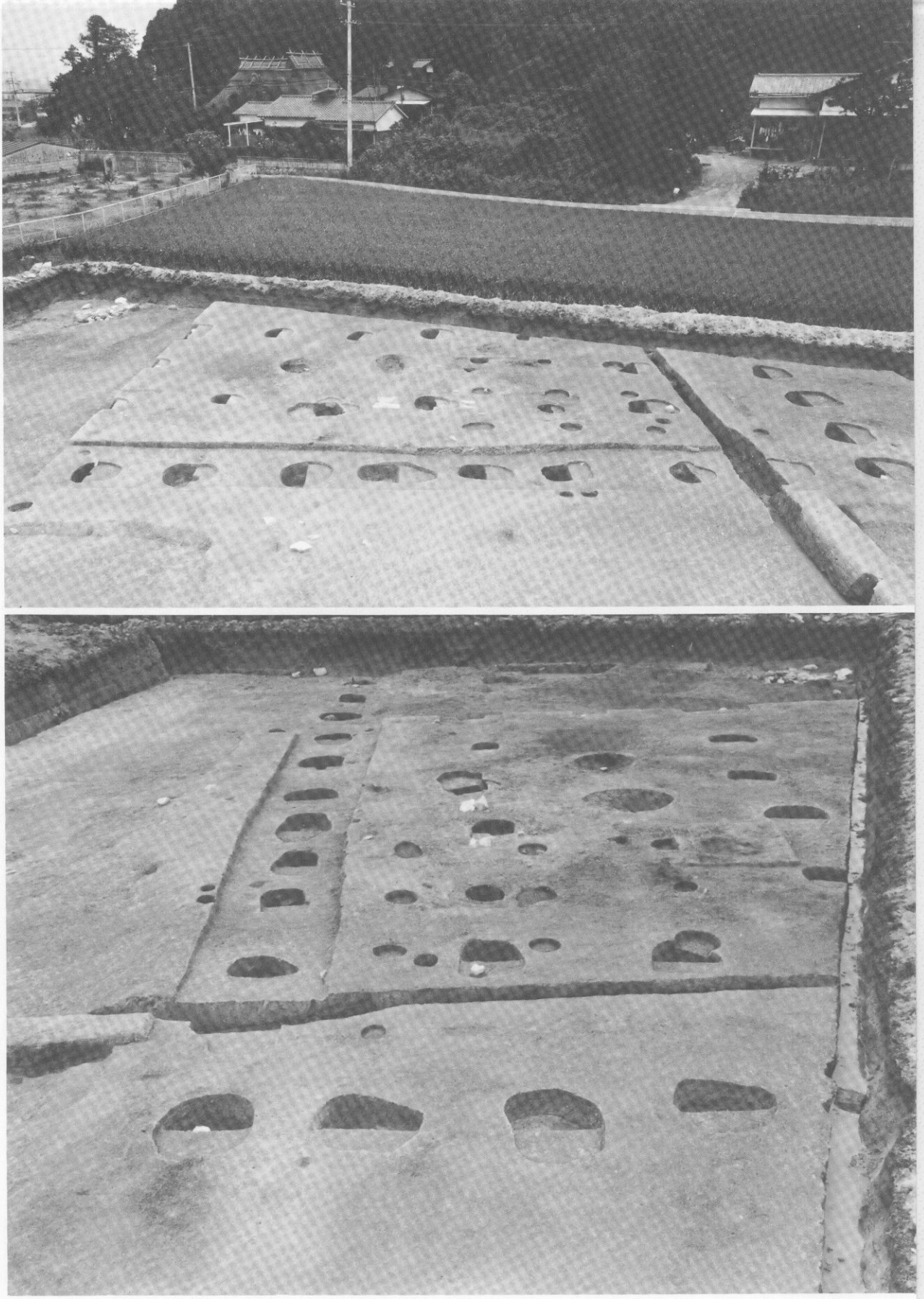
図版2　(上)第33次発掘調査　東半部ピット群　　(下)第33次発掘調査 SD605



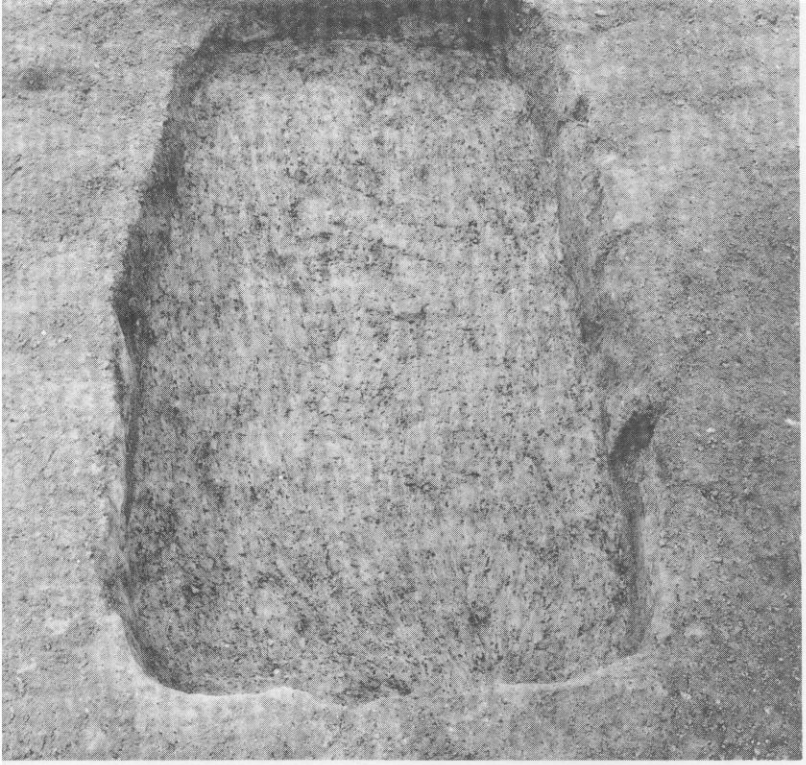
図版3　(上)第33次発掘調査　Aトレンチ SD600　(下)第33次発掘調査　SE651

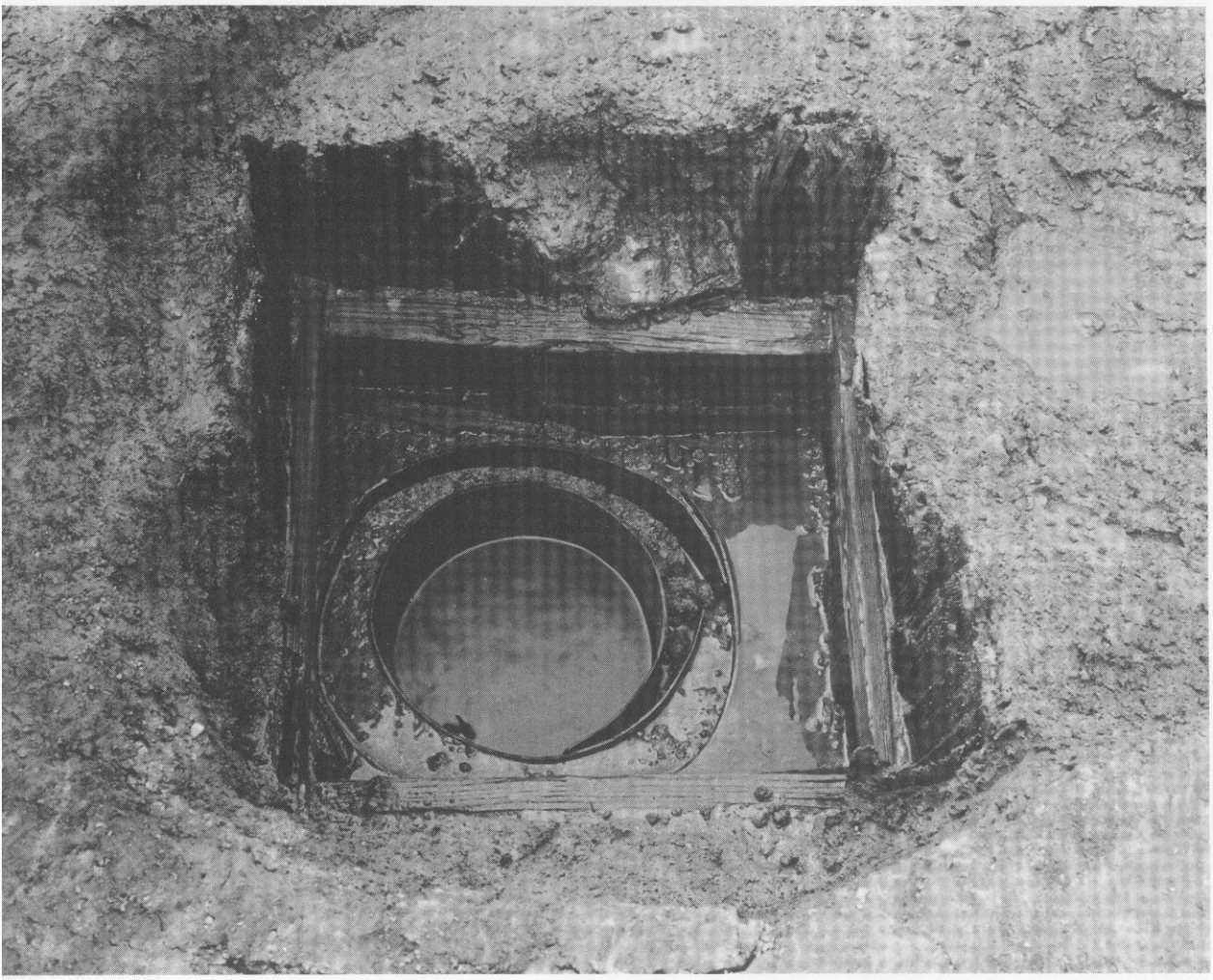


図版4　(上)第34次発掘調査　全景　(下)第34次発掘調査　SB665

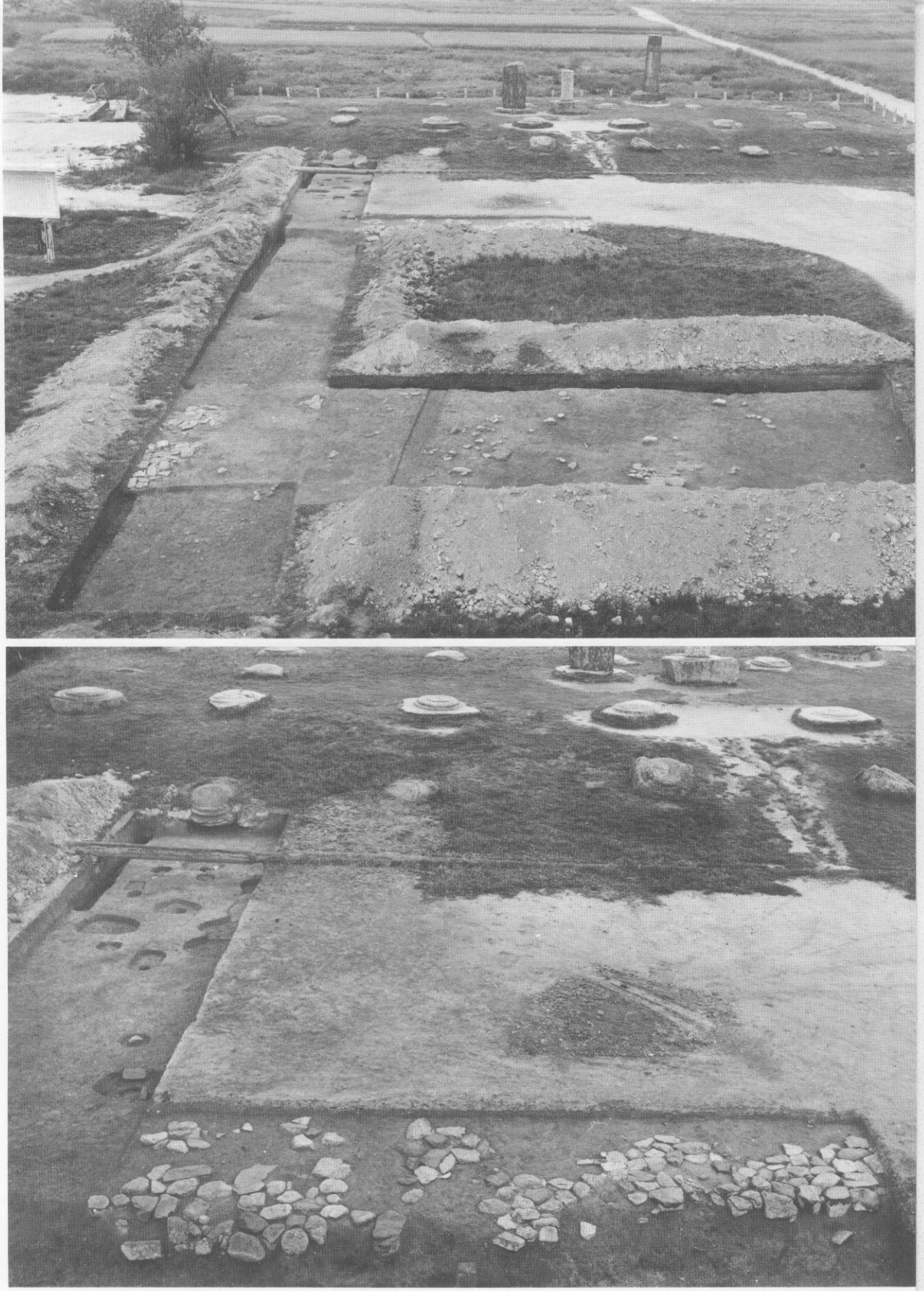


図版5　第34次発掘調査　ＳＡ670・ＳＢ665

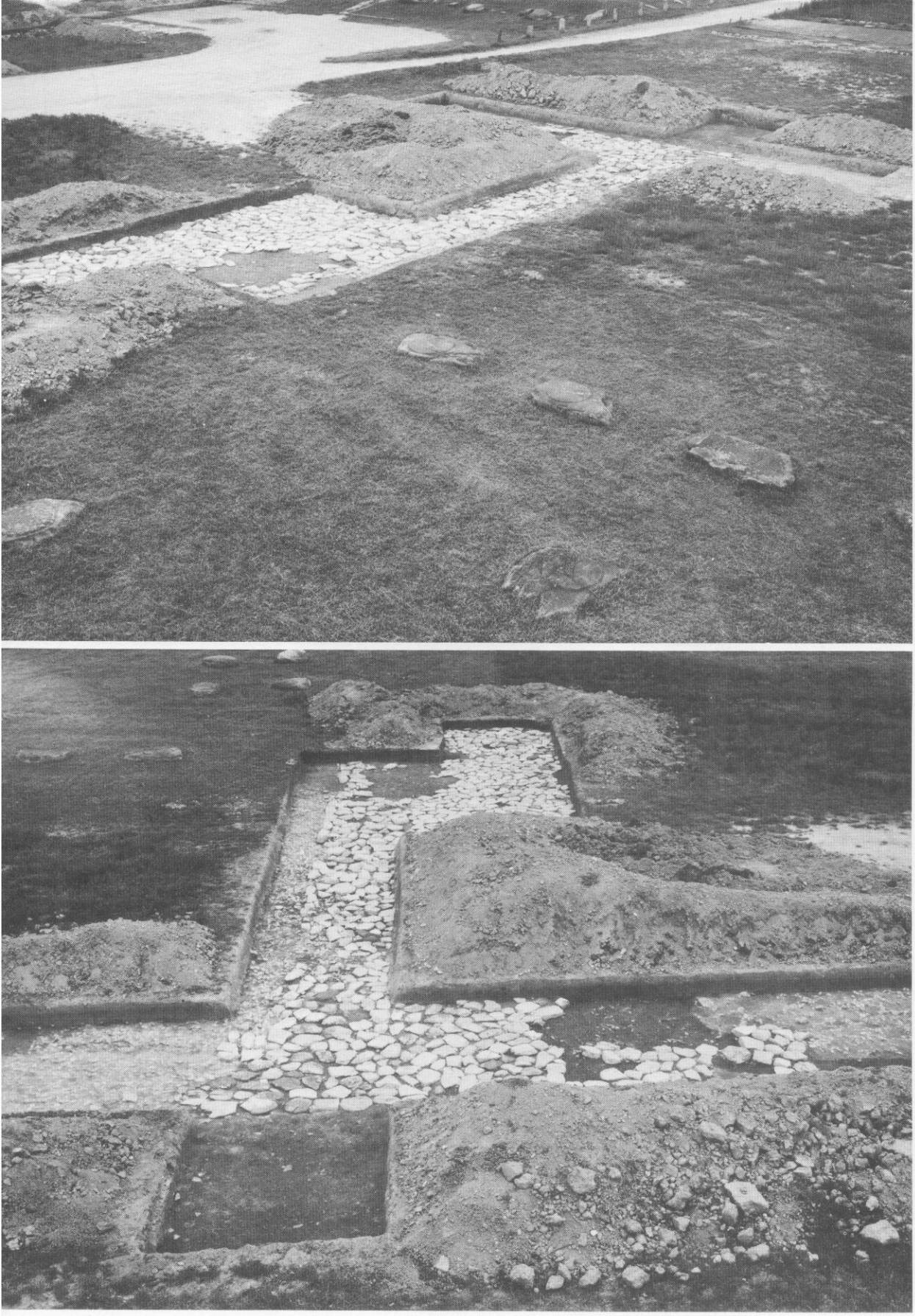




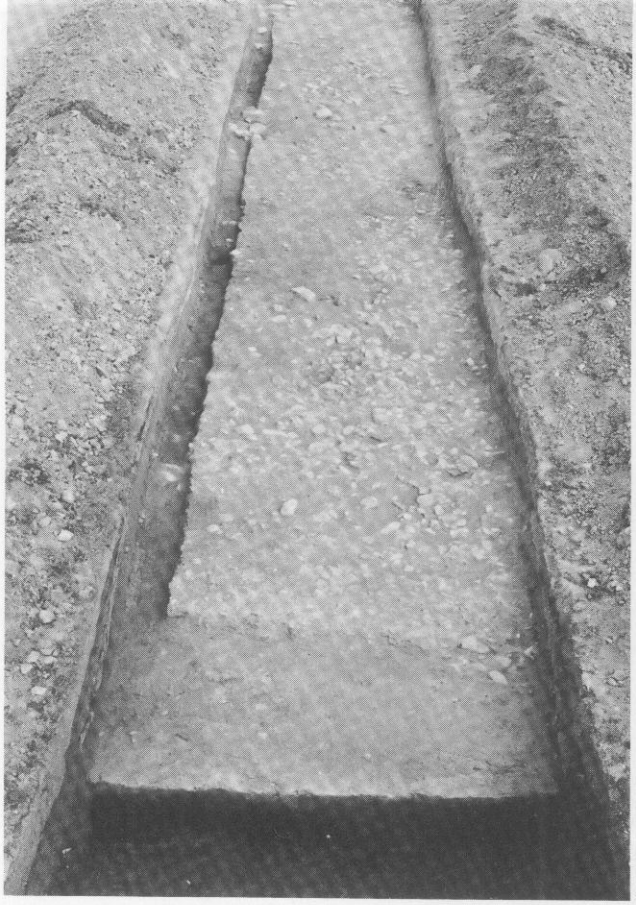
図版6　（上）第34次発掘調査　SK673
（下）第34次発掘調査　SE669

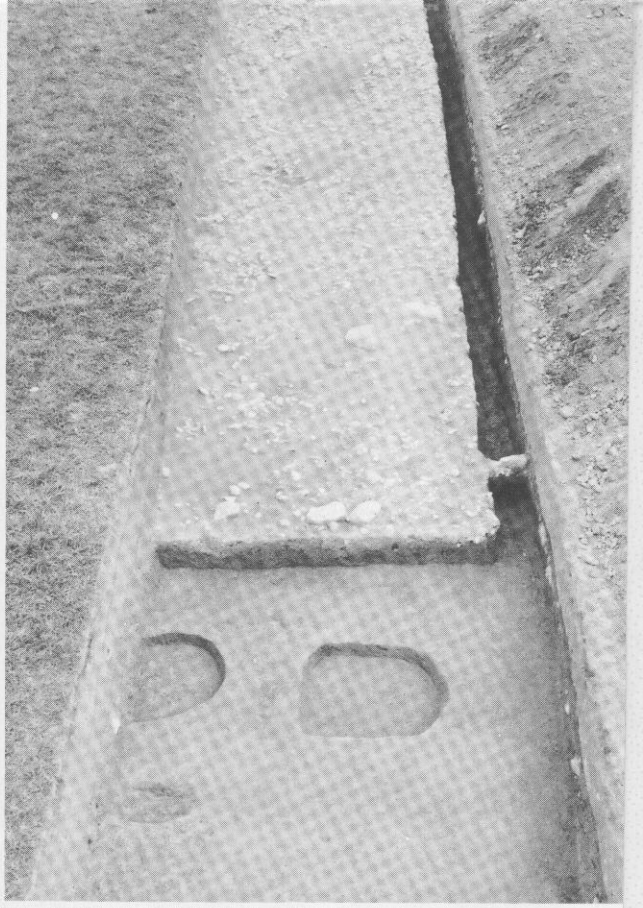


図版7　第30次補足調査　Aトレンチ

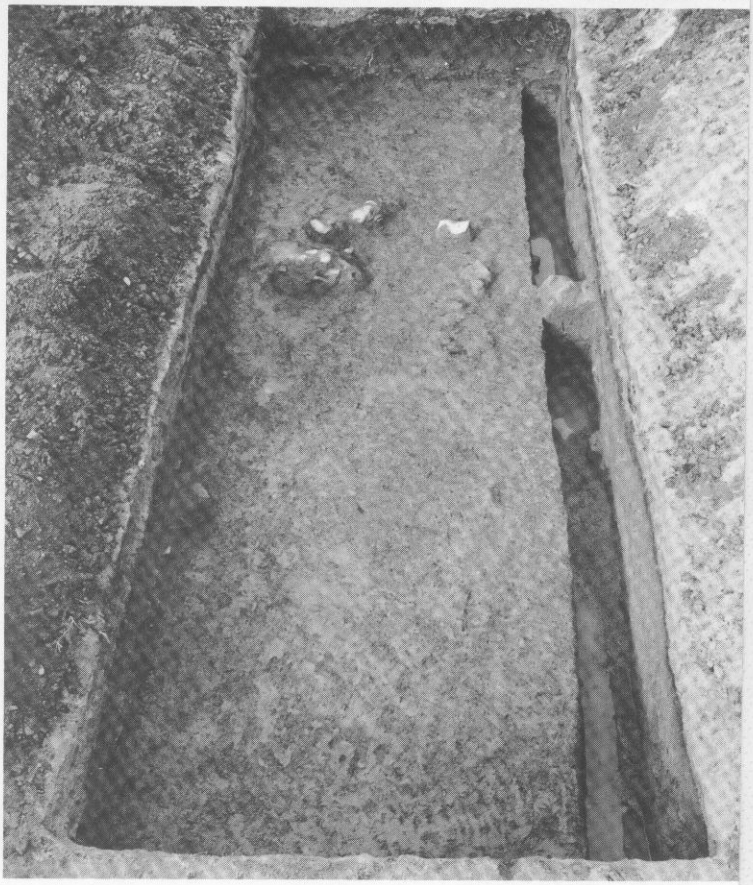


図版８　第30次補足調査　Ｂトレンチ





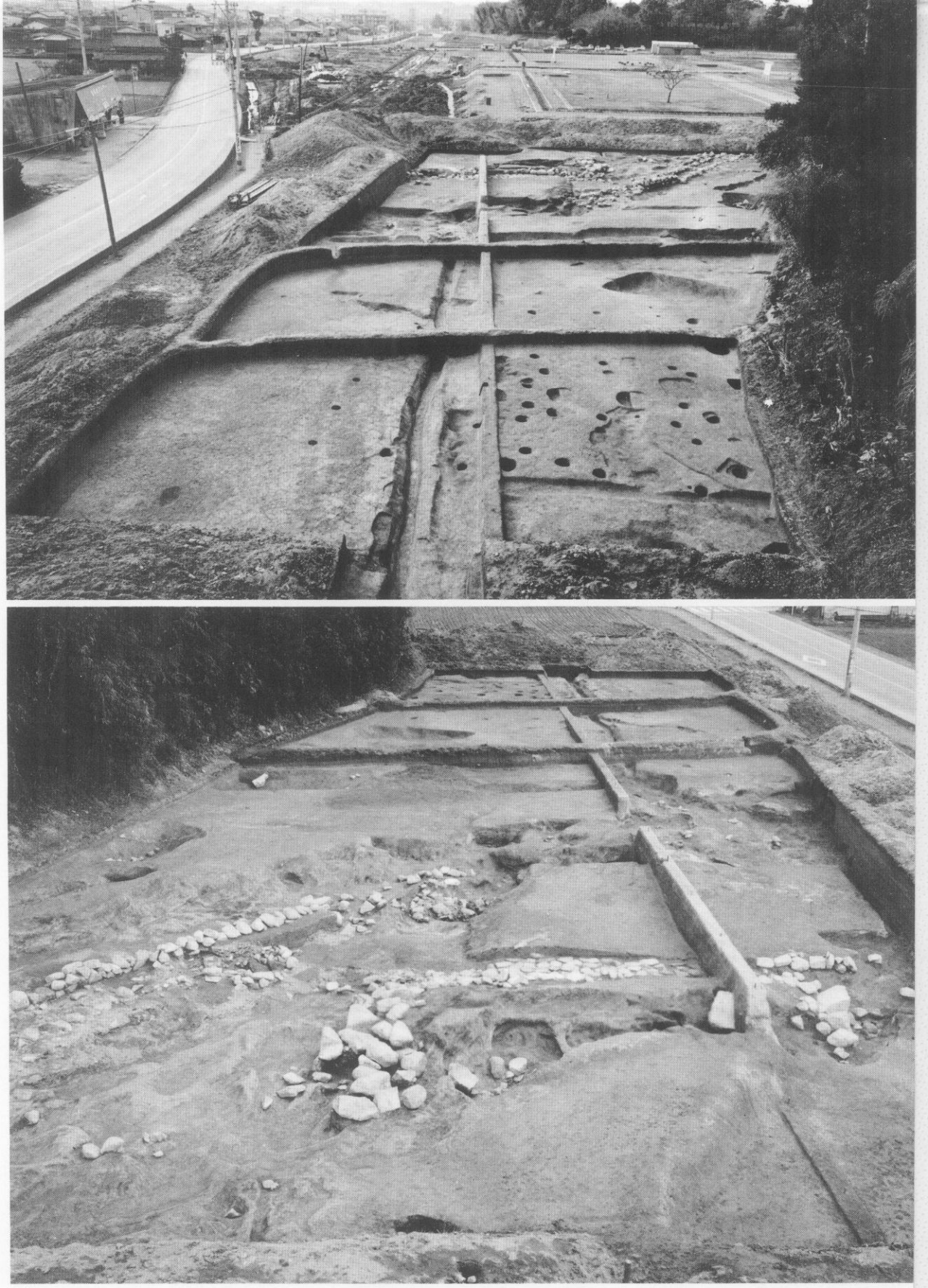
図版9　第30次補足調査　C・D・Hトレンチ







図版10　第30次補足調査　E・Fトレンチ



図版11　第35次発掘調査　全景

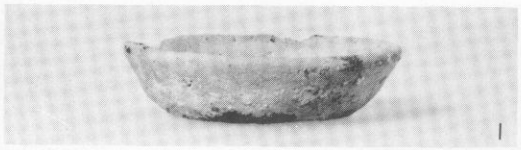


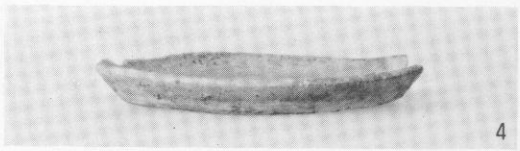


図版12　(上)第35次発掘調査　SD689　　(下)第35次発掘調査　SD687・SD688

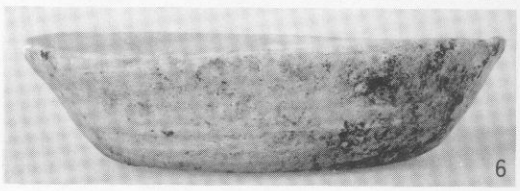


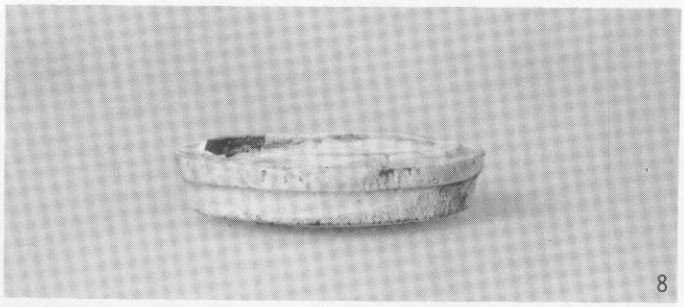
図版13　(上)第35次発掘調査　SA560　(下)第35次発掘調査　SK678



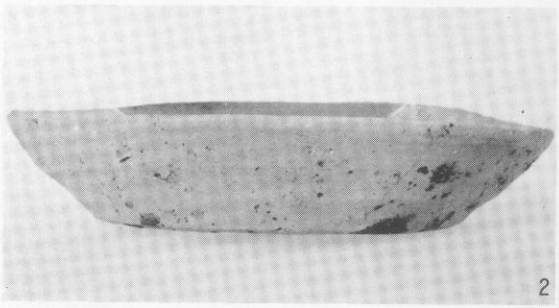


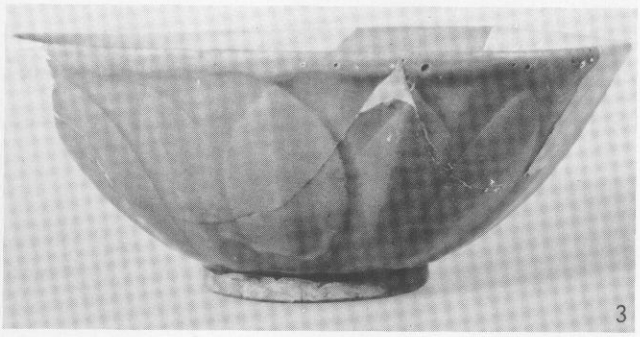






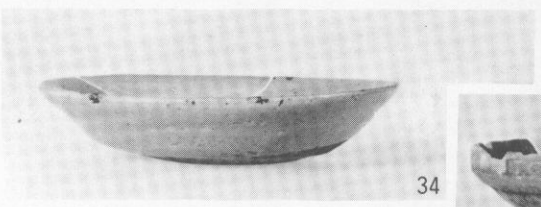


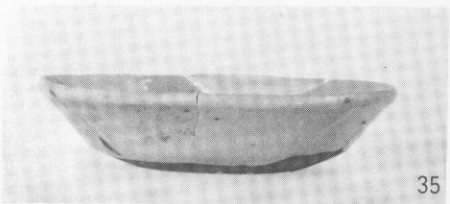


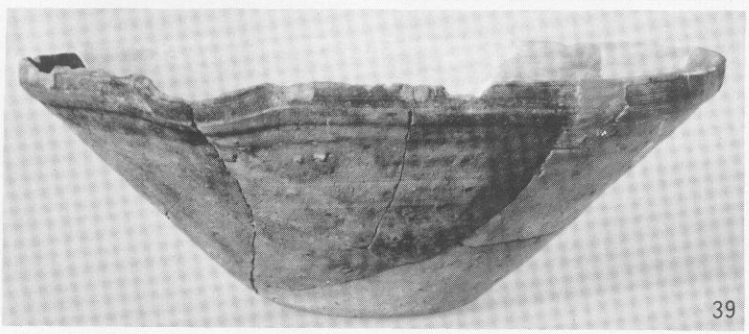




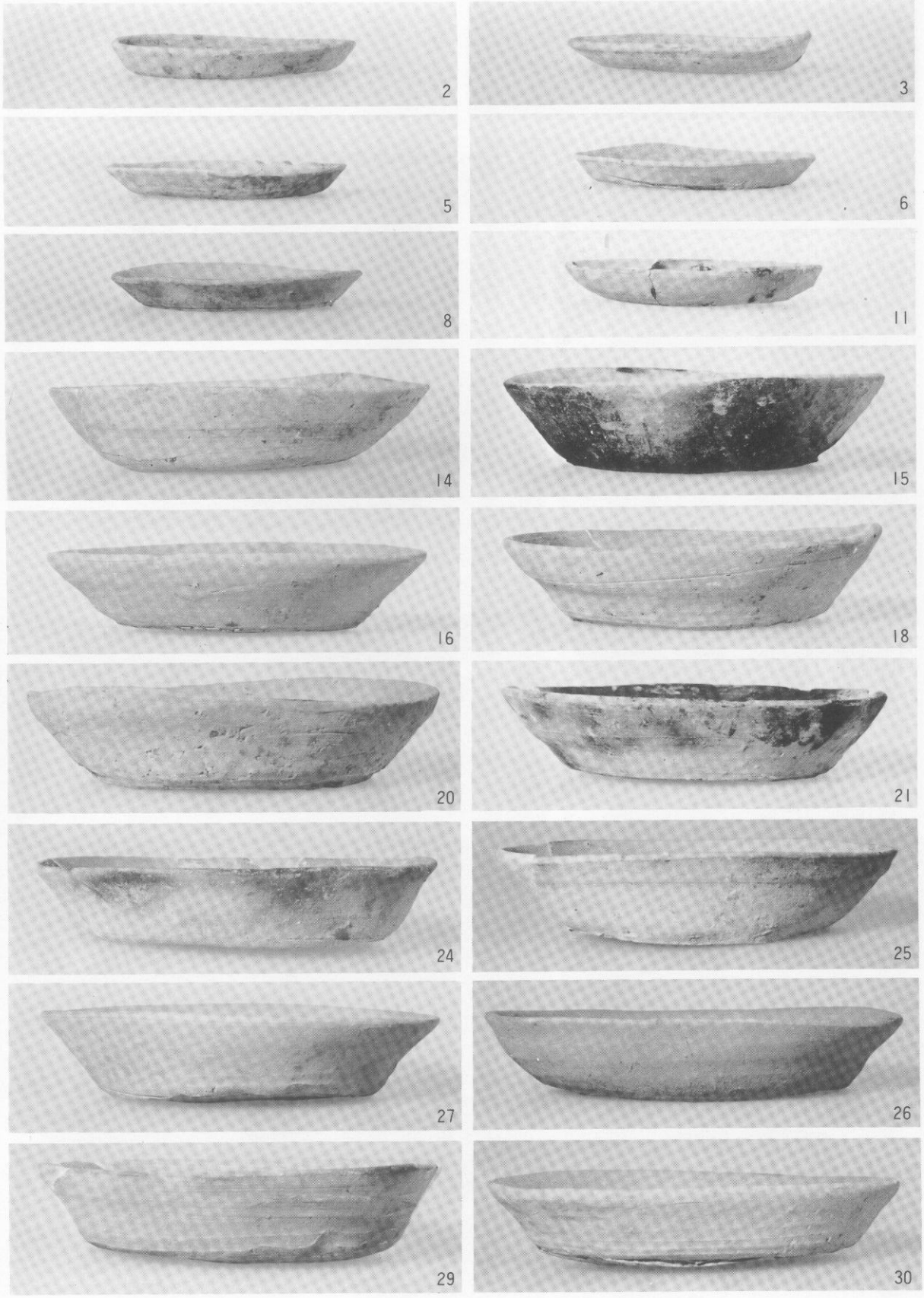




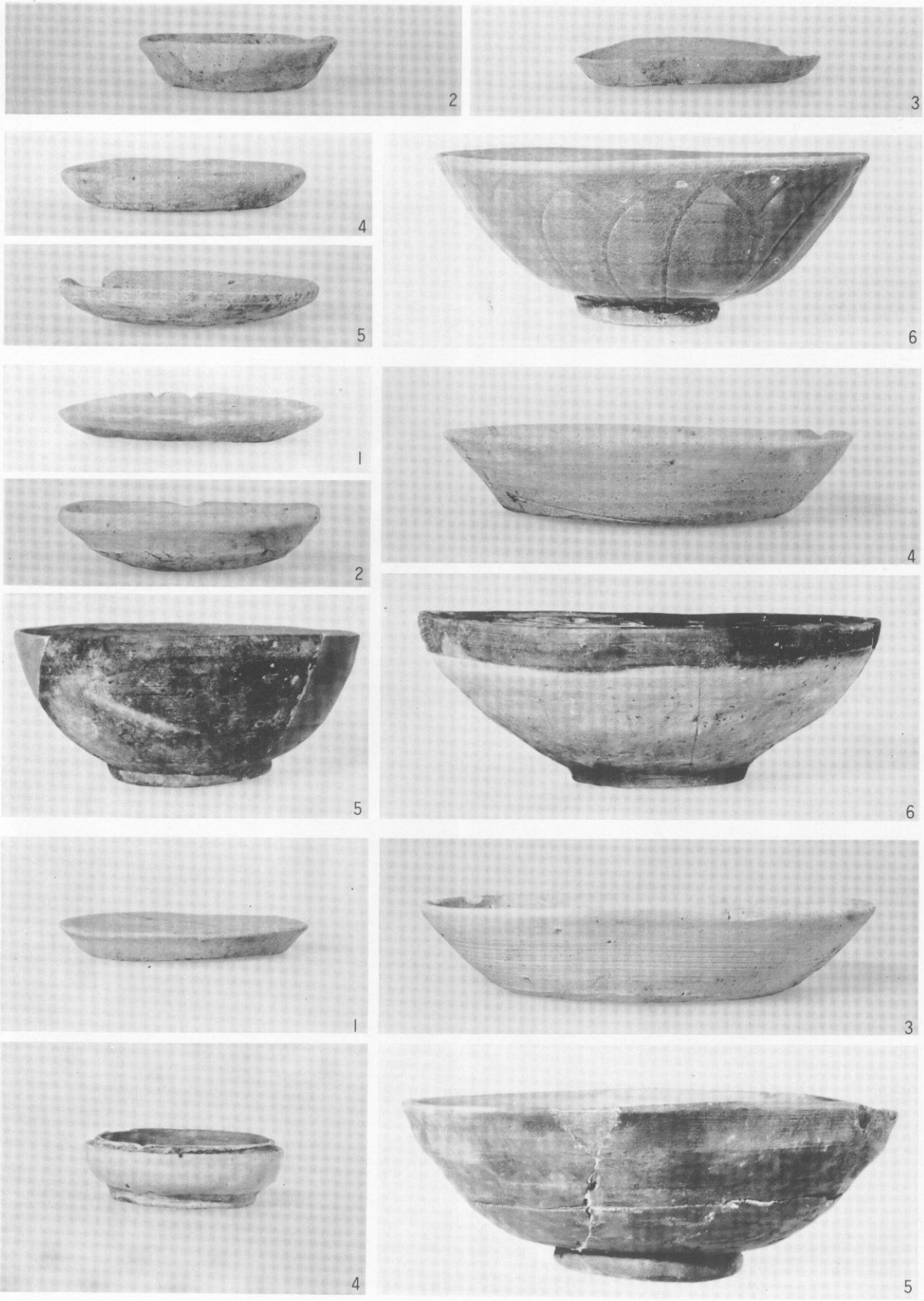




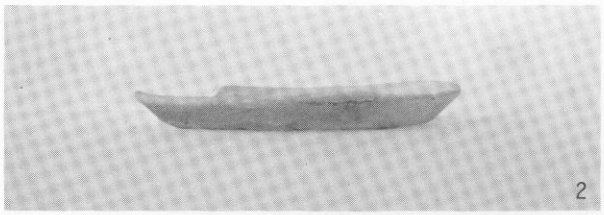
図版14　第33次発掘調査　溝SD605 Ⅰ層・Ⅱ層・Ⅲ層・Ⅳ層出土土器



図版15　第33次発掘調査　溝SD605 Ⅳ層出土土器



図版16　第33次発掘調査　Aトレンチ溝SD600　Ⅰ層・Ⅱ層・Ⅲ層・Ⅵ層出土土器

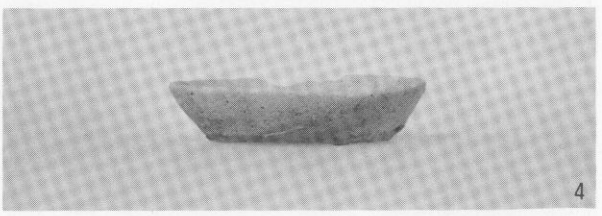


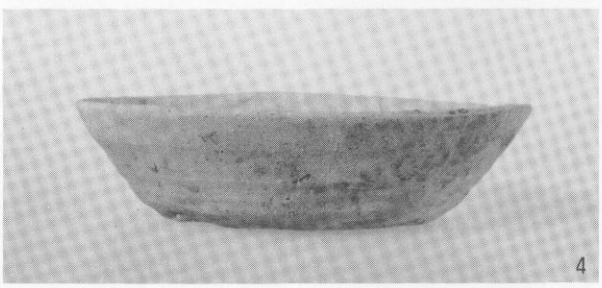








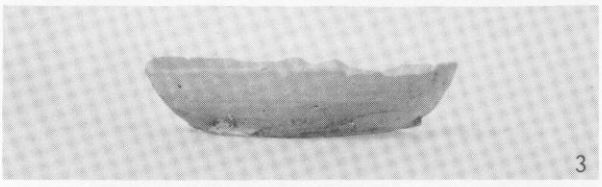


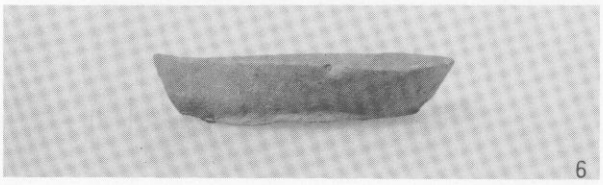








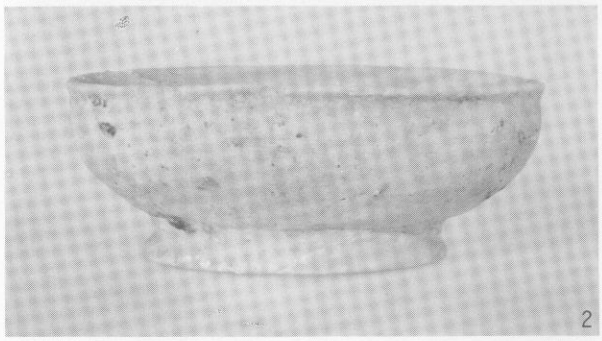


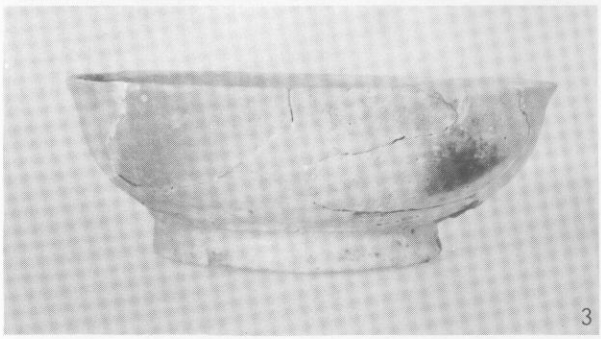


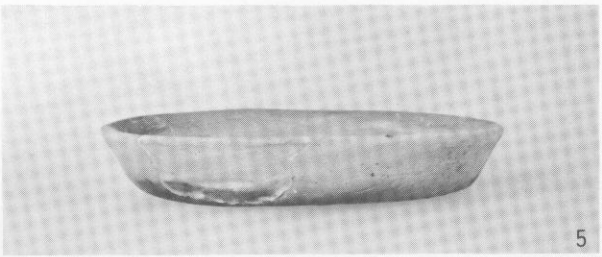


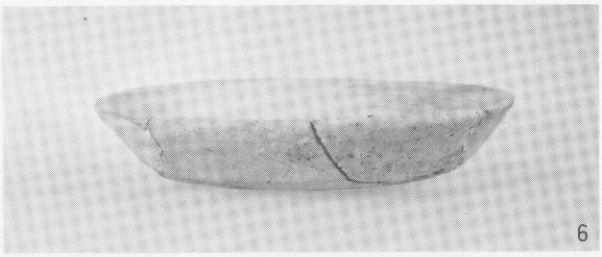
図版17　第33次発掘調査　土坑SK636・639・624・641出土土器



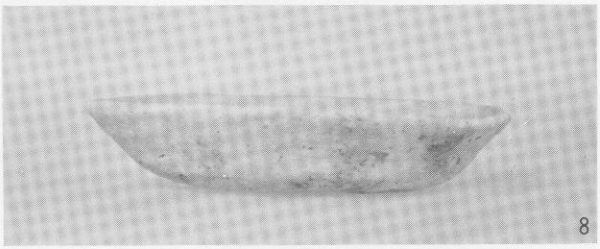


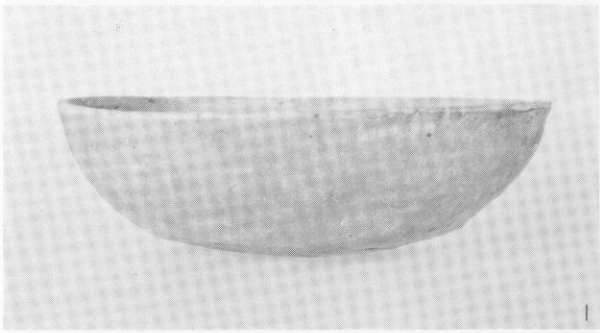


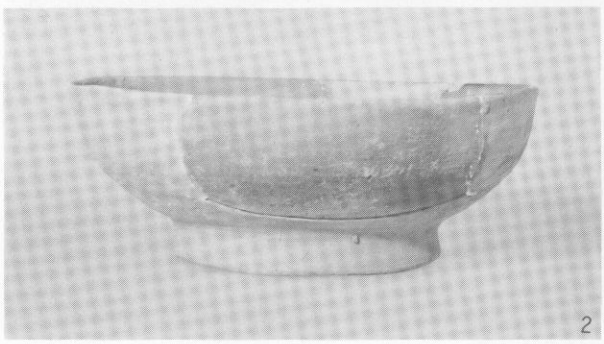


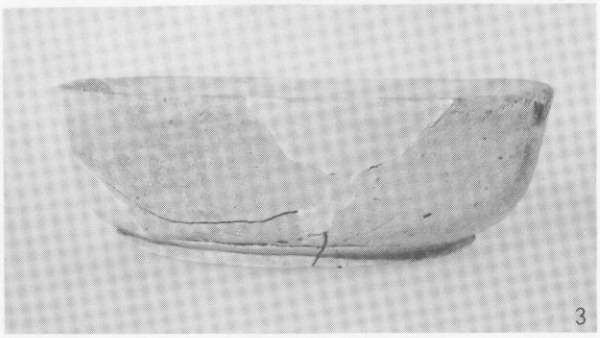






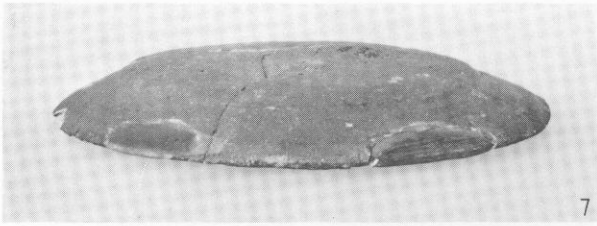


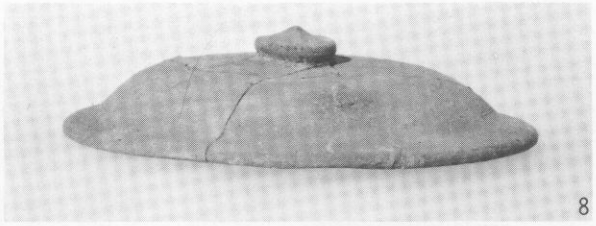


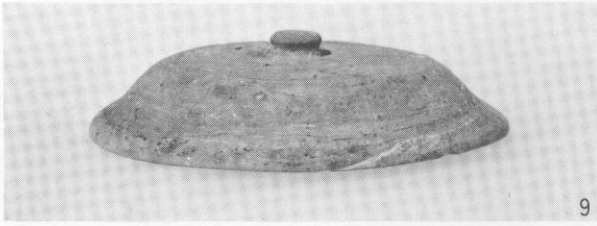


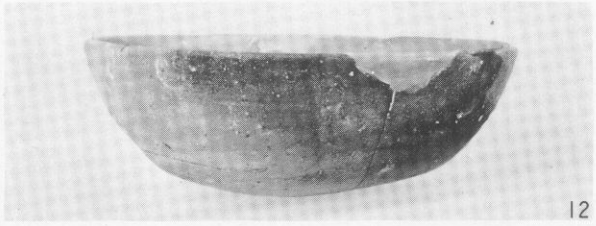


図版18　第34次発掘調査　土坑SK674・井戸SE669出土土器

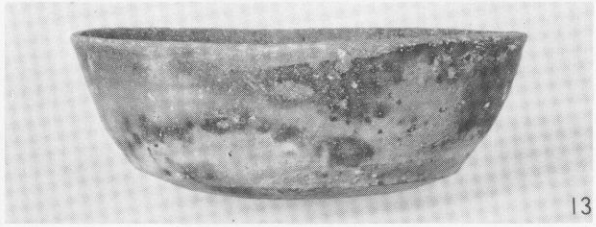

7


8


9

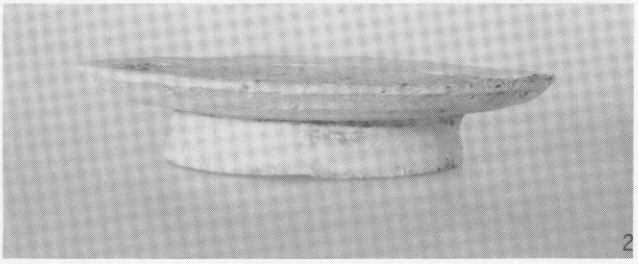

12


21

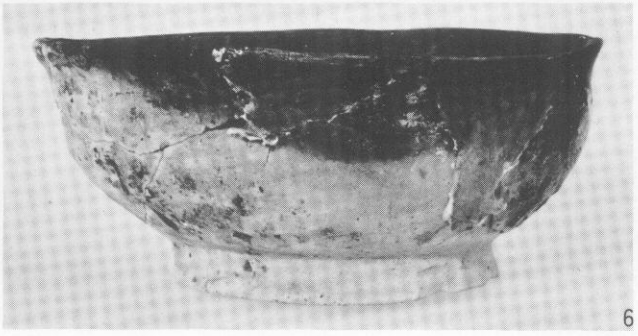

13


23

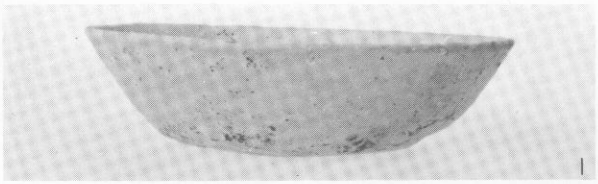

17


2

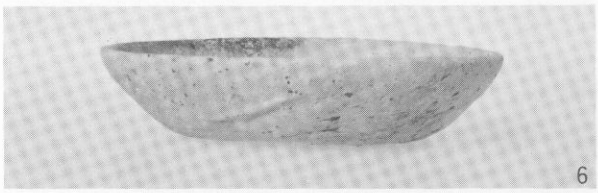


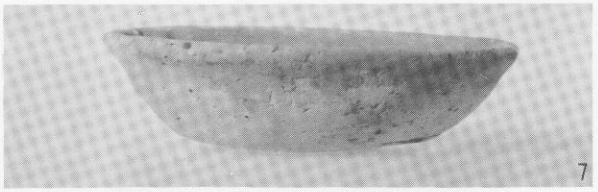

6

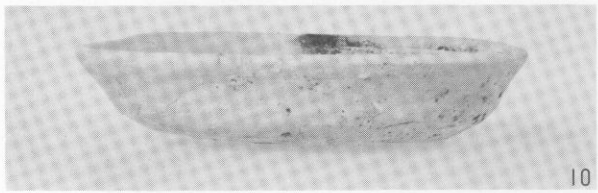
図版19　第34次発掘調査出土　土器

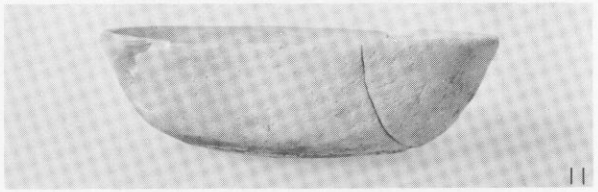


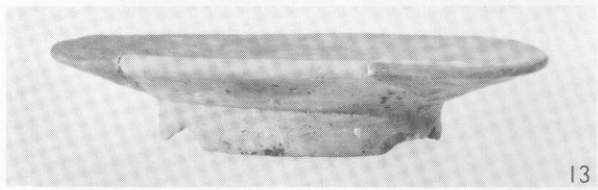


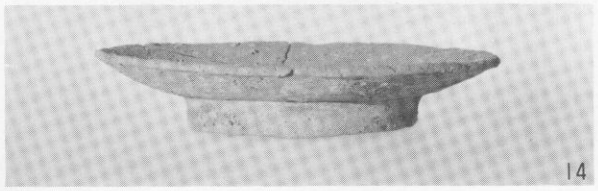


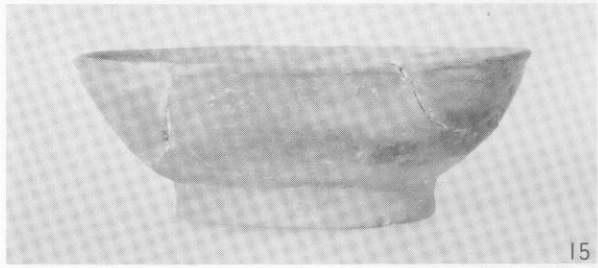


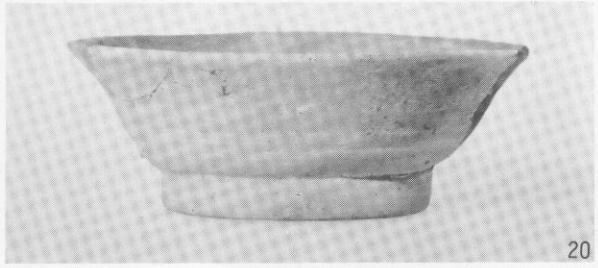








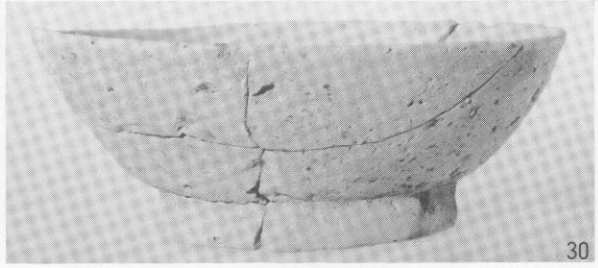




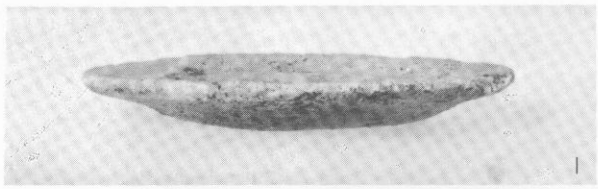




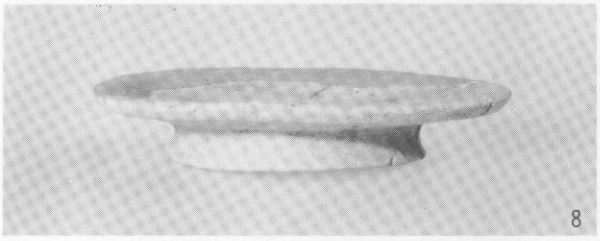




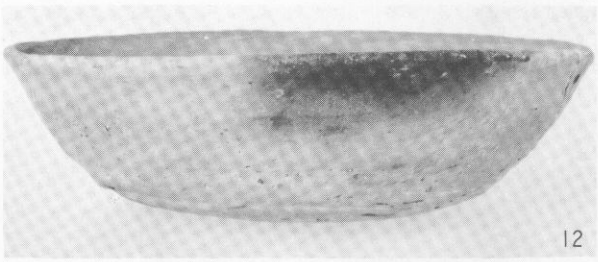
図版20　第35次発掘調査　土坑SK670出土土器

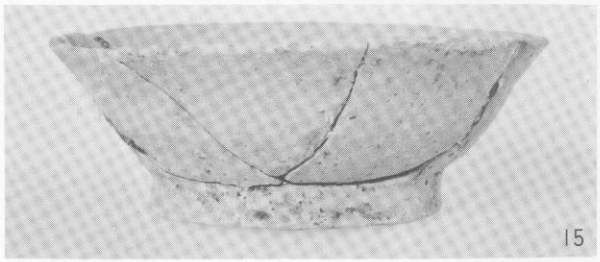


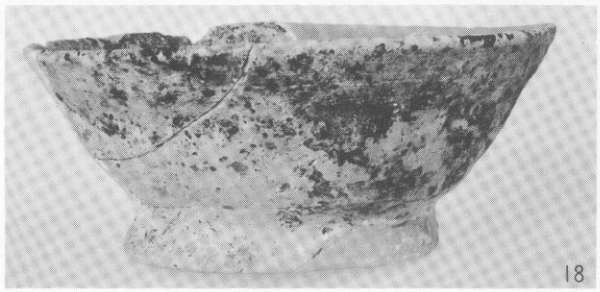






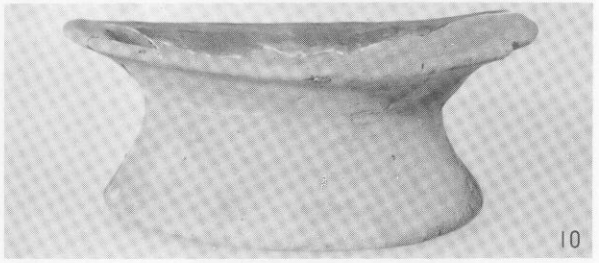


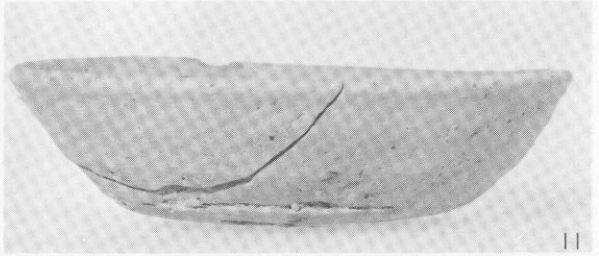


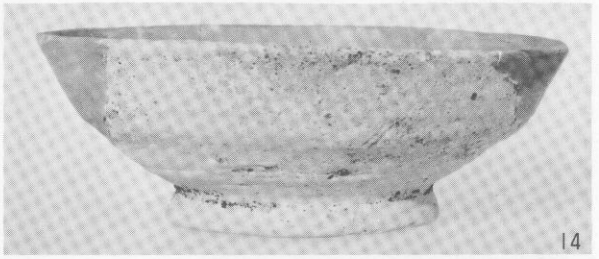


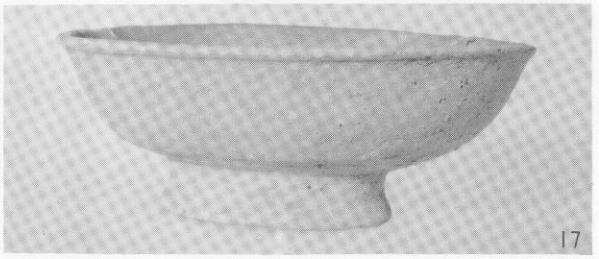










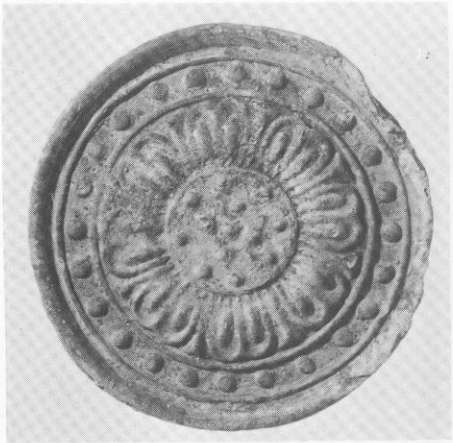


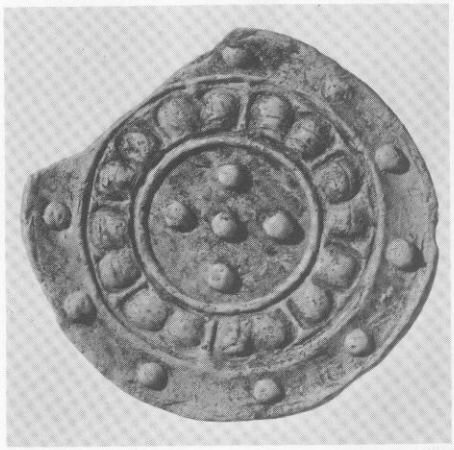
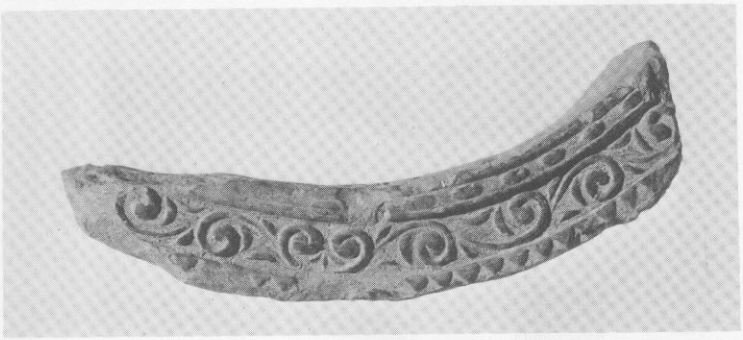
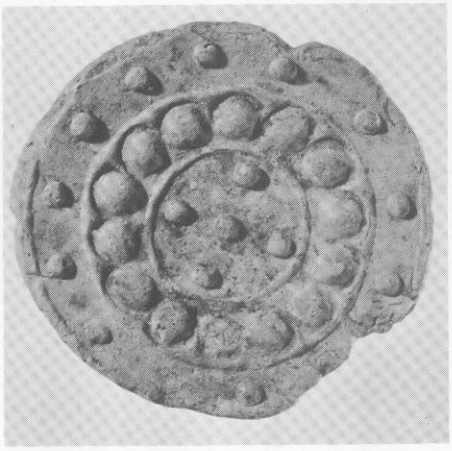
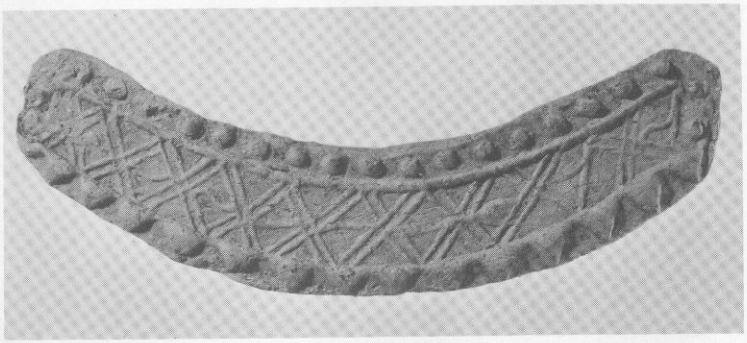
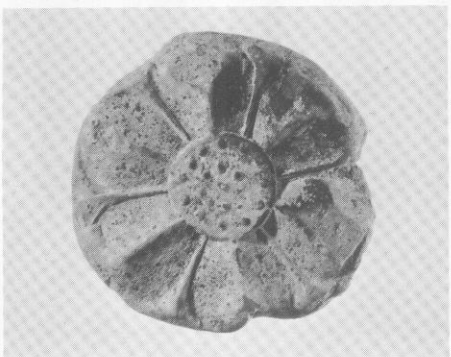
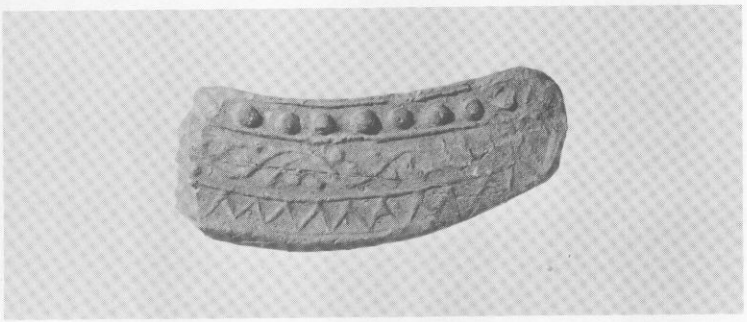


図版21　第35次発掘調査出土　土器

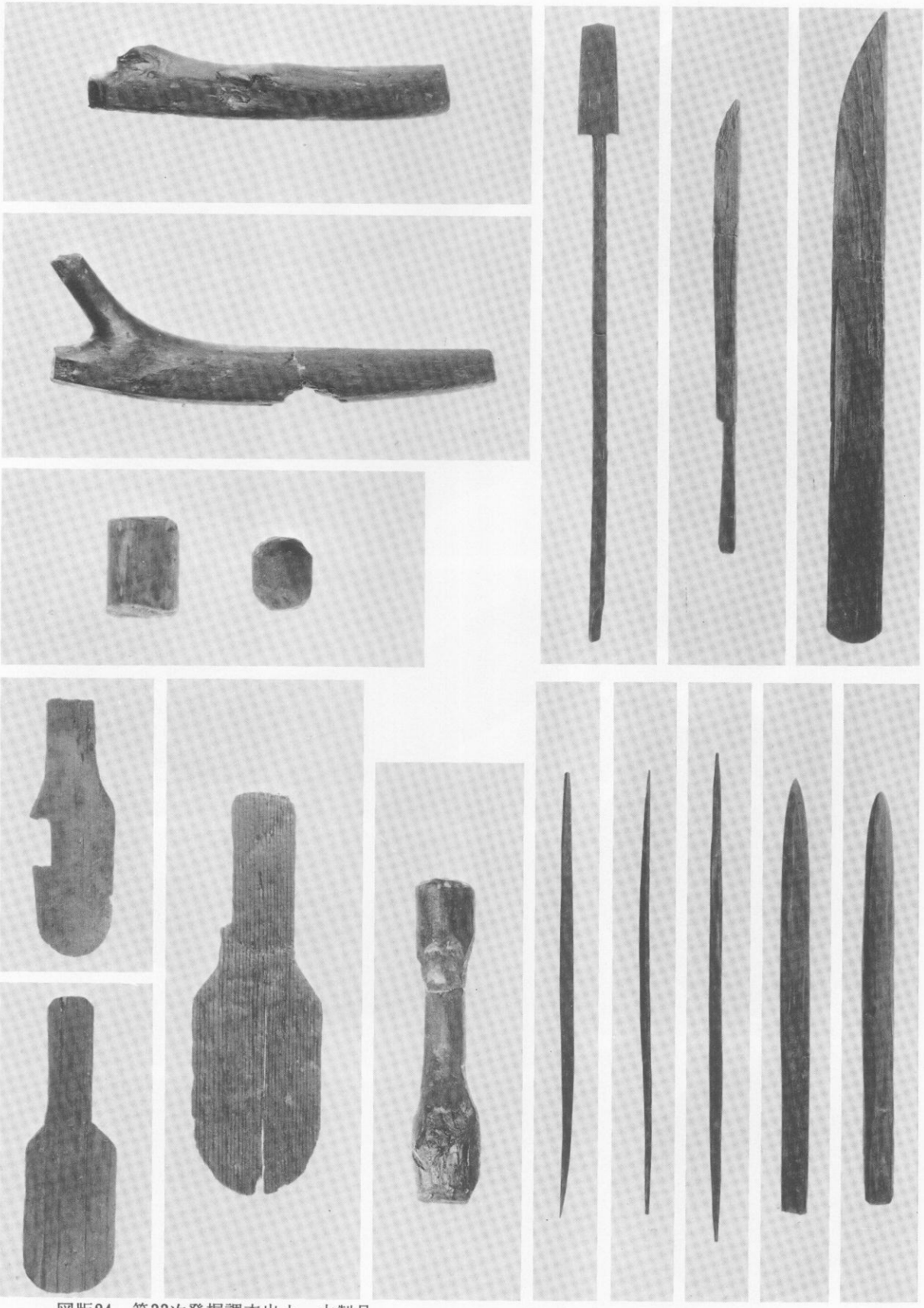


図版22　第34次発掘調査出土　軒先瓦・文様塼

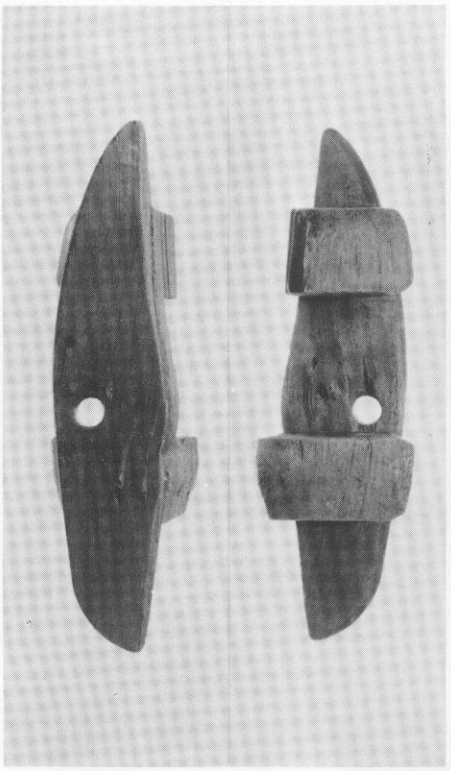


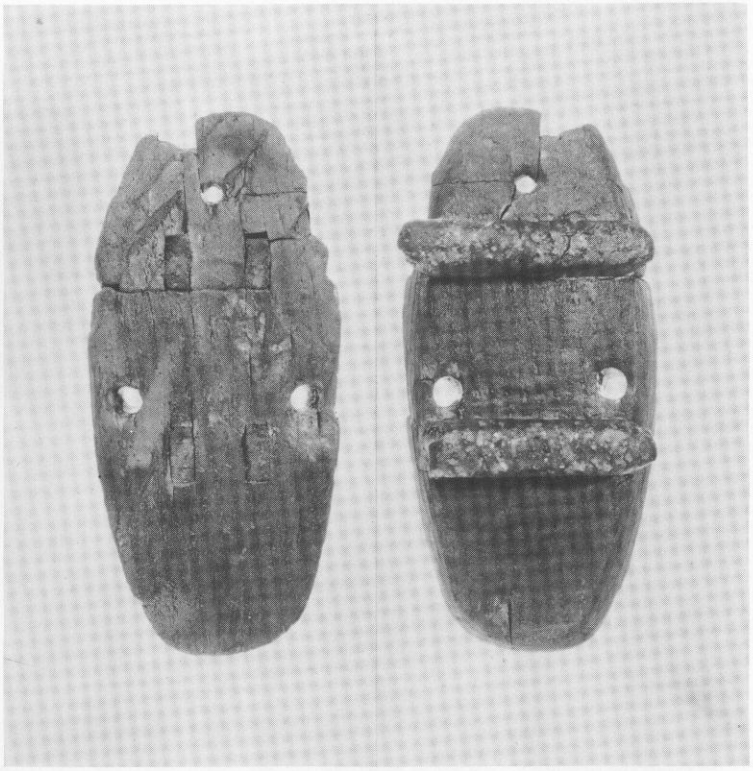







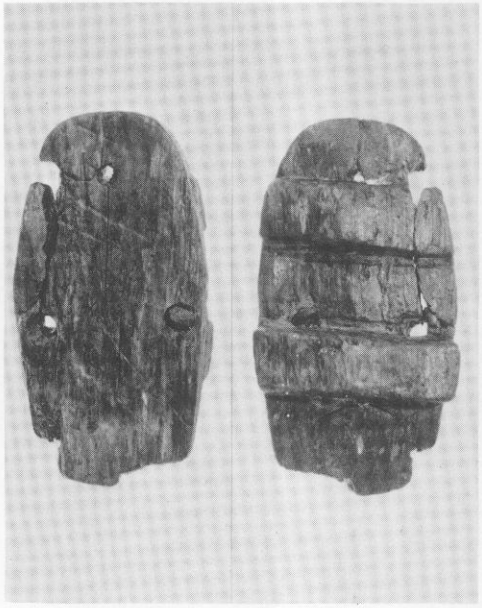

図版23　第35次発掘調査出土　軒先瓦

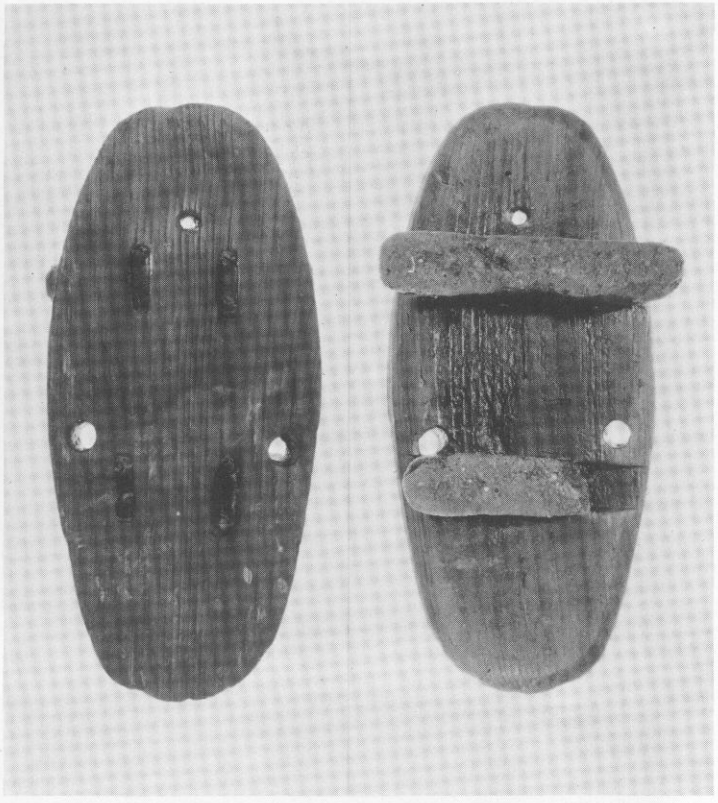


図版24　第33次発掘調査出土　木製品



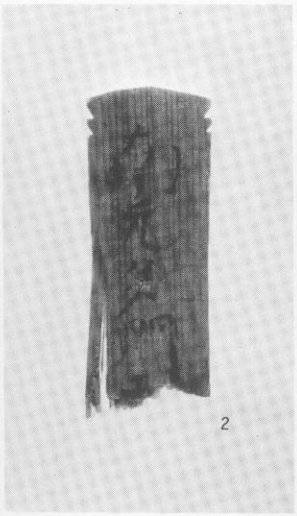


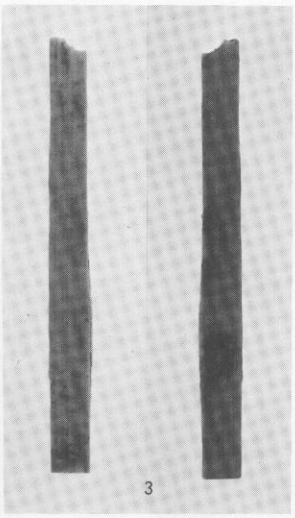


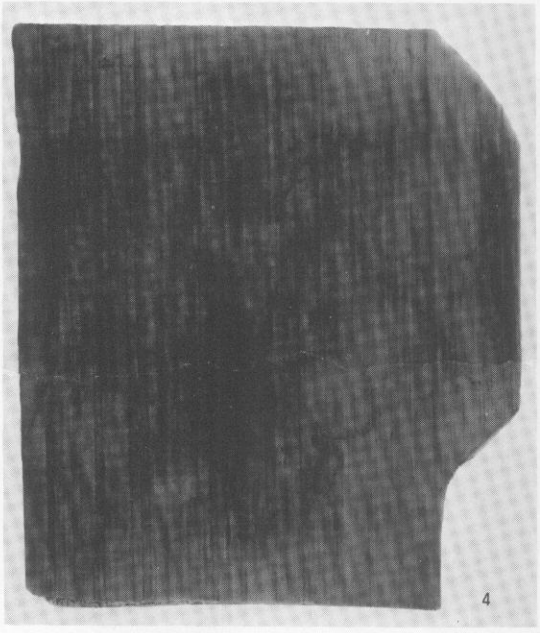


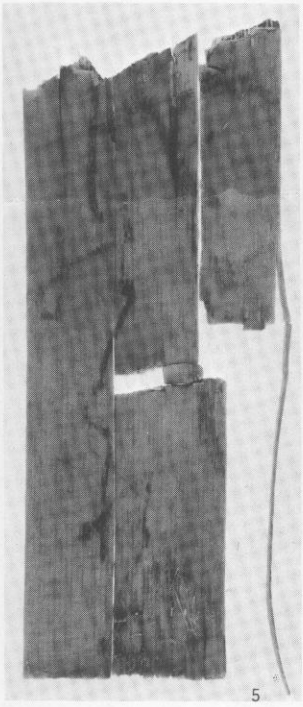
図版25　第33次発掘調査出土　足駄



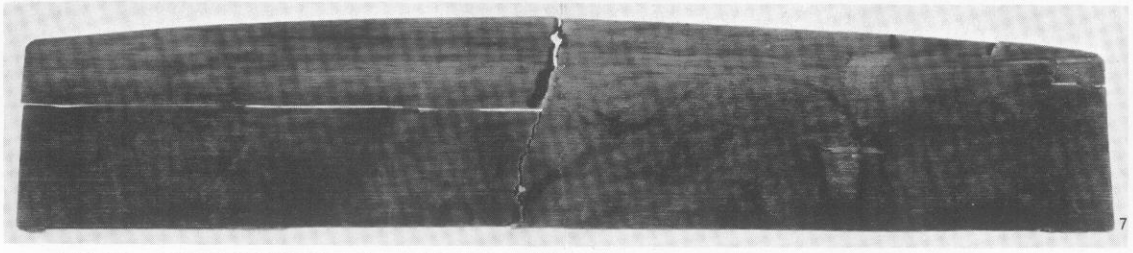




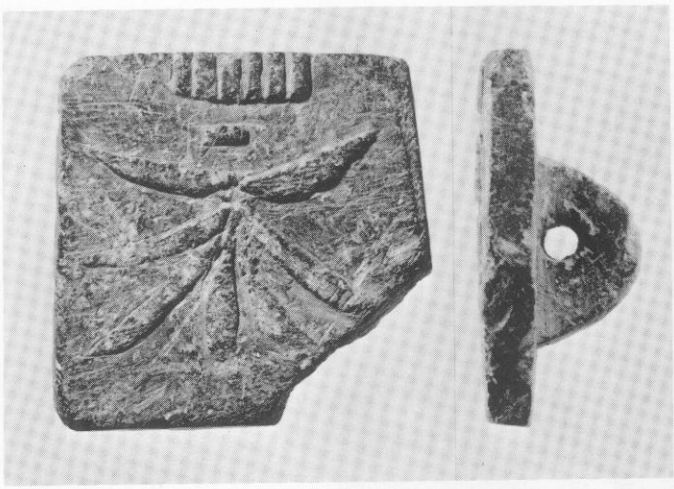








図版26　第33次発掘調査出土　墨書木札・絵馬







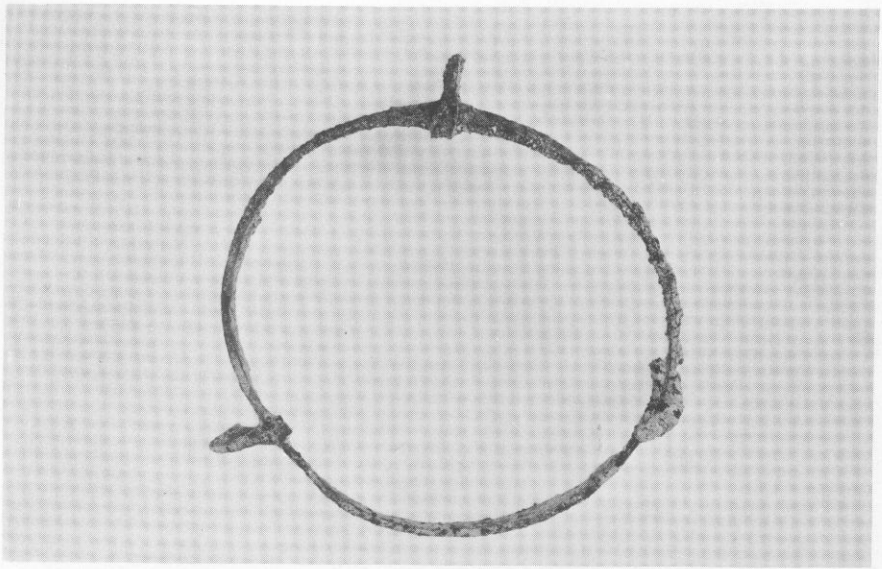


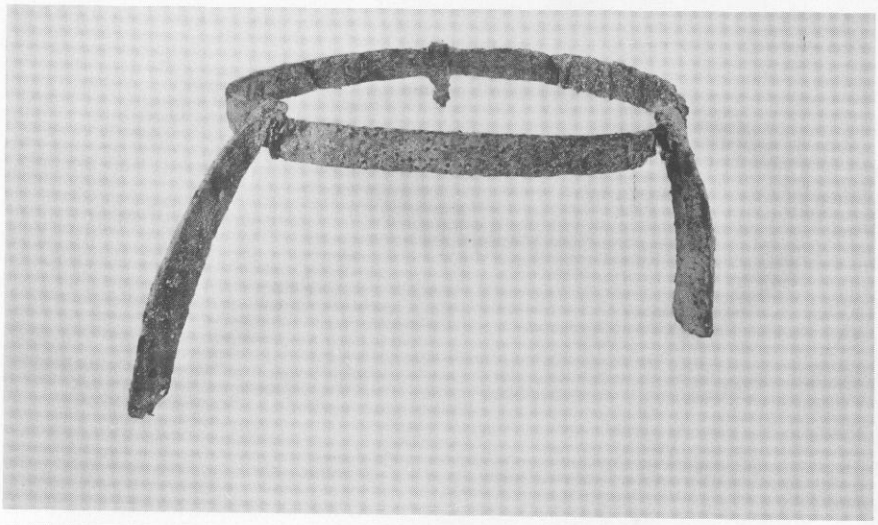


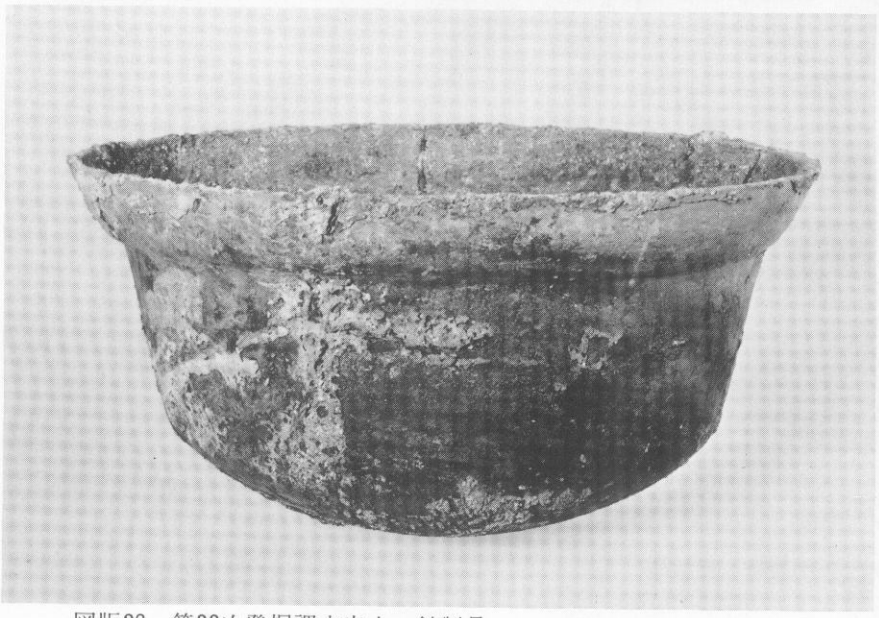




図版27　第33次発掘調査出土　土製品・石製品







図版28　第33次発掘調査出土　鉄製品

大宰府史跡昭和49年度発掘調査概報正誤表

ページ	行	誤	正
		図版6（下）第34次発掘調査SK673	図版6（下）第34次発掘調査SE669
		図版18SK674井戸出土土器	図版18土拡SK674井SE669出土土器
1	19	左郭八条九坊	左郭7条10坊
	24	左郭八条九坊	左郭7条10坊
2	4	発掘地域東半部	発掘地域西半部
	5	左郭九坊に	左郭9・10坊の境に
3	16	左郭の8条9坊	左郭の7条10坊
5	13	左郭8坊と9坊の	左郭9坊と10坊の
6	12	で10柱間	で9柱間
10	2	磁器 (7～12)	磁器 (7～13)
	3	7 （第11図－5）	8 （第11図－5）
	8	8は同安窯系	9は同安窯系
	11	9は景徳鎮窯系	10は景徳鎮窯系
	17	11は竜泉窯系	12は竜泉窯系
	19	12は同安窯系	13は同安窯系
	23	第Ⅳ層（ 第8図1～9 ）	第Ⅳ層（ 第8図32～40 ）
15	13	SD600溝出土土器（第9図・図版16）	SD600溝出土土器（第9図・10図版）
	16	第Ⅰ層（ 図版16－2～6 ）	第Ⅰ層（ 図版16－2・3 ）
	25	第Ⅱ層（ 図版16－1・2・4 ）	第Ⅱ層（ 図版16－4・5・6 ）
17	7	第Ⅲ層（ 図版16－5・6 ）	第Ⅲ層（ 図版16－1・2・4・5・6 ）
	22	高台を有し台部は	高台を有し体部は
	23	断面は	内面は
18	4	胴部釉が	胴部にも釉が
19		第4表の青白磁覧の合子－IVに1が入る	
22	4	1は内湾気味	7は内湾気味
26	15	時期において前者がない。	時期において前者が多い。
	17	早急な結諭は	早急な結論は
27	18	は仮字で	は仮名文字で
	20	⑳杓子	⑳杓文子
	20	杓子3個が	杓文子3個が
29	29	⑧毬打遊戯具（第14図・14～17）	⑧毬打遊戯具（第14図14～17・図版24）
31	17	は杓子形に	は杓文子形に

ページ	行	誤	正
32	4	から出土したものである。	から出土した鍋・五徳である。
33	7	井戸（SE561）	井戸（ SE651 ）
34	29	SK641・613	SK641・614
35	2	の8条9坊推定地	の7条10坊推定地
36	2	鏡山 猛「大宰府都城の研究」	鏡山 猛著「大宰府都城の研究」
	5	福岡市埋蔵文化財調査報告書	福岡市埋蔵文化財調査報告書
39	6	井戸SE664・669・681	井戸SE664・669・671
44	6	一括土器のしうるかに	一括土器としうるかに
46	9	229．24cm	229．24m
53	2	撤底的	徹定的
52	27	検立されなかった。	検出されなかった。
53	9	検出しまた	検出し、また
54	8	を併ったが	を伴ったが
	22	政庁中軸線から約117．14mで	政庁中軸線から東へ約117．14mで
	25	U字溝を呈する	U字状を呈する
55	3	北東側を石面	北東側を面
	21	約9度南側	約9度東側
56	1	瓦片が検出した。	瓦片を検出した。
	28	坏に底く外に	坏に低く外に
61	28	中世土師器	平安時代土師器に
62	2	土留溜	土器溜
63	5	外区の珠文も13に対し11である。	外区の珠文も11に対し13である
	10	高く棱線	高く稜線
	26	1個体として	1単位として
	27	それが13で	それが13個で
65	1	唐津の上、下	唐草の上、下
	3	文字瓦は現在228点	文字瓦は現在226点
	9	石組溝埋土等	石組溝埋土等
66	7	官衛地区の調査	官衙地区の調査
		図版20 第35次調査 土拡SK670出土土器	土拡SK678出土土器